
屑と天才と戦争嫌い

睡眠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屑と天才と戦争嫌い

【NZコード】

N1986V

【作者名】

睡眠

【あらすじ】

幼い頃から”屑”呼ばれてきた少年。全ての人々から罵倒され、毎日罵声を浴びさせられていた。彼もそれを受け入れている。

そんな少年には、ある意外な素顔があつた。

”天才だが戦争が嫌い”

頭の狂つた戦争嫌いは、『試験召喚戦争』を行う文田学園で

どんな学園生活を送るのか？

頭の狂つた”天災”が織り成す学園小説

プロローグ 肩の始まり（前書き）

始めての方、そうでない方、睡眠です

結局始めましたバカテスの小説

主人公結構外道にしてみました

それが嫌いな方は読まないでください

作者は厨二病患者なのでそれも嫌いなら読まないでください

では、プロローグです

プロローグ 肩の始まり

視点一 ???

『うざいんだよお前！』

うん、確かにそうだね。

『どつか消えてくれない？』

出来れば消えたいよ。

『死ね肩が！』

肩で結構。寧ろ褒め言葉？

『勉強もしないで悪わばっかりして！』

勉強つて算数と国語以外は不必要なんじゃないの？ 故に小学を卒業した時点で僕の教育は終了した。

『少しほちやんを見習になさい。』

なぜそこそこの名前が出てくるんだ？ 悪いがあんな奴を見習つぐらにならハゲになつた方がマシだ。

『くんが怪我したのになんで笑つてるの？』

なら逆になんで笑っちゃいけないの？

『「Jの肩が！」』

うん

『肩ー』

うん

『死ねよ肩ー』

うん

『どつか逝けよ肩ー』

うん

『肩ー』

『肩ー』

『肩ー』

何回も言わせるなよ。

僕は自分が屑つて分かつてゐるから、それ以上言つ必要はないよ。

そう、僕は”屑”だよ。

なぜ人を傷付けるかって？

楽しいからに決まってるじゃないか。

なぜ他人の気持ちを平氣で踏みにじるかって？

踏みにじつた時の顔を見るのが快感なんだよねえ／＼

両親は君のことをなんとかしないのかって？

両親？　なにそれおいしいの？

少しは罪悪感はないのかって？

そんなこと僕に聞くか普通？

どうして誰かが困つてゐる時は離れて笑つてゐるだけなのかって？

道行く人々全員を”助ける”ほど人間は生命体として出来上がりっていないから、

そんなことをこの僕に期待するのはとんだお門違いだよ。

僕にとつてはそんな人間染みた行動なんて馬鹿馬鹿しいんだ。

この僕という存在を作っているマイナスの感情は、本当に受け入れた感情だけだ。

悲しみも、憎しみも、苦しみも、痛みも、全て受け入れた。

だから、他の人も分かつて欲しいんだ。

悲しみも、憎しみも、苦しみも、痛みも、全て他人にも与え、
僕の気持ちを分かつてもらいたいんだ。

いわば一種の自己満足だね。

なぜそんなに狂っているのかって？

ハハハ、そんなの簡単だよ。

君達が僕を狂わせたんだよ

プロローグ 肩の始まり（後書き）

いかがでしたか？

この小説の第一声が『うざえんだよお前！』はどうでしょ？

最初から酷い扱いを受ける主人公、この小説ではそれが通常です
ちなみに名前が で塞がれているキャラは主要オリジナルキャラで、
で塞がれているキャラは名無しモブです

今回の質問

これは作者が考えた読者に回答してもらいたい質問

回答は自由です。感想欄などで答えてくださいれば嬉しいです

王道の質問ですが、一番好きなキャラは誰ですか？

ちなみに作者は須川です（なんてマイナーな）

異端者には死を！

（睡眠）

一問 肩とテストと振り分け試験（前書き）

書き置きストックその1

主人公の名前が登場します

多分今話で主人公がどんな人物かが理解できると思います

では、一話です

一問 肩とテストと振り分け試験

朝、目覚ましがなる。

いつものことだ。

布団に寝転がつたまま目覚ましを止め、再び布団の中に潜る。

いつものことだ。

自分の愛犬である柴犬の太郎たろうに顔を舐め起こされる。

いつものことだ。

ネーミングセンス無いって思つた人、後で体育館裏たいいくかんうりに来てくれる。

僕の朝はいつも通り進んでいた。別に変わった様子もなく、特別おかしなこともおきない。

布団の中から起き上がり、頭を搔きながらリビングへと向かい、後ろから太郎が着いて来る。太郎以外は別に誰も僕の朝を出迎えてくれる者は居ず、一人で簡単な朝食を取る。

昨日買い置きしたコンビニのおにぎり。それを無愛想に食い、制服へと着替える。

これが僕のいつもの日課になっていた。

現在時刻は朝の六時。

学生にしてはかなり早い時間帯だが、僕にとってはこれが普通。

着替え終わると太郎は既にご飯を食べ終わっている。

こいつは食べるのが早いから助かるな…

玄関を開け、太郎を散歩に連れて行く。
本当はあの変なロープ的な物を
付けないといけないんだけど、太郎は僕の言つ事
に忠実だから必要ではない。

外へ出る前に部屋の全体を見てみる。

僕のこのアパートの部屋は最上階の一一番端っこ。

1LDKと一人暮らしには快適な空間だけど…

…我ながら殺風景な部屋だと思つ。

リビングには旧式のアナログテレビにこたつ、
数冊の小説が敷き詰められている本棚のみ。

キッチンには小さな冷蔵庫に食器が数種類。
太郎のご飯用のも含めても指で数えられるほど。
また、その内の四割が太郎用という少なむ。

僕は料理技術が皆無のためフライパンなどは殆どない

廊下の突き当たりにあるのは「」の部屋唯一の寝室、そして僕の部屋でもある空間。そこは多分このアパートで一番殺風景だと思つ。

部屋にテレビは愚か本棚も置いておらず、ベッドすらない。あるいは畳んである布団に机とタンス、そして参考書や教科書などを壁に積み上げた部屋の隅つ「」。私物など殆どない。

唯一の私物はタンスの上に置いてある一つの写真だが、倒れていて手入れなどは殆どしておらず、埃を被つている。

もつと私物を入れた方がいいか?と時々思うがあまり欲深くないのでなにがいいのかが分からぬ。

太郎もいつも僕の布団の中で寝てるし寝る場所に困ったことはないしね。

そんなことを急に感じたが、僕はこれが気に入つてゐる。

あまりじけいやじけやしていないので落ち着くし、なにより部屋が広く感じるんだ。

玄関の鍵を閉め、歩き出し、そのすぐ横に太郎が続く。

しばらく歩くと、僕と同じく早朝の散歩をしている人物を見掛け始める。どれも老人ばかりだ。健康に気を遣つてゐるのか?

「おや、君じゃないか」

すると、一人の年老いた男性が話しかけてくる。

「…藤さんですか。お早うございます…」

この老人は散歩をしている時に顔馴染みになってしまった
一人暮らしの人物、藤周蔵。^{ふじじゅうざく}妻に先に逝かれてしまい、
孫も息子も居ない寂しさを紛らわすために散歩をしているという。
藤さんから
したら僕は孫みたいな存在なのかな?

「今日も散歩かい?」

「運動させないと太郎が太るんで」

「そりゃいそりゃい。では、気をつけるんだよ」

そう言いながら反対方向へと歩いていく。

藤さんは僕と普通に接してくれる数少ない人物だ。
故に僕も藤さんのことは嫌っていない。

しかしその後は特に知り合いに会つこともなく、散歩を
終わらせ家に戻る。

相変わらず、道行く人に睨まれながら。

「ふああああ…」

現在時刻：午前八時三十分

教室の中は沈黙が流れしており、鉛筆がカリカリと走る音しか聞こえない。

今日は生徒にとつては大事な日らしい。

”振り分け試験”といい、このテストでの成績が僕にとっての第一学年のクラスを決める。

つまり、この試験での成績が自分の二年生としての学園生活を決める試験なため、全生徒が熱心の勉強した上で試験に臨む。

そんな中、”例外”は必ず存在する。

僕もその一人だ。

「まずは…名前つと」

名前：
仲野宮浪都
なかのみや るうじ

今更だが僕の名前は仲野宮浪都。別段変わった名前でもない、

とても地味でよくありそつたな名前だ。

名前とはテストでは一番大切な部分であり、
これ一つで満点から零点にまで落とされることもある。
これを書かなかつたら多分社会じゃ生きていけない。

そんな大事な部分を僕は名前を書き入れ、適当な問題を見つける

73)

科目： 日本史

第二次世界大戦時に大日本帝国海軍の連合艦隊司令長官であり、
ミッドウェー海戦時に大敗し、翌年ブーゲンビル島上空で米軍に撃
墜され
戦死した軍人の名前を述べよ

答え：

この問題を見た瞬間、僕は思考をシャットアウトし、机に平伏した。

別に問題が難しい訳じゃない。いや、それ所がこんな問題は簡単だ。

僕が地机に平伏した理由はただ一つ。

問題が長すぎるんだよ…

こんな感じやる気が無くなる。

運がないね、適当に見付けた問題がこんななんて。

僕はそのまま目を閉じ、意識を自分で吹き飛ばした。

「や」までー 全員、筆記用具を仕舞え！

「ふあ？」

教師から終了の声が聞こえ、目が覚める。

うーん、どうやら寝てこの間に終わってしまったたらしく。

試験時間は確か一時間ぐらいか？

そんなに寝ていたのか…

僕は白紙の解答用紙を教師に渡し、帰路へと歩いていく。

渡した時に教師にかなりビックリした表情をされたが、無視する。

「ふあああ…多分、いや十中十でFクラスだね」

簡単に説明しよう。

「ここ文月学園には六つのクラスが存在している。

上から成績トップのAクラス、Bクラス、Cクラス、Dクラス、Eクラス、そして最下位のFクラス。

成績トップクラスのAクラスは最先端の設備で教育を受けられ、下に下りるほど設備が悪くなる。AとFでは天地の差があると言わ
れている。

こここのテストでは点数上限が無いため、無制限に点が取れるからAクラスに入るには最低でも数百点は取らないといけない。

そんな厳しい世界の中、僕は白紙のまま解答用紙を出した。

つまり0点。

Fクラス入りは確定だな。

文月に編入して初っ端から零点とはな。我ながら関心だ。

「ふあああ…別にクラスなんてどうでもいいか

「へえ、ついつい試験を受けてきた生徒のセリフとは思えない台詞ね」

後ろから何者が僕の独り言に答えてくれる。

「ただの独り言に答えるなんて、誰かは知らないけど
相当盗み聞きに長けてるんだね。正直に言つと引くわ」

「フン、あんたならいついつと思つてた」

「誰だ？ 僕を知つているのか？」

後ろを振り向くと、そこには僕と同じく真っ黒な黒髪を腰の辺り
にまで伸ばし、
背が僕と同じくらい高い女子生徒が立っていた。男子である僕と同じ
じ背つて結構高いね

「あ～あ、君か…」

そして、僕の知り合いでもある。

「”あ～あ”とはなによ。せつかく久しぶりに会ったのこ

「僕は絶対に会いたくなかったんだけどね、長瀬」

長瀬流歌。^{ながせ るか}僕の幼馴染でもあり、

とうの昔に離れ離れになり、なぜか僕のことを嫌つてゐる執念深い
少女。

「なんで名字で呼ぶの？ 昔みたいに流歌でいいじゃない

「君とそこまで仲が良かつた覚えはないけど？」

「呼びたくないのも当然ね。だってあんた、今はもう皆から”屑”って呼ばれてるんでしょ？」

屑、か。

それが僕のあだ名。

曰く、勉強もせず、愛想の無い、無感情で冷血。他人の不幸を誰よりも喜び、好く、歪んだ人格。そして、近づく者全てを凍てつかせるようなオーラ。故に”屑”。

「それになにか？ 僕はその呼び名に不満は感じないし、否定もしない。君もそうなんだろ？”天才”さん」

顔に笑みを浮かべながら挑発的にそう呼ぶ。

これが彼女の呼び名。

成績優秀、運動も抜群、他人から見れば綺麗な顔立ち、そして僕以外には優しい性格。十年に一度の才能と名高く、僕とは正反対な人物。

そう呼ぶと少し怒りの表情を浮かべながら僕を睨んでくる長瀬。

あはは、こんなことで怒るなんて、天才さんも幼稚だね？

「あんたにそう呼ばれる筋合いは無いわ！」

「ククク、こんなことで感情的になるなんて、天才さんは
酷く幼稚なのか？」

「”肩”が言つてくれるわね…」

おおおお、怖い怖い。

やつぱ人間のこんな怒つてる顔を見るのは最高だよー。

「まあまあ、やつ怒らないで。鹹かつたのは
謝るからわ。はい、『めんなさい』！」

ペコッと頭を下げる。

すると、益々怒りに満ちた表情になつてこく瀧瀧。

あつまつはー、楽しいなア！

「う…ー。」

そのまま僕の田の前まで行き、頬を思いつきり
平手で殴られる。ドラマで言つ女の子が人を殴る時
にやるあれだよ。

「（フー、フー、フー…）」

ああ…どうやら落ち着いたみたいだね。

「怒りが収まつたかな？ はは、おかしいねえ、いつもの

”成績優秀者、皆から好かれてる”長瀬流歌りやんばび」元行つたのかなあ？ あはは！」

立ち上がり、再び貶す様に笑う僕。

久しぶりだなあ、これをするの。

やつぱり人を怒らせたり悲しませたりするのは快感だよ…

「…あんたには乗せられない…！」

「でもさっきまで思いつきり乗っちゃってない？

言つてることと行動が矛盾してるぜ、天才さん？ あはは…」

ギリギリと音が聞こえそうなほど拳を強く握り締める長瀬。

あはは！ いつゆう”天才”とか”完璧”とかって言われてる
人間をこんな風に怒らせるのつていつやっても傑作だよ！

「…話が逸れたわね…あんた、テストの出来前は？」

「天才さんが僕みたいな肩にそんな事を聞いてどうするつもりなん
だ？」

「黙つて答えて！」

「おお怖い怖い。出来前は、全然かな？」

そう言つと一瞬「え？」って表情になる。

なにをそんなに驚いているんだ？

「全然ですって？」

「そり。僕は一問も答えられないままテストは終わった。
まったく、一切勉強しなかつた罰がここで来たか。これじゃあFク
ラス決定だね」

より一層強く僕を睨む長瀬。

にかしたか？ テストの結果なんて僕の勝手だろ？

「あんた…どうこういつも？」

「と聞こますと？」

「なぜあんたがFクラスなのよ。普通なら「はいストップ！」そ
れ以上は言うな」

…やっぱりなにか企んでいるようね…」

なぜ僕はこんなに警戒されてるんだ？ あ、肩だからか。

「企む、ねえ？ 強いて言うなら僕は出来るだけ長瀬とは
別のクラスに入りたかった訳よ？ それで天才さんのお前とはまつ
たく

正反対のFクラスにする」とこした。まあテストを受けるのも面倒
だったんだけど

もう怒りを通り越して呆れているようだ。

でも、どうやら落ち着いたみたいだね。

いやあ、こんな人目の付く所で僕を殴つたり大声出したりしてたからね。

周囲の視線がこっちに刺さる。僕も久しぶりだつたから加減を間違えたよ。

「……」

「じゃ、話は以上かな？ 天才さん」

「…あんたにそう呼ばれる筋合いはないわ」

最後にそう言い残し、不機嫌そうに帰つてつた。

あははは！ 僕程度の存在になにそんなにムキになつてんの？

そもそも天才さんが僕みたいな屑になんの用なんだろう？

まあ凡才の僕には天才さんの考え方なんかまったく分からぬけど。

うーん、しかし序盤と性格もテンションもかなり
変わつてるつて感じだね。失礼、僕は朝は弱いんだよ。（低血圧）

さて、我が家に戻つてゴロゴロしようつー

え、勉強？

ハハ、寝言は寝て言つて欲しいな

うーん、しかし、久しづりでも物足りないなあ……

ま、楽しみは一年の時にまで取つておこうかー。

一問 肩とテストと振り分け試験（後書き）

いかがでしたか？

主人公の肩っぷり全開ですね

今作の主人公の名前は仲野富浪都です

名字の由来：

人格と正反対な名字を選びたかったです

ですので”みんなと仲の良い”の”仲”を入れて仲野富なかのみやです

名前の由来：主人公の行動に近い”浪人”的”浪”を取つて
浪都ろうとです。”狼”にしなかつたのは厨一臭かつたからです
作者は既に厨一ですけど

ちなみに今小説の多分唯一のオリキャラの長瀬流歌の名前の由来も
一応書いておきます

名字：某戦闘機ゲーム5のキャラから取りました

名前：某心靈ホラーゲームのメイン主人公から取りました

犬の名前のネーミングセンスの無さは本当に無視してください（。

rn

ちなみにテスト問題の答えは山本五十六です。簡単ですね

今回の質問

連続投稿なので前回と同じ

（睡眠）

一問 肩と鉄人とFクラス（前書き）

原作スタートです

今回も主人公の扱いの酷さが分かります。何回も言いますがこれが通常です

ちなみにアニメではEクラスと戦い、Aクラスに直行しましたが、今小説では漫画と同じくDクラス　Bクラス　Aクラスと進みます。

流石にこれぐらいは覚えてているんで

では、一話です

一問 肩と鉄人とFクラス

振り分け試験を受けてから数ヶ月

文月学園は新学期を向かえ、一年は二年、二年は三年と進学していき、新しく新入生もやってくる

桜の木が美しく咲く中、不穏で”マイナス”な空気を放っている人物が道中を歩いている

桜の花びらが舞い落ちる幻想的な空間の中を汚しているように歩く存在、それがこの僕、仲野宮浪都

今日は文月学園第二学年の始まりだ

僕にとってはどうでも良いような学園生活

馬鹿馬鹿しいシステムを取り入れたこの学園に興味なんて欠片もない

僕はただ、他人を不幸に出来ればそれで良い

他人の悲痛な表情を眺めたらそれで満足

学力なんて気にならない

故に僕は、今年も毎年と同じように学業を一切行わない

その学生としてはぶつ飛んだ決心を胸に、僕は

文月学園の門へと向かう

門へと到着するや否や、周りの生徒達に睨み倒される僕。僕はこの学園所かこの町では有名な存在だからね

勿論、悪い意味でだけど

「お早うっス、西村先生」

不適な笑みを浮かべながら僕は門の前に立っている筋肉質な教師へ挨拶をする

「ああ、仲野宮か。相変わらずだな」

西村先生も周りから睨み倒される生徒を見て
氣まずそうな表情をしていたら、僕だと分かつていつも通りに戻った

この人物は西村宗一(にしふじゆういち)。生活指導を担当しており、恐らくは文月学園全校生徒から”鉄人”と恐れられている教師。趣味がトライアスロン

という”超”が付くほどの肉体派教師でその授業は”鬼の補修”と恐れられている。

そして、藤さん以外で僕と唯一”普通”に接してくれる人物

「それこそが僕のアイデンティティなんじゃないスか?」

「そう考えるお前が心配になつて来たんだが…それより、これを受け取れ。大事な物だから直ぐ確認しろよ」

西村先生から渡されたのは一つの封筒

「の中に僕の教室が書かれているはずだ

まあ、100%の確率でFクラスだけど

「確認しなくともどのクラスかは分かるんスけどねえ…
別に捨てといて良いっスよ?」

「それよりその挑発的な口調は止める。俺の前では
そんな仮面を被つたような接し方はしなくても良いだろ」

…西村先生は僕の”本性”を知っている人物でもある

この先生には困るな…なにもかも見破られてしまつ

「……分かりましたよ。では、早速確認しておこきます

封筒を受け取り、中に入つてある紙を確認する

仲野富浪都 Fクラス

「ですよね～」

「まったく…お前は今年も去年と同じよつと過ぐすのか?」

別の学校であつたにも関わらず、西村先生は僕の
一年の成績や授業態度を知っていた

「じゃなきゃ僕じゃあいません」

「その性格を変え改善できればお前も立派な生徒なんだがな…」

溜め息混じりに呟く

僕が真面目に勉強するつて2012年の地球滅亡説よりありえない話だよ

「そんじゃ、僕はホームルームがあるんでこねで」

「ああ。お前もあの”バカ”的にならなければいけない

「ある意味あつちの方がまだ”マシ”と思こますけどねえ…」

最低限の会話を交わし、僕は自分のクラス、Fクラスへと向かう

廊下の辺りで既に理解できるものの設備の低さ
「EJ」が”Fクラス”ねえ……ま、僕が過ごすのには相応しい
環境だと思つけど

2-Fといつれですらもう既にボロボロで何時外れてもおかしく

ない

ような状態だつた。木が腐敗している時点で取り替えないと云は
いんじゃないのか？

それを無視し、教室の扉を開ける

… 中も相当酷いね

黒板にはチョークの姿が見えず、机が卓袱台で
イスは座布団という環境の悪さ。それ所か卓袱台も脚が
ボロボロに腐敗していた

でも、机なんて使う機会はないから構わないけどね

僕が教室に顔を出すと、数人がこちらに向き、嫌そうな顔をした

中には舌打ちする者まで居る

ハハ、ざまあないね。僕だけど

教室の一一番左下端の席を陣取り、鞄を枕代わりにして
目を閉じる。これが僕の学園生活の基本。勿論、誰にも起こされる
ことはない

「仲野富くん」

「ふあ？」

名前を呼ばれ、僕は睡眠から目覚める

僕を呼ぶなんて…今田は風でも起さるのか？

「はい、なんでしょうか？」

担任と思われる初老の男性が僕を呼びかけた

ちなみに僕の周りに座っている人物は誰一人と居ない

「やつと起きてくれましたか。今は自己紹介をしている最中なので
席順だと君が最後です」

自己紹介…か

別にみんなは僕のことを知っていると思つたがね。勿論悪い意味で

「僕は仲野富浪都。君達に名前で呼ばれる筋合はないので
仲野富と呼んで下さい。僕は君達とは一切交流を持つ気はないので
安心してください」

笑顔でそう告げる

『やつだそだ！ てめえなんかとは誰も関わりたくないねえよ…』

『肩が偉そうに立つんじゃねえよー』

相変わらずの罵声

こんなのが、以前と比べたら可愛いものだよ

「…最後に坂本くん、どうだ？」

最後に教壇に上がっている赤毛の生徒の番になつた

僕は最後じゃなかつたんだね

「1年のクラス代表の坂本雄一だ。

俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ

ならお言葉に甘えて”代表”って呼ばつか

「……さて、みんなに一つ聞きたい」

ん？ この後に及んでなんだ？

そして、その視線はクラスの全体を流れるように移していく、それをクラスメイト達が追つている

うーん、いやつて改めて見るとかなり酷い設備だね

カビ臭くて、割れた窓から通る冷たい隙間風

綿が殆ど入っていない汚れた座布団

古臭く、しかも脚がガタガタでボロボロな卓袱台

「Aクラスは冷暖房管理の上、座席はリクライニングシートらしい
が…」

それって学生の教室じゃないよね？ なにその高級ホテル？ 旅行
にでも来てるのか？

「不満はないか？」

『大アリじやあ――――――――!』

僕は大してないんだけどね

座布団なら家から枕を持つてくれれば済むし、いつそのことここに住
もうか？

「だろ？ 俺だってこの現状に大いに不満だ。代表として問題意
識を抱いている」

これに便乗してクラスメイト達が一斉に不満を爆発させた

『いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだ！ 改善を要求
する！』

『そもそもAクラスだつて同じ学費だろ？ 差があまりに大きすぎ
る…』

『肩野郎だつてここと同じクラスなんだろ？ ますます酷いじゃな
いか！』

その中には僕の罵倒まで入っている。ハハ、その人に
なにか悪いことでもしたのかな？

「そこで代表としての提案だが、FクラスはAクラスに”試験召
喚戦争”
を仕掛けたいと思う！」

試験召喚戦争……か

馬鹿馬鹿しいね。僕は不参加つてことにできないかな？

良い機会なので簡単に”試験召喚戦争”について説明しよう

まず、この文月学園は近年問題視されている学力の低下を
防ぐため、世界初の新しいシステムを取り入れた。それが
”試験召喚戦争”だ。

この試験召喚戦争は言わば学生のために”模擬戦争”だ

クラス同士で戦争を行い、勝ったクラスが負けたクラスの設備を
入れ替えられる。例えばFクラスがEクラスに勝つたとする。そし
たらEクラス
の設備がFクラスのものとなり、Fクラスの設備がEクラスになる。
逆に上位クラス

が下位クラスに勝利した場合、負けたクラスの設備は1ランク下が
る。つまり

上位クラスにとって戦争とはまったくのメリットの無いことになる

戦争とは言つても拳銃や兵器などの物騒なものではなく、試験召喚システムというシステムによつて姿を現す、使用者を元に作られた”召喚獣”と云ふモンのよつなので戦つんだ

全長はたつたの80センチ程度でその強さは文月で受けたテストの点数によつて比例し、強くも弱くもなる

そんな戦争紛いのことをこいつではしゃつてこる

…馬鹿馬鹿しい

こんな戦争紛いのことをやつたつてなにならんのだよ？

僕はこのシステムが大嫌いだ

しかもFクラスは最上級クラスのAクラスに戦争を仕掛けようとしてる

幾らなんでもそれは無謀過ぎる。まあ、僕は参加しないから関係がないことだけね

無謀なのはみんな賛成するみたいで、この意見に反論を出す者が沢山居た

『勝てるわけがない！』

『これ以上設備を落とされたくない！』

『姫路さんさえ居れば俺はもうなにも要らない！』

最後の人、それは本人の前では言わない方が良いんじゃないのか？

姫路つて誰かは知らないけど

「安心しろ、このクラスには戦争に勝つことの出来る要素が揃っている」

「え～、こんなアホクラスがAクラスに勝てるってでも？」

「それを今から説明してやる」

そして、代表はクラスの生徒（名前を知らない）を次々と指名していました

偵察や暗躍、隠密に長けているというムツツリーーー」と土屋康太くん

実力が学年次席レベルの姫路瑞希さん

女の子みたいな顔をしているが実は男の子で演劇部のホープって

呼ばれている
木下秀吉…くん？

小学校の頃は”神童”と呼ばれていた代表こと坂本雄一くん

バカの代名詞もある称号、”観察処分者”の吉井明久くん

うーん、幾ら学年次席がこのクラスに居てもAクラス代表、つまり主席には敵わないんじゃないのか？

観察処分者だつて物に触れるだけで他になんのメリットもないし

それに神童つて代表が呼ばれてても今はそりゃないんだろ？

小学校つてことは最低でも五年のブランクがある。それじゃあ戦力にならないと思うよ。.

「そして最後に……」

代表が最後の生徒を呼ばうとしたら、急に僕の方を見て、思いつきり睨んできた。僕がなにをしたっていうんだ？

睨み終わつた後、心底嫌そうな顔をしながらその生徒の名前を呼んだ

「……仲野富浪都、立て」

…はい？

なぜそこで僕なんだ？

クラスメイト達も同じく意味が分からず代表にクレームを言つていた

『なんでそこそこつが出てくるんだよー。』

『やうだそーだ！ せつかく良い気分だつたのによー。』

みんな心底僕のことを毛嫌いしているね

『あんな脣なんてなんの役にも立たねえよー。』

それを僕はただ笑みを浮かべながら黙つて見ているだけだった

「みんな落ち着け！ 確かにこいつは肩と呼ばれているかもしない。」

だがお前達は”何故”仲野宮が肩と呼ばれているのか分かるか？』

その問いに次々と回答者が出ていた

『他人の努力を馬鹿にする奴だからだ！』

『俺が上級生に喧嘩売られてた時にアイツは遠くで笑つて見てたんだよ！』

と様々な意見が出てきた。どれも正解だけどね

「代表、僕は呼ばれる理由がさっぱり分からんんだけど。君だって僕を呼ぶ前に睨んでいたじゃないか。毛嫌いしているのならなぜ？」

こんなに士気が最高潮なのに僕の名前を呼ぶのはある意味台無しだぜ？」

挑発的にそう言つと、一瞬怒りそうな表情をしたが、深呼吸をして落ち着いたみたいだ

僕の挑発に乗らないなんて、どいぞの天才さんは大人みたいだね

代表は一呼吸起き、僕や他のクラスメイトの問いに答えた

「それは、こいつが”天才”かもしれないからだ

『はあ……？？』

この言葉に僕と代表以外の全員が驚きの声を発した

それを僕はただ笑顔を浮かべて見守っているだけだった

一問 肩と鉄人とFクラス（後書き）

いかがでしたか？

改めて読むと主人公の扱いが最悪ですね

F F F 団の人たちにも嫌われています

なんか読んでいると主人公が『めだかボックス』の球磨川に似てき
ている
のは気のせいですか？

今回の質問

連続投稿なので前回と同じ

（睡眠）

二問 肩と代表とストーカー（笑）（前書き）

ストックその4

バカテスつてコメディで明るいはずなのに、主人公の所為で
暗い話しか書けない！

シリアルスつていうにはそれっぽくもないし、明るい雰囲気でもない
し、
なんだかこの微妙感？
では、二話です。はあ…

二問 肩と代表とストーカー（笑）

「それは、こいつが”天才”かもしないからだ」

『はあ！……？？？』

代表の言葉に全員が驚愕の声を上げた

そもそもそうだよ。勉強も口クにしないような
肩が天才かもしないんだもんね

『ふざけるな坂本！』

『こんな野郎が天才なわけないだろ！』

『あいつが天才なら全人類が天才だよ！』

「…代表、それはどんな根拠があつての発言なんだ？」

一気に質問の嵐が代表に降りかかる

言葉は慎重に選ぼうね。じゃないと罵倒の嵐が来るよ？

「皆落ち着け！　これは一つの可能性に過ぎない！

そもそもこれが本当かどうか俺には分からなんだ！　ただ、
俺は可能性は全て確かめたいだけだ！」

へえ、僕が天才である可能性？　そんな行動は起こしたつもりはない

いけど？

代表の氣迫ある言葉に皆が沈黙した

「あれはまだ中学三年の時だ。俺は一度だけこいつと同じクラスだつたんだが、こいつの肩っぷりは相変わらずだ。授業でも寝てばかりでノートもクソもなかつた。まあ俺も人の事は言えねえけど」

中学の時点で神童じゃなくなつていたんだね

「で、その年最後に大きなテストがあつた。それはもう高校を受験できるかどうかに関わるテストだ。俺も珍しく真面目に受けた」

ああ、あれか。あれは正直かなり面倒だつたね

いつもみたいにサボつたら高校を受けられないし、流石に高校に行ないと生きて行けないよ

「結果はギリギリセーフ、合格点ギリギリで俺はテストを通過したんだ。そこで、疑問に思つたんだ。

”俺がギリギリなら仲野富はどうなんだ？”つて。

いつも通りアイツはテスト時間の一時間の最後の三十分はずつと寝ていたし、正直に言つと受かつてるとは思わなかつた

そりやそうだね。自分より酷い授業態度の奴が受かるとは思わないだろうし

「そこで俺はアイツのテストを確認したんだ。

テストが終わつた後は後ろからテストを集める」となつてゐるんだ

が、
ちょうど俺の席はアイツの真後ろだつた

うーん、そんなことは覚えていしないな

ほんの数年前なのにもう忘れちゃつたんだ

「結果は、俺と同じだ。仲野富もギリギリ合格。
でも、俺はアイツの解答用紙を見て驚いた」

なにかおかしいことでもあつたか？

「あいつは、始めの半分の問題だけ解いて
提出していくんだ。このテストでの合格者の正解数
の田安は半分。つまり、アイツは前半の問題は全て正解させたこと
になる」

代表の話にクラスメイト達は釘付けになつていた

そんなに僕の話が気になるのか？

「それだけじゃない。あいつの
テストの解答欄の残り半分の問題には全て
”消しゴムで消したような痕”がついていた。
しかも後で解答用紙を見せられたとき、全部それと
同じだつた。つまり、アイツは開始三十分でテストを
全問正解の状態で終わらせ、さらに最後の半分を消す
余裕もあつて、残り時間を確認にも使わずに寝ていた」

クラスメイト達全員が唖然としていた

まあ何人かは謎の覆面を被っているから表情が分からぬけど

「中学最後のテストだぞ？ 勿論中学で一番難しいと言わっていたし、誰一人と全問正解者は居なかつた」

そこまで難しかつたテストだつたつけ？

うーん、中学の記憶はかなり曖昧だつたからね

「それなのに、ここの中野郎は勉強どころか授業もまったく受けず、恐らくテスト予習もしていない。そんな状態でこれほどの芸当が出来るんだ。この説は信憑性は極めて高い」

都市伝説みたいな言い方だね

「だから俺はこいつが気に入らないんだ。

勉強もせず、眞面目にやる連中を貶す奴なのに、天才レベル。俺でも努力して神童と呼ばれていたつもりだ。なのになんの努力もせずこんな学力を持つてゐるんだ。ムカつくのは分かるだろ？」

それは僕に対しての嫉妬のつもりなのか？

「だが、戦力なるんならそれでもいい。仲野宮、

単刀直入に聞くが、この説は事実か?」

全員の視線が代表から僕に移る

うん、みんな期待の目で僕のことを見ているね

「そんなの、ガセネタに決まってるだろ」

僕の発言に全員が固まる

『　』『　』『　』『　』『　』

「まったく、なにを言い出すかと思えば。
僕がそんな芸当が出来るわけがないだろ。僕は
根っからのバカで屑、知力なんてあそこの吉田くん
より低い」

「僕は吉田じやなくて吉井だからね!...?」

興味のない人は記憶できないからね

「惚けるのは止せ」

「嘘じやないぜ? 現に僕はFクラス
に居る理由は単純に、回答できなかつた
所為だよ。これこそ僕の実力だ」

「ならでめえのその中学のテストはどひ説明する?」

「信憑性の欠片もないね。僕のテスト結果は確かにギリギリの範囲だった。でも、それは回答できる問題を片つ端から問いただけで、前半の問題が簡単なのは当たり前だろ?」

笑みを浮かべながら挑発的に言つ

うーん、代表はあまり乗つてこないね

つまりないなア…

『じゃあ消しゴムの痕は…』

クラスからそんな呟きが聞こえる

「あれは適当に答えを書いただけだよ。

先生にこんな答えは書くなって言われそうだったから消しただけだよ。代表が見たのはただの見間違えた」

段々と失望した目が見えてきた

あはは、あんなに期待した目が一変したね

『なんだよー、せっかく屑野郎を見直したのによー。』

『せっかく良い気分になつたのになんだよこのオチー。』

『坂本も勘違いも良い所だ！』

代表にまで怒りの声が向けられる

あはは、良い気味だよ！

うん、代表の怒りも爆発しそうだよ！

「そもそもこんなに多くの可能性があるのに
なぜ僕みたいな肩を疑うんだい？ 代表も馬鹿だねえ。
あはは！」

『やつぱつ』につは肩以外になんでもねえ！』

『そりだ！ このクラスから出て行け！』

『一度と登校してくるな！』

うん、かなりテンションが上がっていたから落差が激しいね

「…お前に期待した俺が馬鹿だった…」

代表も自分の発言の馬鹿馬鹿しさを理解したみたいだね

「でも、こんな肩が居なくとも俺達には勝てる要素が十分にある…
そこで！ 僕達の力の証明のためにDクラスを落とす！」

再び士気を上げようと代表が煽りを掛ける

「こんな教室なんて嫌だろ！』

『当たり前だ――――!』

「なら全員筆を取れ！ 出陣だ！」

『つおおお――!』

クラスの士氣はさつきとは比べ物にならないぐらい上がっていた

代表には統率の才能もあるのか？

「それでは明久には〇クラスへの宣戦布告の使者になつてもらつ―無事に大役を果たせ！」

あはは！ それって生贊つてことだよね？

「大丈夫だ。連中はお前に危害は加えない。騙されたと思って行つてみろ」

「本当？」

「勿論だ。俺は友人を騙すような真似はしない」

この一人つて友人だつたのか？ そんな雰囲気は一切
感じなかつたけどね

「うん。使者は僕がやるよ」

完全に騙されてるね。下位勢力の宣戦布告者は大体
ボコボコにされて帰つてくる。上位勢力にはなんのメリット

もないからね

吉田くんが教室を出て行くと、代表は「ヤーヤ」と笑い出した

「とりあえず生贊は明久だが、」さりでは作戦を決めたいと思つ。このクラスの中で”これだけは負けない”という教科はあるか？

それを参考に部隊を編成したいと思つ」

あ、今が丁度良いね

「代表、一言良いかい？」

「…なんだ？」

僕を見て一睨みした後、話を聞いてくれた

「僕は戦争に関してはまったくの無干渉だからね？」

そう言つとやつとまで冷静だった代表は怒りの表情を浮かべた

「ふざけるな！ Dクラス戦は俺達にとつては重要な戦いだ！ これには姫路以外は全員出陣させる！」

「なら一つ教えてあげるよ。僕は振り分け試験の時は問題に一切答えずFクラスになつたんだ。つまり実質0点。そんなんのじゃ戦えないよね？ 第一、僕は戦争がとても嫌いなんだ」

「なんだ？ 肩野郎も怖氣づいたか？」

うん、安い挑発だね

「僕は戦争という概念が大っ嫌いなんだ。

完全なる平和主義者だよ。ま、君達がそこまで
言つたら出てあげるよ。精々瞬殺されないよう元気にしてよー。
あははははー」

トイレと廊下に面した教室を出る

途中で『一度と来るなー』が聞こえたけど、これは
僕の教室だからね？

視点一 坂本雄二

相変わらず感じの悪い奴だ…

「あの、坂本くん？」

「なんだ姫路？」

「なぜ、仲野宮くんのことを嫌つんですか？」

そういえば姫路と仲野宮は初対面だったな

「仲野富浪都。この町じゃ有名な脣野郎だ。アイツは他人の不幸を喜ぶようなイカれた頭を持つてやがるんだ。そんなアイツが俺は大嫌いだ。殴れるならとっくに殴ってる」

「吉井くんもですか？」

「ああ、アイツも仲野富は嫌いなんじゃないのか？去年までアイツは普通の高校に通っていたらしいが、文月に編入してきたんだ。学費の安さに釣られたんだろ？」

学費の安さでここに来るのが大半の奴だしな

「木下くんもですか？」

「わしは代表ほどは嫌ってはおらぬが、どちらかと言わると苦手じやな」

秀吉も苦手な奴は居るのか

「美波ちゃんは？」

「ウチは……なんとも言えないわね。高校が別だつたからあまり知らないんだけど、坂本とかの話を聞くと確かに気に入らない奴ね」

初対面の島田にまで嫌われたか

ざまあねえな

「そ'うなんですか…」

姫路は複雑な顔をしてるな

まあこいつに初対面で人を嫌うことはできないんだろう

「でも、あの説は本当だと思つたんだがな…」

「あなたの読みが外れるなんて珍しいわね」

「いつもの代表なら外すのはあまり見掛けぬな」

いや、あいつは絶対なにか隠してる

俺の勘だが

その時、教室の扉が勢い良く開くと、
ボロボロになつた明久が帰つてきた

「騙された!!」

「やはりそう来たか…」

だがこれで今日、Dクラスとの戦争が決まった

お前の生贊は無駄ではなかつた、明久

「騙したんだね！ 雄一はこの僕を騙したんだね！」

「騙してはいない。俺はお前に嘘の情報を伝えただけだ」

「世間ではそれを”騙す”って言つんだよー」

「雄一、貴様はいつか僕が殺す！」

やれるもんならやってみろ

「大丈夫ですか、吉井くん？」

明久の無事を心配するのは姫路だけか

「あ、うん。大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

「それより、今からミーティングを開く！ 屋上まで行くぞ！」

視点一 仲野宮浪都

もうお昼か…今日は勉強はしていないね

まあ、勉強してようがしてまいが関係のことだけど

僕は一旦教室に戻り、鞄からコンビニで買つておいた御弁当を出す

今日もコンビニ弁当か…いつも通りだね

どこか人気のないとこはあるかな？

彼ら罵倒に慣れてるとは言つてもさすがに365日中

言われていたら疲れるよ

「相変わらずのコンビニ弁当ね」

「…君はストーカーかい？」

「誰がストーカーよ！」

校舎浦に行つたらなぜか再び会つてしまつた長瀬さん

君は僕に発信機でも仕掛けているのか？

「僕になにか用でも？」

「フン、初っ端から試合戦争を仕掛けた馬鹿
でも見てみたかっただけよ」

「それって遠まわしに僕に会いたいって言つたのかい？
あはは！ まだ僕になにか未練でもあるのか？」

貶すように笑う

僕たちは昔は”一応”友達だったからね

今では大分嫌われるみたいだけ

やつぱり長瀬も他のみんなと同じなんだ

「誰があんたなんか!…」

「なうど」か消えてくれないかな?

僕はこれでも疲れていてね、一人が良いんだよ

正直に言うと田障りなんだよねえ~

僕は今は長瀬を貶したりする気分じゃないし、
用もないのに会いたくはないからね

「ツ…！ 別にアンタに言われなくとも…！」

相も変わらず君の反応は面白いねえ~

残念ながら今は気分が乗らないけど

「じゃ、さつあと消えてくれないか?
いや、消えろ。田障り」

「あんたが消えろ！ この肩が…」

なんてオリジナルティのない台詞を…

「浪都^{なみ}はなにも変わらないわね、五年前と」

「いや、僕はこれでもかなり変わったつもりだぜ?」

その謹撫にマイナスさが増していないかい？　いや、
”狂った”って言つた方が正しいかな？　あはは！」

「ハニコと笑いながら僕はそう叫びる

僕のデフォルトの表情はハニコだからね

「…あんたホント、どうしちゃったの…？」

悲しそうな顔を僕に向ける長瀬

そんな顔をしても僕は困るんだけど…

「なにが？」

「昔はあんなに優しかったのに…」

僕の黒歴史を掘り返さないでくれるかな?
そんな自分はもう捨てたんだけど

「なら君に一つ良いことを教えてあげるよ。

人は変わるぜ？」

それだけ告げて、どこか別の場所へと向かう

途中でちよつとだけ泣いていたのが最高だったなあ…

悲しみせたりかかるのハハハハハハで楽しこんだル。

でも、どうか人氣のなことハハハしてあるのかな？

ハース...

ヨコー。 隅上に立ハル。

二問 肩と代表とストーカー（笑）（後書き）

いかがでしたか？

最後の方は過去話のフラグ。回収するはまだまですか
しかし、この小説はなにがしたいのかが分からぬ…

主人公も中途半端に外道だし…なにがなんだか分からなくなつてきました。orz

うーん、試召戦争になつたら改善できる…かも？

今回の質問

得意教科はなんですか？

ちなみに僕はタグでも書いた通り日本史と世界史、さらには英語では自信があります。それ以外はまったく駄目ですけど

（睡眠）

四題 腕と戦争とロククラス（前書き）

忙しくなる前に一ぱい投稿したい作者です

原作キャラたちの口調があまり理解できない。.

おかしなところがあつたら遠慮なく指摘してください

いや、お願いします

では、四問です

四問 肩と戦争とロクラス

「屋上は確か……」
だね

ドアを開け、屋上へと踏み入れる

「そもそもなぜEクラスじゃなくてDクラスなんだ？」

「姫路が居るなら真っ向勝負でもEクラス程度は勝てるが、Dクラスはそろそろ行かない。初戦は派手に景気良く勝てばクラスに士気も上がるし、なによりDクラスにはAクラス攻略の要素がある」

屋上には既に代表とその他のクラスメイト達が占領していた

うーん、これはちょっとタイミングが拙かったかな？

僕は屋上から出ようと再びドアを開けようとすると

「待て仲野富」

なぜか代表に呼び止められる

その声に全員がこちらに視線を移す

「……僕はまだお弁当を食べるために入気の無いところを

探していただけで、決して君達の邪魔をするためではない

「んなことはどうでも良い。とりあえず

「ひちへ来い」

言われるままに代表グループの下へ向かう

数人が複雑な顔をしていたけど、大丈夫なのか?

まあ罵声が無いだけマシだね

「なんだ?」

「お前の部隊編成について決めたいんだが、
なにか得意科目はあるか?」

「僕はテストを受けてないからまだ分からないよ。
でも、強いて言つなら得にないかな」

基本勉強はしないからね

「そりゃあお前は〇点だつたな…なら
戦争が始まつたら姫路と回復試験を受ける。
そこで点数を補給したら直ぐに戦線に向かつてもう一つ

はあ、やつぱり気が向かないな…

「りょーかい。ま、戦争は嫌い
だけど真面目にやろうか。精々僕が
来るまで瞬殺されないようにな」

「俺達を賞めるなよ。ま、てめえなんか

居ても居なくともどうでも良いような屑なんだがな」

代表は僕のことを毛嫌いするんだね

懸命な考え方

「ちよ、坂本！ そこまで言つ必要は…」

同じく赤毛の女子生徒が言つ

彼女は僕のことを知らないのか？

「代表の対応は合つているよ。基本、僕にはなにを言つても良いし、僕も気にしないよ。
慣れって凄いんだね」

最初の辺はかなりきつかつたけどね

傷付いたりもしたけど、僕も成長したものだよ

マイナスの方向にだけど

「では、『機嫌よー！ 戦争頑張つてねー！ あははー』

僕つて笑つてばかりだね。面白いかったり馬鹿にする時
しか笑わないけど

「あ、待ってください！」

でも、桜色の髪の女子生徒に止められる

桜色つて珍しいね

「なんだ？」

「あの、 私、皆さんにお弁当を作ることになつたんですけど、良かつたら一緒にどうですか？」

…この子頭は大丈夫かい？ 病院に行つた方が良いんじやないのかな？

「君は病院に行つた方が良いよ。僕を誘うなんて火星人よりありえないことだから」

「失礼な！ 火星人は居るぞ！」

さつき生贊にされた吉田くんに抗議される

うん、君が生贊にされたのも頷けるよ

「吉田くんは本当の馬鹿だね。ここまで馬鹿なのは珍しいよ。大学の生物学の研究対象にでもなれば良いんじゃないのかな？」

「酷い！ 仲野宮くんも僕のことを馬鹿にするのか！？ 雄二と秀吉もなに名案だ！』って顔をしてるの！？ それと僕の名字は吉田じゃなくて吉井だからね！？」

「俺も仲野富の意見に賛成するとは思わなかつたな」

「賛成しちゃ駄目だからーー!?」

「ま、そんないとよりお弁当の件なんだけど

「無視か!? 横の抗議は全て無視なのか!?」

五月蠅いな…でも反応は上々、弄りがいのある人だね
「お断りさせてもらひよ。僕みたいな下等生物よりもっと良い人にお弁当を作りなよ。その方が食材のためになるしね」

丁寧に断る。これでも僕は断る時は丁寧だからね

「…肩野郎が丁寧に断るだと? なにを企んでいる?..」

「雄一、毎回仲野富が行動を起こすたびに
疑うのは悪いと思うのじゃが…」

それこそが自然の摢理なんだよ、木下…さん? クン?

ややこしいね

「なにも企んじやになこた。それじゃあ、戦場で会おつか

僕は屋上を後にする

うーん、しかし、なぜ行く所に誰か居るんだろう?

僕は磁石かなにかなのか?

「監視さん、じんてつ……」

『総員、狙え!』

「ワオ」

教室の中に入るや否や、無数のカッターナイフが僕に向けて投げられる。

それを教室の扉を閉めて冷静に回避する

僕がなにかしたか?

「まつたく、温かい挨拶だね。僕がなにかしたかい?」

『惚けるな! 仲野富浪都、既に調べはついている!
貴様は昼休みの時間、女子生徒を泣かせたそうではないか!
それは許せぬ行為だ! よつて異端審問会は貴様を処刑する!
須川会長、交戦許可を!』

ああ、あの長瀬との会話ね

どうしてほんの数分前のことを調べられるんだ?

『戦闘を許可する! 総員、仲野宮を

冥府へと送つてやれ!』

謎の覆面集団、もとい異端審問会いたんしんもんかい、通称FFF團が
僕にカツターナイフを向けて突っ込んでくる

君達は黒人迫害集団のKKK團の真似か?

（数分後）

『貴様……これでは終わらんぞ……』

『FFF團の真の恐ろしさは……これがうだ……』

某三流悪役の台詞を吐き捨てるど、最後の一人が地面に平伏す

うん、喧嘩を売る相手を間違えたね

伊達に柔道一級、そして合氣道二級を取つてないよ

まだ初段は取れていないけど…高校生には難しいんじゃないのかな?

「お前…喧嘩強いんだな…」

教壇の前に立つている代表が引き攣った顔で言つ

まあ、こんな貧弱体質のような見た目だからね

元々力は少ない方だから、相手の力を利用したり
体格の関係がない柔道や合氣道を蹴っているんだよ

父親の影響もあつたけど

「父親が警察官だつたからね。父さんに
憧れて習い始めたんだよ」

「まあ、それより、お前は回復試験を受けて來い。
姫路はもう行つたぞ」

あ、そういうえばそうだったね

視点一 姫路瑞希

これが回復試験…少々難しいですが、問題ありません

早く終わらせて吉井くん達を助けないと

「すみません、遅れましたー」

「仲野宮くん、開始から既に五分も経っていますよ？」

早く席に着くように」

仲野宮くんが到着したみたいです

私の隣に仲野宮くんが座り、テストを受け取る

「うーん…」

しばらくテストを睨みながら、鉛筆を手でぐるぐると回しています。手が器用なんですね…

仲野宮くんが到着してから十分が経過しました

私も次々と問題を解いていきますが、仲野宮くんはずつとテストを睨んだままで

「…ああ、暇だね。ショウがないね、テストやるっか

開始からもう十五分も経つてますよー? 今更テストを始めるなんて…

鉛筆を手に持ち、問題を解き始めます

最初の辺りは簡単なのか、スラスラと書き入れていっています

開始からさりに十分、問題も難しくなってきています

でも、仲野富くんはペースを崩さずにスラスラと問題を解いています

私も少しは考えてから問題を解くのに…凄いですね

相変わらず二二二二顔でテストを受けています

…なんでそんなに笑つていられるんでしょうか

仲野富くんは皆から”肩”と呼ばれてるのに、いつも笑顔で居ます

あんなに多くの罵声を浴びて居るのに…

思わず鉛筆を止めてしまつ

… 聞いても良いんでしょつか？

「あ、あの…」

「ん？ なんだ？」

「と聞こますと…」

「その、いつも皆さんから怒られたりしていのと、なぜいつも笑つていられるんですか？」

そう言つて、ひそひそと私に笑つてくれました

「君は純粋だねえ、うん。そんな君にドロドロに腐つた僕のことを教えてあげよ。」

僕は小さい時からこう呼ばれてきたんだ。罵声なんて日常だし、もうその時から慣れていたからね。
確かに最初の方は辛かったよ？ 何度も死にたいって思つたしね。実際に自殺しようとしたこともあるよ？
ほら、その証拠に僕の手首に切り傷があるだろ？」

「ひつ…」

仲野富くんが袖を捲り上げると、手首には痛々しい傷跡がありました

本当に自殺しようとして…

「でも、今となつたらもう慣れたよ。ちなみに僕は二二一〇としてる訳じゃなくて、他人を見てると自然とこうなるんだよ。頭が狂つてて僕は自覚してるしね。知ってる？頭が狂つている人は狂つているほど普通の人と見分けがつかないんだよ？僕は雰囲気が語つているらしいけど」

次々と自分のことを語ってくれる仲野富くん

彼にも事情があるんですね…

「でも、こんな僕と違つて君は純粹だよ。羨ましいほどにね。そんな僕からのアドバイスだよ。僕には関わらない方がいいよ。自分の身のためにね。でも、純粹な君を見ていると本当に羨ましくなるよ。僕つてまだ幸せになりたいんじゃないのかな？」

それを告げると、仲野富くんはテストに戻りました

⋮本人が言つと説得力があります

それより、早くテストをしないと！

吉井くんを助けないと…

視点一 仲野富浪都

いやあ、自分のことを話したのは初めてだよ

でも、姫路さんは本当に純粋だねえ

僕の話を全部信じていたよ

ぶつちやけると彼女のことなんて
まったく羨ましくもないしね

どちらかと言づと彼女みたいな子は大嫌いだよ

人間の汚さをなにも理解していないような子はね

あの話なんて嘘が八割で真実が一割だよ

確かに僕は罵声には慣れているし自殺しようとしたこともあるよ

でも、幸せになろうなんて思っちゃいないし、
彼女のことは微塵も羨ましいとは思わない

嘘を簡単に信じるなんて、純粋な子は本当に
利用し易いねえ…」これで姫路さんがこのことを

代表に言つたらちょっとだけ高感度が上がるかも
しないし、戦争への干渉も減らしてくれるはず。

「そこまで一回復試験は以上をもって終わります」

「どうやら終わつたみたいだね

姫路さんの解答用紙を見るとかなり埋まつていた

たすがは学年次席、凄いねえ

採点している先生も凄く早いけど

「貴方の現代国語の点数は……339点です」

「わオ、高いね

三田点台なんて凄いね

「はい、ありがとうございます」

礼儀正しく一例して戦線へと向かつていった

仲間思いだねえ

「仲野富くんの現代国語の点数は……あれ？」

驚いたというよりも戸惑いの表情を浮かべる先生

「どうかしましたか？」

「いや、ちょっと待ってください。もう一度採点し直します」

「再びものすごい勢いでテストを採点していく

「…仲野高くん、君の現代国語のテストは 8点です」

「うーん、やはりあまり良い出来ではないね

僕は現代国語は得意ってわけではないからね

「ありがとうございました。じゃ、さよなら～

そのまま歩いて教室を出る

出来るだけ戦争はしたくないからね

最後に先生の唖然とした表情が印象的だつたなあ～

「そこまで一 勝者、Fクラスー」

『「つかおおーーーーーー』』

僕が着いた時はもう既に終わっていた

Fクラスの勝利という形でね

凄いな、二格も上のクラスに勝つなんて

僕は教室に戻つて帰りの支度をする

「なんだ、僕の出番なんて無いじゃないか」

それだけ言い残し、教室を後にする

『仲野富浪都

『現代国語』3525

四問 肩と戦争とロクラス（後書き）

いかがでしたか？

今回は主人公がちょっと溫和？です

最後の辺は心の声が肩になつていきましたけど

誤解生まないために言っていますけど作者は明久と瑞希の関係は
守ります。雄一と翔子の関係も守ります

今回の質問

格闘技はなにかやっていますか？

ちなみに僕は以前言つた通り空手を十年ぐらい続けています

今だに二級ですが…

（睡眠）

五問 肩と狙撃と異端審問会（前書き）

うーん、最近主人公が丸くなっている気がします

Bクラス戦では肩っぷりを全開にさせてみます

後、今話ではチラッとだけですが拳銃の話が出てきます

その様な話を好まない方はスキップしてもかまいません。

物語はあまり進まないので、多分拳銃の説明が出るのは今回だけです
では、五問です

五問 肩と狙撃と異端審問会

試験召喚戦争も僕が参加するまでもなく終わったのでそのまま帰路に付く

良かつたよ、僕は戦わなくて済んで

でも、久しぶりに真面目にテストを受けたよ

出来はイマイチだったけど

「ロクラス戦」苦労だったわね

君は大概は暇人なんだね

「また会つたね、ストーカーさん。またなにか用かい?」

「ストーカーじゃないわよ!」

「今の君には説得力が皆無なんだけどね、長瀬」

行く場所全て追跡されてる気分だよ

発信機なんかでも付けられてるのかな?

「ただ今年初めての戦争がどんなのか聞きたかっただけよ」

「Well, it's a long story actually.
I I y . Y o u s e e . . .」

「英語じや分からなーわよー」

「中国語の好き嫌いは良くないよ?」

「B . . .」

「ロシア語なんてもうと分からなーわよー」

「P e r c h ? f a t e r e c l a m i
a b u a ?」

「外国語はいい加減にしてー!」

あはは、反応はいつもいつも面白いなあ

ちなみに最初から順に訳してあげよう

『話せば長くなるが、実は...』

『戦争が始まると...』

『なぜ中国語でそんなに文句を言つんだ?』

「分かったよ。日本語で良いんでしょ?」

「それともロシア語が良い? もしくはフランス語や

スペイン語、オランダ語も……

「もう日本語で良いからー。」「日本でしょー。」
それよりなんでそんなに外国語を知ってるのよー。」

「自知識と好奇心」

「便利な好奇心ね！」

「ういえ、島田さんってドイツ人だったね。また今度
ドイツ語で会話してみようかな？」

「ま、僕は戦争には参加していないからなにも分からなかつたよ。
ずっと回復試験を受けていたからね」

「あんたが回復試験？」

「うん、僕の点数は〇点だつたからね」

予想外の点数に呆れる長瀬

僕には戦争なんかする意思なんて皆無だからね

これを毎回続けていたらきっと一生戦争に出なくなる

「浪都、あんたはいつまでそんな学園生活をするつもり?」

「一生」

「あんたが”なんか付けても気持ち悪いだけよ」

「君が付ける方がもつと気持ち悪いね…」

「五月蠅いー！」

ホント、なにしに僕に会つんだろう?

「それより浪都、実は…あれ? 浪都?」

『これより異端審問会を始める』

いつの間にか拉致されていました

まさに一瞬で長瀬から離されてロープでぐるぐる巻きにされました

『被告人、仲野宮浪都（以下、この者を”肩”と称す）は
今日の昼食時間の間にAクラス生徒、長瀬流歌を泣かせるという
男として許すまじ行為を働いたにも関わらず、登校時間に会話を
強要したと調べはついている。みなの者、このような
行動は許すべきだろうか？』

『『『否ー、否ー、否ー』』』

『よつて脣はこれより死刑に処す。

これに皆は異議はないな?』

『『『異議なし! 異端者には死を! 血肉と悲鳴の制裁を!』』』

駄目だこの人たち、完全に頭が狂っている

その証拠に全員が何処からか大鎌を取り出している

見た目も含めると完全に死神だね

「あー そういうえば須川くんは確かに昨日女子の子に告白していたね」

その言葉を言つた瞬間、全員の視線が中央のリーダー格へ向いた

「な、ちょっと待てよー それについては事実などない!」

声もいつも通りに戻つてる

『総員、須川を狙え! 我々の血の制約に
背いた須川など会長ではない! 判決を下せ!』

『『『我々全員、相違なし! 須川に血肉と悲鳴の鉄槌を!』』』

「横溝お前!」

簡単に仲間に見放される須川くん

あははー 敵を攪乱させるにはまずリーダー格を討つ。

戦闘においては鉄則だよ

僕は異端審問会が残していったカッターナイフを使ってロープを切り、家へと向かう

「ただいま～、つて誰も居ないか」

無人の自室へ戻ると、何気なく言つてみた

誰も居ないのは分かつてゐるけど

「あ、お帰り」

「ん？ 今声が聞こえなかつたか？」

「……ここまで來るともう犯罪の領域だね。
なにか用かい、長瀬？」

何故か長瀬は僕の部屋の直ぐ隣の部屋の前に立っていた

住居まで調べて……僕になにか復讐の計画でも立てているのか？

「別にあんたについていつた訳じゃないわよ。こじが私の部屋なんだから」

：What?

「……なに？」

「だから、こじが私の部屋って言つたでしょ。ほら、ちゃんと名札だつて入れてあるし」

言われるがままに名札を見ると、確かにそこには長瀬の名前が書かれていた

「…なにを企んでるの？」

「なにも企んでないわよ！　お父さんとお母さんが大きな仕事が入つて、私はしばらく一人暮らしすることになつただけよ！」

でもせめて別のアパートに行つて欲しかつたなあ…

「お父さんもお母さんも知り合いのあんたの近くで住む方が安心するって言つたのよ。一人共今あんたの現状も知らずにね」

今の僕を知つたら間違ひなく拒否するだらうね

「はあ、別に君が僕の近くに存在しようがしまいが、僕には関係の無いことだからね。勝手に部屋に入ってきたら殺すからね？」

極上の笑みを浮かべてそう告げる

不法侵入なんて洒落になんないよ。なにも盗む物なんて
まつたくないけど

「それは私みたいな弱い女の子の台詞よ。」

「……？？ そんなのどこにも見当たらないけど？」

「ツ……！ セッセと部屋に戻れ！」

「高校生のヒステリー… 笑えるね」

そつぱりと急いでドアを閉める

閉めた次の瞬間、ドアに大きな”ドンー”という物音が響いた

十中八九僕のドアに回し蹴りを放ったね

器物損傷で訴える損害賠償金を請求することだって出来ると知つて
るのかな？

『ワンー』

太郎が僕の所へトコトコとやってきた

はあ…やつぱり犬って最高だね…

なんていうか、凄く和ませてくれるんだよ

僕のマイナスさが全て洗い流される気分だよ

僕の味方は太郎だけ…

「みんな、お早」

『総員、狙え!』

「ワオ」

教室へ入ると、無数のカッターナイフを投げつけられる

それを冷静にドアを閉めて回避し、”ガガガ”とドアに無数の力
ツターナイフ
が刺さる。貫通して当たりそうなぐらこの勢いはあるけど、たすが
にそれはないよね？

毎度恒例の異端審問会とのやり取り

「またまた温かい挨拶だね。今度はなにをしたっていいんだい？」

『惚けるな！仲野宮浪都！貴様、我々を欺くだけならまだし
も、

Aクラス長瀬流歌の由毛に押しかけるなどといつ行動を起こした！
これは

最早死刑では軽すぎる罰だ！貴様には生きたまま永遠の苦痛を与
える！』

ああ、のことね。いや、それ以前に君達を欺いたことを
まだ根に持っているのか？得に須川会長くん、君からの殺氣
が一番強いよ？

『総員、武器を持て！戦の時だアアア－！－！－！

『うおおお－！－！－！

「皆、ちよつと待ってくれ！」

僕は今まさに僕に襲い掛かるとしている集団を呼び止める

『なんだ？今更命乞いか？悪いが我々は弁解などは

受け付けない！ 学園の秩序を守るため、我々は非情でなければならぬ！』

「本音は？」

『女子に話しかけられるのが羨ましい！』

「うん、やっぱりね」

恐ろしいまでの嫉妬だ

「なら君達に情報を教えてあげよう！」

実は、このクラスには僕以上の異端者が存在している…

『なに？』

『その人物は、Fクラスの観察処分者、吉井明久なんだ！』

FFF団全員の殺氣が一人の教徒へと集まる

その生徒も異端審問会に入っていたんだ…

「え？ ちょっと待つて！ 僕はなにもしてないよ…」

「惚けるのは良くないよ？」

皆聞いてくれ！ この吉井明久は、我がクラスの最高成績者でもあり唯一の女子でもある姫路瑞希さんに、手作りのお弁当を作つてもらつてゐるんだ！」

なに！？？？？

「しかも、吉井くんはその姫路さんといチャイチャイしながら食べる予定らしいんだ！」

なにイイイ！？？？？？

「そして拳句の果てに」…付せ合ひたりもしていぬひじいんだ…！…！」

”はてなマーク（？）”も外れるぐらいの勢いで絶句

この小説での過去最大音量なんぢやないのかな?

『あわねわさん……』

理不尽な怒りが頂点に達した時、異端審問会は異端者をボコボコにする

化す
という一応は目的のある行動をする団体から、容赦無き殺戮集団と

”異・端・審・問・会”

「ちよ、ちよっと待つてよ！ 確かに姫路さんは僕にお弁当を作ってくれるって言つたけど、後半の事は全部嘘だからねー？ 仲野富くんの吐いた嘘だからー！」

だが、異端審問会のメンバーは吉田くんの抗議に聞く耳も持たない

「吉田くん、僕は逃げることを勧める」

「全部貴様の所為だからだろ！ それよりなんでわざと嘘を言つ時に限つて僕の名前を正しく言つのかー？」

『吉井イ明久ア……』

「わあああー！！！」

吉田くんは泣きながら全力疾走で走つていった

さて、僕もさつそく仕事に取り掛かるつか…

「ちよっと待ちなさい…」

持ってきた野球バッグを持って教室を出ようとすると、

突然もの凄い握力で肩を掴まれる

思わず振り返ると、そこには怪しげなオーラを纏つた……誰だっけ？

「憑いけど、誰だっけ？」

「島田よー、島田美波！」

島田……あー、あのドイツ帰りの子か！

「それより僕になにか用かい？ いつも君なら吉田くんを抹殺するために出てるはずなんだけど」

「あんた、吉井のことを話してる時、姫路がこのクラスで唯一の女子って言わなかつた？」

「確かに言つたけど？ なにか不満でも？」

そう言つと、握力が段々と増してきて、ついには肩を握りつぶすのか？と思わせるぐらいまでの力になっていた

「ウチだって立派な女子よー。」

あ、そういうえば一応そうだったね

「はいはい、分かったから」

「ツ……。」

益々怒ってきた

うーん、いい加減にしてくれないかな?

「Kannst du mich gehen lassen? (離してくれないか?)」

「え? Sie kennen deutsch sprechen? (ドイツ語が話せるの?)」

「Ja, ich kenne eine Menge verschiedener Sprachen. Deutsch ist nur einer von ihnen. (うん、僕はいっぱい外国語が話せるからね。ドイツ語はその一つだよ)」

「へえ、あんた、ドイツ語が話せるんだ?」

「意外だろ? 他にもスペイン語、アラビア語、ベトナム語、英語、ロシア語、ラテン語、後は…あ、フランス語も話せるよ! みんな言語を覚えたからね

だって、新しい言葉を覚えるのは楽しいんだもん

「や、やつ…凄いのね…」

「肩だと友達なんて勿論居ないからね。暇を持て余しているから色んなことが出来るんだよ」

なにか拙いことでも言つたのかな?

「じゃあ、失礼するよ。僕にはすることがあつてね。
Auf Wiedersehen (さよなら)」

外国语を話せる知り合いつて良いよね~

今まで試す相手が居なかつたから

視点一 吉井明久

まったく…僕は仲野富くんになにをしたつていうんだよ…

『カラソ』

ん? なんだ?

一先ず校舎の前のグラウンドに立つていたら、突然なにかが目の前に落ちた

紙もついてるけど…

「無線機…？」

とつあえず取つて耳にあてる

「…もしもし？」

『やあ吉田くん！逃亡を頑張っているかい？』

「！」の声は…仲野宮くん！

僕をこんな状況に陥れた張本人！

『正解！さすがは吉田くん』

「僕は吉田じゃなくて吉井だから。間違えないでくれるかな？」

『それより、そんなこと言つても良いの～？』

？？ どうこう意味で…

《ガン！ー》

「わッ！？」

突然、大きな銃声のような音と共に足元の地面が少し抉れた

なにか弾のような物が埋め込んでいるけど…

『ちッ、外した』

「今のは仲野富君の仕業なのか！？」

『そりだよ～。よく避けたね』

飛んできた方向を見てみると、
屋上に異端審問会の服を着た人影が見える

「まさか君も異端審問会の入ったのか！？」

『まさかあ～！ 僕はただFFF団と取引をしただけだよ』

取引？

「取引？」

『そり。君を仕留めるのを手伝つたら一度と襲わないと
約束してくれたからね』

FFF団は手段を選ばないんだね

『ちなみに僕は今屋上で君のことを狙撃しているんだよ。
使用銃はレミントンM40A3という軍用狙撃銃で、実弾が当たれば
貫通すると同時に体が抉り取られるよ～ まあ今はゴム弾しかない
けど』

「そんな殺戮能力の高い銃なんて使うな！ いや、それ以前に
ここは日本だよ～？ 銃刀法違反という言葉を知っているか！？」

『そんな細かいことは気にしちゃ駄目だよ。これは

ブラックマ…ゲ芬芳ゲ芬、特別なルートを使って手に入れたんだ』

「今絶対にブラックマーケットって言おうとしたよね！？
なんでそんな裏社会の御用達みたいになつての！？ それに
君つて戦争が嫌いじやなかつたの！？」

『冗談だよ冗談。僕の親戚は軍人でね、
偶に撃たせてもらつたり借りたりすることが出来るんだよ。
今は僕の家に保管してあるけどね。ちなみに使用許可書も
所持許可書も持つてるよ？ それに、銃を撃つ技術があるのなら
例えどんな馬鹿げたことでも活用してみたくなるだろ？』

絶対正当な手段は使ってないね！

それに、そんな技術つて日本じゃまったく必要ないから！

『それより、大人しく撃たれてくれるか？』

「撃たれてたまるか！」

急いで木の陰に隠れる

『あああ、実弾ならその木ごど貫通させて君を
抹殺できるけど、残念なことにゴム弾だからね。
僕の役目はこれでおしまいだよ。代わりに…』

すると、無線越しでカチャカチャと音が聞こえる

なにをするつもりで…

『あ、もしもし？ 須川くん？ 吉井くんを発見したよ。場所はE地点5の3、その木陰に隠れて狙撃できないんだ。至急歩兵部隊を向かわせてくれ。ちなみに僕は行動の素早さが長所のD部隊を推薦するよ。ターゲットが逃亡する可能性があるからね。つん・分かった。僕はもう帰つても良いんだね？ りょーかい、では、良い狩りを』

：仲野富アア！！ 貴様はやつぱり屑だ！！

それにはうこう時だけ正しく名前を言つな！！

『今の会話は全て聞こえたでしょ？ ほら、逃げて逃げて！ あははは！ では、さよなら～！』

その後、無線がプチッと消えた

そして、それに続くようになに数多くの足跡が聞こえる

……

「仲野富アアア！！！ 貴様はいつか雄一と共に僕が殺す……！」

心の叫びを叫びながら僕は走り出す

視点一 仲野富浪都

あははー、うん、最高に面白かったよー。

久しぶりに銃も使ったしね。ちょっと腕が鈍つてたよ

しかし、叔父さん愛用の狙撃銃がこんなことで役に立つとはね

僕の叔父さんは元軍人で狙撃が得意だったらしいからね

その当時の愛用していた銃がこの銃らしいんだ

出来れば撃ちたくないけど

やつぱり銃は見るのが嫌いだ

それなのに僕の召喚獣には思いっきり銃が付いてるしね

装備を変えられないかな？

《仲野富浪都くん、仲野富浪都くん、至急学園長室まで
お越しください。繰り返します、仲野富くん…》

突然の校内の放送

僕が学園長に呼び出される？ 僕はまだなにも

しきなこつもつだナギ...

ルー、アハーハ...

ヨレ、なんの園地が咲くのか

五問 腕と狙撃と異端審問会（後書き）

いかがでしたか？

今回は異端審問会といつぱい絡ませてみました

須川や横溝などのFFF団メンバーは大好きなんで

M40A3とはアメリカ海兵隊がレミントンM700をベースに改良を施して開発したボルトアクション式スナイパーライフルです。使用弾丸は7.62mmNato弾で、スコープはS&D製のを使用しています。

マイナーな改良を繰り返していくたびにM40A1、M40A2、M40A3、M40A5と変わっていました。

軍用銃共通ですが当たると貫通ではなく吹っ飛びます。

例えば腕に当たるとします。ドラマ等では腕に穴が開いたりするだけで済みますが、実際は腕自体が吹っ飛びます。軍用銃とは殺戮に特化した銃なので、殺戮力を追求した故に当たるとヤヴァアイことになります

とまあ、僕の自知識ではここまでです

「ううう話が嫌いな方、申し訳ございませんでした

* 作者は「リオタではなく歴史が好きだけで、本を読んでいる時に出るちょっとした解説を記憶しただけです

今回の質問

苦手科目はなんですか？

ちなみに僕はダントツで数学と物理が苦手です。

根っからの歴史少年なんで

（睡眠）

肩のプロファイル（前書き）

なんとなくやつてみました

ネタバレ防止のためにあまり明らかにはしていませんが…

では、プロフィールです

* ネタバレ注意！

* 八月二十九日 情報を追加しました

肩のプロファイル

名前 / 仲野宮浪都なかのみやろうと

あだ名 / 肩 Or 人類の肩 Or 人類最低

誕生日 / 六月二十三日

年齢 / 16歳

家族構成 / 父親・母親・姉・自分・妹

父親 : 仲野宮 零都

母親 : 仲野宮 静音

姉 : 琴吹 雪音

妹 : 琴吹 彩音

得意科目 / 日本史、世界史、現代社会、古典、英語

苦手科目 / 数学、物理、化学、現代国語、保健体育

召喚獣 / 機動隊の装備と火器に機動隊の盾

見た目は普通の日本警察の機動隊だが盾を片手に短機関銃をもつていて。なお、銃は点数によつて変わる

腕輪 / 超小型式爆弾

点数を二十点使用する度に一つ出現させられる。

表面には粘着性の塗装を施されているので相手にくつ付けられる。あまりにもサイズが小さすぎる

ためくつ付いていることすら相手は気付かない。

一度で多くの点数を使用するとその分爆弾を出現させられる。”爆破”と言うことで召喚獣がスイッチを取り出し、それを押させて起爆させる

特技／ペン回し

好きなこと〇「物／大の愛犬家

嫌いなこと〇「物／猫

その他／この小説の主人公

文月学園2年Fクラスに所属。現在はFクラス最下位の点数を誇っている。

性格は一緒に居れば一目瞭然、根っからの屑である。浪都を知っている人曰く、勉強もせず、愛想もない、無感情で冷血。他人の不幸を誰よりも喜び、嘲笑い、好く、歪んだ人格。そしてなにより、近寄る者を凍てつかせるかの如く冷たいそのオーラと視線。故に”屑”

本人もこの呼び方を否定することなく、逆に共感している。昔からのあだ名で罵声を浴びさせられてきたせいか今ではまったく動じることはなくなつた。幼い頃はかなり傷つき、自殺までしようとしたらしい。現在でも手首にはその痛々しい傷跡が残つている

そして、屑であると同時に根っからの平和主義者。

戦争が大嫌いで、この学園の醍醐味とも言える試験召喚戦争でも現在は未だに不干渉である。

京都府出身で心の底から怒りを感じると京都弁になる癖がある

父親は警察官だつたらしいが、その所属や階級などはまだ不明。そのせいか柔道や合氣道などの心得があり、FFF団を僅か十五分で制圧するほどの実力。

Fクラスからは一部を除き全員に嫌われている

柔道：一級

合氣道：三級

現在は愛犬の太郎と一人暮らし中

もう一匹犬を飼うか悩んでいる

父親は警視庁機動隊隊員であり、

警視庁爆発物処理班班長の警察官、なかのみや
仲野宮零都警部れいと

肩のプロファイル（後書き）

いかがでしたか？

プロフィールなのであまり言つ事はありません

しかし、嫌いなものは猫とは…（笑）

（睡眠）

六問 肩とババアとBクラス（前書き）

今回はBクラス戦です

序盤はアニメ中心ですが、協定違反に辺りから数少ない
漫画記憶になります。なにかおかしなことがあつたら
言ってください

やつと主人公の召喚獣が出せる…

プロフィールに追加しておきます

では、六話です

六問 肩とババアとBクラス

「「機嫌よー、学園長さん！　あ、間違えました。

「機嫌よー！　ババアさん！」

ノックせずに学園長室の扉を開け、礼儀正しく挨拶をする

「訂正しなくても合ひてこたよ、クソガキ」

僕を呼び出した一応は学園の学園長の籐堂カヲル

まあ学園の面からばババアって呼ばれると吉田くんから聞いたけど

「そう呼ばれているという話を聞いたので、
いけないとは分かっていましたが呼んでみました」

「お前さんが素直に罪悪感なんて覚えるか。
呼び方なんてどうでもいいさ。それより、アンタから
気になることがあるってね」

僕から？

「僕の好きな異性のタイプですか？　それは残念ながら…

「誰がそんなこと聞くかー！　まつたく、お前さんはずつぽつ

あのガキ共とは一味違うね」

「お褒めにお預かり光榮です」

「誰も褒めちやいな」よ…」

違つんだ…

「はあ…とにかく、これを見な」

一枚の紙を渡される

「ラブレターですか？ 気持ちは嬉しいですが…」

「違うって言ってるだろ？ が… いい加減その子供染みた挑発は止めな！」

あはは！ もうおひかへるのは止めようか。いい加減飽きてきたし

「へいへい。これは…グラフですね。なんですか、これ？」

幾つもの数字が書かれ、それを一つ一つ線で繋がれたグラフを渡された

「ここ数年のこの学園の平均成績さ。見ての通り

かなり高いだろ？」

自画自賛、格好悪いね

「自画自賛は良くないですよ、学園長。あ、すみません、また間違えました。ババア長さん

「合ひ合ひの言ひだりが！ とにかく、

次はこれを見てくれ」

わかつ一枚の紙を引き出しから出し、僕に見せてくれる

わかつと図じグラフだけど、線がかなり低い位置にあるね

「これは？」

「お前さんのここ数年の成績のグラフだ。

見ての通りかなり低い、学力最低レベルの馬鹿だ」

そんなことは百も承知だよ

「で、それがどうしたんですか？ まさか
僕を苛めるために懲々呼び出したり……」

「そんなガキみたいなことをあたしがするか？
お前さんには説明をしてもらいたいんだ、このテストの」

最後にもわづ一枚紙を出し、僕に手渡す

それは、Dクラス戦の時に僕が受けた現代国語のテストだった

「これになにか？」

「いや、別にこれに問題はない。こんな高得点は嬉しいよ。
でも、こんな高得点がお前さんから出てきたのが、疑問に思つてい
るんだよ」

確かに、ここ数年僕は一切真面目にテストを受けていないからね
毎回平均点が十点以下、大事な試験の時はさすがにギリギリ
合格点に達しているけど

「それに、このテストでお前さんは一度もミスを犯していない、
答えが全て完璧だったよ。異常なまでにね」

異常とは人聞きの悪い、僕は全く普通の屑ですよ

「それがなにか？」

「まだ惚けるつもりかい？　お前さん、本当の所、
どうなんだ？」

「どう、と言こますと？」

「アンタは自分の学力を、いつまで偽っているつもりだい？」

なんだ、それだけか

「そんなの愚問ですよ、学園長」

「……どう意味だい？」

「僕が真面目に勉強するなど愚の骨頂、決してありえない話ですか

ら

それこそが僕のポリシー

真面目に勉強はしない。絶対にしない

僕だつて一時期は猛勉強してたわ。でも、
真面目に受けたつて異能者扱いされるのが関の山

周りの視線が怪奇の視線に変わるのははつきりと言つて
鬱陶しいんだよ。鳴声は慣れても怪奇はなれていないからね

「その方針をどうにかできないのかねえ…」

「寝言は寝てから言つてください。話はそれだけですか？
それだけですよねえ。じゃ、この後は異端審問会に任務報告が
あるので帰りますね」

僕は部屋から出ようと、ドアを開ける

「ちよつと待ちな

まだなんとかあるんですか？

「まだなんか用ですか？」

「アンタ、零都れいとさんのことなどをどう思つているんだ？」

……」Jのクソババア、なにを訊いてるんだ？

「父親。それ以上でもそれ以下でもありませんね。
昔は憧れや目標などというくだらない事も考えていましたが、
今となっては僕の人生での最大の黒歴史ですよ

そう告げて、部屋を後にする

でも、父さんの名前なんて久しぶりに聞いたよ

「これより、Bクラスとの試合戦争を始める!」

『うオオオオオ！－！－！－！』

始まつたBクラスとの試合戦争。それと同時に
一斉に教室から出るFクラス前衛部隊

僕もそれに続くように教室を出る

総合点数はFクラス最低の307点。これだとBクラス相手じゃ一撃で終わるね

戦争での最前線での初陣部隊は幾つかある

アメリカ軍は戦場にまずアメリカ陸軍特殊部隊の“レンジャーズ”を

送り込む。“レンジャーズ”は戦場ではどの部隊よりも先に出向き、彼等の活躍で優位にも不利にもことを進めることができる。その役目はかなり重要で、陸軍の間ではエリート中のエリートである。モットーは『Rangers Lead the Way』。（レンジャーズが道を切り開く）

そんなエリート特殊部隊な訳でもない僕は、なぜか初陣部隊に組み込まれた。一緒に居るのは吉田くん率いるFクラス数名

はあ、やる気が出ないな

「サモン…」

やる気のない発動キーを言つと、僕の前に一体の小さい生物が現れる

姿は警察の機動部隊の装備に、機動部隊御用達の防弾盾

防弾ヘルメットも被つていて見た目は殆ど一般の機動部隊と変わらない

ただ一つ違うのは、盾と一緒に短機関銃を持っていることだけだ

盾越しから撃つつもりなんだろう

でも、銃なんて使う召喚獣って珍しいからなんの役にも立たないん

じゃないか？

しかも、格好に似合わず点数だけ見ると弱いしね

「よし、開戦だア！－！」

『うおおお！－－』

吉田くんの号令と共に、前線部隊が一斉に駆け出す

『フン、返り討ちにしてやれ！』

それと同じく、Bクラスの連中も召喚獣を出していく

はあ、僕もやるか

すると、一人の生徒が僕の前に止まった

『Bクラス山浦、お前に数学勝負を申し込む！ サモン！』

数学か…僕はあまり得意ではないね

『Bクラス山浦雅太 数学198点』

『Fクラス仲野宮浪都 数学26点』

『なんだこの点数？ Fクラスの連中よりも低いんじゃないかな？』

「逆に関心するだらう?」

『へッ、とんだカモだぜ！ 行け！』

西洋風の鎧と剣を持つた召喚獣が僕の召喚獣に走り出す。うーん、かなりデフォルトされた召喚獣だね

所詮はモブキャラって感じかな？

剣を振り下ろしたが、それを盾で防ぐ

しかし、六倍ぐらいの点数差のせいか吹き飛ばされ、僅かながら点数を削られる

その僅かが僕の召喚獣には致命傷なんだけどね

『仲野宮浪都 4点』

鬼の補修は流石に嫌だな。また西村先生に学校での態度で口出しされるのも嫌だしね

『へッ、やっぱり雑魚じゃねえか』

「それってかなり悪役っぽい台詞だよ？ しかも、それってなんか正義の味方がバーンって飛び出してきて僕を助ける、つて展開のフラグみたいじゃないの？」

『なに言つてやがる…止めだ！』

もう一度剣を振り下ろそうとする

いやあ、流石に今回は相手が悪かつたね

「皆良く聞け！」

？？？ なんだ？

思わず相手の召喚獣も動きを止める

「Bクラス代表の根本には、ガールフレンドが居るー。」

『なに！？』

「しかも相手は、Cクラス代表の小山友香さんだ！」

『なにイ！？』

「しかも、手作りのお弁当を作つてもうつていいやつなんだ！？！」

『なアにイ！？』

これって今朝僕がやつた技？のパクリだよね？

すると、一瞬にしてFクラス前線メンバーが黒マントと黒覆面を被り、大鎌を持ち始めた

『ゆウるウヤアんウ…』

異端審問会の覚醒だね

FFF団メンバー一人がさつきまで僕が相手にしていた人を含め三人のBクラスメンバーにヨロヨロと近づいていった

『よくも一人だけ良い思いをオホ！ お前等にイ、独り身の辛さが分かるかアホ！』

召喚獣まで異端審問会の制服?になってるよ?

『なんだこいつらー？ 危険だ！ 全力で防除しろー！』

だが、その召喚獣がヨロヨロと三人の召喚獣に近寄ると…爆発した！？

『Bクラス山浦雅太 - 100000点 0点』

『Bクラス麻井直子 - 100000点 0点』

『Bクラス緒方秋斗 - 100000点 0点』

『Fクラス福村幸平 自爆 0点』

「ワオ、一万点の道連れダメージって凄いね

「戦局は傾いたぞ！ 突つ込めー！」

吉田くんの合図と共に、FFF団メンバー全員が突つ込んだ

一人が爆発する度にかなりの人数を道連れにしてるね

「さて、この隙に僕は回復試験でも受けようか

西村さんの補修は嫌だから、今度は全力でね

「これは…どういう状況だい？」

僕がFクラスの教室に戻ると、中はボロボロになっていた

鉛筆は折られ、消しゴムなどはボロボロになっている

「仲野宮か。俺がBクラスと協定を結びに行っている間にやられた」

Bクラス代表、かなり良い性格してるね

うん、僕こうゆうことが出来る人って好きだよ？

無論僕は異性愛者だ。僕は人格的に気に入つたよ、Bクラス代表を

まさに現代の人間の汚さを表したような人だ

「これじゃあ補給もままならない。お前も補給を受けて来たのか？」

「ああ。でも、僕は心配無しよ」

ポケットから鉛筆一式と消しゴムを出す

「それ…」

「僕つて勉強しないだろ？だから筆箱とか
は必要ないからポケットで持ち歩いてるんだよ」

そんなの買つてもお金の無駄だしね

「そうか。なにそれと何が何とつと
前線に戻つて」

「ただでさえ少しあは役立たずなんだ」

言つてくれるね、代表

でも、否定はしないよ

「じゃ、お言葉に甘えて。先生！　回復試験を
お願ひしても良いですか？」

「教科は？」

別になんでも良いんだけどねえ

「じゃあ、比較的不得意な数学をお願いしまーす」

「なんで不得意な科目を懲らしんで、では、回復試験を始めます」

僕は皆より一足先に、回復試験を受けた

「つま、なんだ？」

僕がBクラスの戦地に行こうとすると、なぜかCクラス前で人だかりが出来ていた

ツチノコでも出たのか？

近づいてみる

すると…

「どうにかって言つたつて、僕に四人も相手しinとーー？」

「どうにかって言つたつて、僕に四人も相手しinとーー？」

猛スピードで吉田くんと島田さんがこちらに向かって走ってくる

その後ろにはBクラス生徒四名

「あー、仲野宮ー。」

島田さんが僕に気付いたのか、吉田くんと一緒に僕の後ろに駆け上り立つ

『よし、追い詰めたぞ！ わたしといつも付けて坂本の首を取れー。』

うわ、なんという小物台詞

「なんで僕の後ろに？」

「補修は嫌なんだよ！ 鉄人の補修はどうしても嫌なんだー。」

「僕は君達がどうなんだか知ったことじやないんだけどね

この前は気持ち悪いとも言われた サイン

「仲野宮くそはやっぱり肩だー。」

「あらがとう、最高の褒め言葉だよ

「褒めてないー。」

あああ。まあいや

「しょうがないね。今回は特別だよ？」

僕は正面にまで迫つて来ている四人に向き合つ

「ねえねえ、僕たちみたいな雑魚は無視して代表を追つた方が良いんじゃないのか？」

『それはお前等を追つてている途中で気付いたんだが、ここまで來たなら倒したいんだよ』

「じゃあ交渉決裂つと。実力行使だね。

Fクラス仲野宮浪都、君達四人に数学勝負を申し込むよ。サモン

『へッ、Fクラス程度が強がるな！ サモン！』

それぞれの点数が表示されていく

『Bクラス長谷川和彦 215点』

『Bクラス谷口直人 178点』

『Bクラス中川次郎 161点』

『Bクラス内村修司 183点』

うん、中々の点数だね

得に最初のBクラスの人、一百点越えだよ？

数学が得意なのかな?

でも…

『『『なツ…!…?…?…』』

「仲野富くん…」

「嘘でしょ…」

僕には及ばないね

『Fクラス仲野富浪都 417点』

吉田くん達も含めて全員が僕の点数に驚愕していた

「数学はちょっと苦手でね、あまり良い点数じゃないよ。

まあいいや。君達を斃り殺すには丁度良い点数だね」

召喚獣が短機関銃にマガジンを入れる

「論理的に君達全員を銃殺してあげるよ」

満面の笑みでそう告げる

六問 肩とババアとBクラス（後書き）

いかがでしたか？

最初の辺はアニメ、後半は漫画ですか

しかし、主人公の召喚獣が機動隊とは…

どのような装備か知りたいのであればWikiaなどで調べてみてください

過去話のフラグをもう一度組み込んでみました

ちゃふと回収できるかどうか…

今回の質問

教師の一言でイラつと来たことはありますか？

僕は数え切れないほどありますね。殴りたいと思つ時もあります

（睡眠）

七問 肩と戦争と戦争嫌い（前書き）

今回は重い話です

バカテスの雰囲気皆無です

好みの方はスキップしても構いません

あまりといつかまったく進まないので

後、今回で連続投稿は終わりです。もつ一方の小説と回じようじ、書きあがったら投稿する、といつ更新になります

では、七問です

七問 肩と戦争と戦争嫌い

「論理的に銃殺してあげるよ」

そう告げ、短機関銃の引き金へと召喚獣が手を掛ける

『ひ、怯むな！ 縱然点数が高くても総合的には俺達の方が上だ！ 囲んで討つぞー!』

リーダー格の生徒の合図と共に、全員の召喚獣が僕の一体を囲み始める

多対一では良い作戦だね。それこそが多対一の利点なんだから

「もう作戦会議は済んだかい？ ま、どんな作戦を立てても君達みたいな雑魚が勝つことは永遠に無いんだけどね！ あはは！」

遠慮もなく引き金を引き、一人の召喚獣へ弾丸の嵐を放てる

避けようとしてるけど、弾丸の銃口初速ってどれくらいか分かってるの？

弾丸の速度は銃の種類によって違うけど、

今僕の召喚獣が持っているのはH&K MP5Kという短機関銃で、銃口初速は400m/s

とても人間の反応が追いつける速度じゃないよ

案の定、命中率はフルオートで悪かつたけど、かなりの数の弾がその生徒の召喚獣を蜂の巣にする

『Bクラス谷口直人 〇点』

「戦死者は補修ウウ！！！」

何処からとも無く西村先生が現れ、さつき僕が倒した生徒を連行していく

『谷口！ クソ！』

これで残り三人だね

空になつたマガジンを出し、別のを入れる

『とにかく動き回れ！ あれでも片手だ、そこまで命中率は良くないはずだ！ 動き回つてさえいれば当たることはない！』

うん、正解だよ

確かに片手で毎分800発も打ち出せるMP5Kだと当て難い。それに加えて盾越しだからね。視野も狭いでも、それを期に僕に接近しようとするのは…

『お前の首、もうつた！』

失敗だね！

一人の召喚獣が接近してきた瞬間、盾で思いつきり殴る

機動隊が犯人鎮圧に使う基本攻撃だよ

そもそも機動隊はあくまで犯人の”逮捕”が目的でSWATと違い殆どの場合は犯人を生かして捕らえる。だから機動隊は火器なんて殆ど持たず、格闘で鎮圧するからね

逆にSWATは犯人を生かそうとはするけど、銃の発砲許可を貰うと殺傷させる場合が多いね。アメリカは得に物騒だと聞くし、それは驚きではないけどね

『Bクラス内村修司 32点』

『ちッ、こいつ、召喚獣の操作が上手いぞ！』

『待て、慌てるな！ まだ負けた訳じゃない！ 突っ込め！』

三体の召喚獣が僕に向かつて突っ込んでくる

全員が剣を向けて凄い剣幕で警察官に突っ込むって、それってどうかな？

銃を乱射するが、これといった決定打も『えられず、接近を許してしまつ

ちなみにさつき乱射した時にマガジンを一個使い切つてしまつた

やつぱりMP5Kの15発といつ小さい弾倉は対一じゃ不向きだね

「あ…」

さつきまで三体の猛攻を防いでいた盾が弾き飛ばされた

『盾が無くなつたぞ！ 殺れ！』

これはちょっと拙いね

でも、接近戦が拙いのは変わらないよ！

田の前まで迫ってきた一人の召喚獣の胸ぐらを掴み、
抱ぎように背中に貼り付けて…力いっぱい振り下ろす！

『なッ！？』

『Bクラス内村修司 0点』

「ねえねえ、君達知らないの？ 日本警察は全員が柔道や合氣道の心得を持っているんだよ。犯人鎮圧のためにね。だからそんな近づいたら駄目だろ？ はつきりと言つと、真ん中の君、リーダー失格だね。警戒もせず突っ込んじゃつて、全滅することも考えなかつたのか？ うん、全て君の所為だよ。ほら、他の三人も全員君のことを憎むよ？ あはは！ 生涯ずっと三人の人間に憎まれながら生きるんだね！ あははは！」

今言つたことは全部嘘だけね

まあ、僕には他人の考なんて読めないから

ちなみにさつきの業は背負い投げ、という一本背負いを
もうちょっと簡単にしたような業だよ。

『あああああ……あああああ』

唚然としながら座り込んでしまう真ん中の生徒

確か、数学で一百点台を出した生徒だけ？

残つた一人はどうにかして真ん中の生徒を励まそうとする

僕はこんな茶番劇に付き合つほど人間として出来上がつてないよ？

僕は慰めようとしている生徒の召喚獣へと近づき、腰の辺りを持つ。そして、その体勢のまま後ろに振り向き、足でアイツの足首を思いつきり払う！

『あーーー』

気付いた時にはもう遅い

『Bクラス中川次郎 〇』

払い腰、一本！

さて、残りは…

「君だけだね」

最後のリーダー役っぽい生徒だ

「うーん、やっぱり退かなかつたのが君達の運の尽きだつたよ
君が調子に乗るからだね～。全部君の所為だ」

またまた全ての罪を押し付ける

うん、この落ち込んだ顔を見るのが最高だよー

達成感が凄い！ 嬉しいな！

ククク、もつと痛ぶつてあげるよ

「まずは一発」

召喚獣の腰から一丁の拳銃を取り出し、セーフティを外した後、長谷川くん（確かこんな名前だったはず）の召喚獣の太ももを打ち抜く

召喚者本人は相変わらず地面を向いたままだけど、
召喚獣は地面上に這いつぶつに動き回る

あははは！ 例え召喚獣でも苦痛の表情を見るのは快感だよ！ まるで僕のマイナス感情が
浄化されてる気分だ！

『Bクラス長谷川和彦 184点』

可哀想に、あんなに点数が高くなきやもうひとつへ

終わってるのに。でも、久しぶりの喧嘩だよ、簡単には終わらせない

「次」 「

地面に這っている召喚獣のわき腹に蹴りを入れる

うん、どこから見ても不良が通行人をボコボコにしてる光景にしか見えない

『Bクラス長谷川和彦 170点』

「まだまだ」 「

今度は拳銃で右腕を打ち抜く

これって本当にラブコメティライトイノベルの一次創作か？ それには似合わないグロテスクでえげつない光景だね

『Bクラス長谷川和彦 142点』

「もつともつと」 「

僕の意思と関係無しにバンバンと背中を撃つていく召喚獣

僕と気が合うね、僕の召喚獣だからかな？

『Bクラス長谷川和彦 38点』

うーん、もう飽きたね

「これ以上はもう一撃で戦死しちゃうし、
もつ苛めるのに飽きたからね

止めと行こうか

「じゃあ、やめなさい」

拳銃から弾倉を引き抜き、腰の付いているベルトから
別の弾倉を入れ、弾をロードする

そして、拳銃を相手の召喚獣の額に押し付けて…

《バン！》

引き金を引いた

うん、凄い止めの刺し方だね。僕も感激だよ

《Bクラス長谷川和彦 0点》

「戦死者は補修！」

それと共に、西村先生の補修室に連行される

田は虚ろのままだね、最高だよ

ククク、久しぶりの苛め

しかも召喚獣だからなんの犯罪にもならない

まさに完全犯罪！なんちゃってね

「全部終わつたけど、なんで一度も僕を助けてくれないのさ？」

さつさまで存在 자체を忘れていた一姫と向き合つ

吉田くんと島田さん

「な、仲野宮くんの点数を見た時、助けなんて要らないかな？って思つちゃつたんだよ。しかも最後の人にはえげつないことをしていたし。

決して君を生贊にして逃げようとなんかしていなかつた！」

「自分の目的を喋つちゃつてるよこの人。ねえ島田さん、吉田つてどれだけバカなんだい？ なにを基準にすれば良いか分からんないんだけど」

「そこまで言つ必要はないだろー！」

「そりね…猿でも基準にすれば良いんじゃないかしら？」

「島田さんもー!?」

それは猿に失礼だよ、島田さん

「Es ist nicht unhöflich, einem Affen oder nicht?
(それは猿に失礼なんぢやないのかな?)」

「Huch sicherlich tun (確かにやつね)」

吉田くんをからかうためにドイツ語で話して、島田さんもそれに乗つてくれた

「Wenn es etwas anderes was? (なら他になにがあるかな?)」

「Nun - ich nicht sagt Toka Raupe? (じゃあ、芋虫とかで良いんじゃないの?)」

「Es ist eine süße Idee. (それは名案だー。)」

吉田くんはなにがなんだかわざとばかりみたいだね

うん、もつと困つてくれ

「じゃあ、今から君の認識は芋虫に決定したよ」

「ちゅうど待つて! ? なにをどうしたら基準の話から
僕をなんの動物で認識するかの話になるわけー。」

「芋虫は喋る物じゃないよ? とにかく五円螺いかり
口を開じてくれ。口を開じる。息をするな。呼吸をするな。
口に出すな。鼻息もするな。酸素を取り込むな。二酸化炭素を
出すな。存在するな。死ね

暴言を短機関銃のよつて乱射する

吉田くんは暴言を受けた！

効果抜群だ！

吉田くんは倒れた！

「一人共酔いよ…」

「まあまあ、そつ落ち込まないで」

「貴様の所為だろ、仲野宮一！」

吉田くんはガラスのハートの持ち主なのか？

それならバラバラに切り落として碎いてあげたいよ

一度と修復できないうちに粉末状にしてね

でもそうすると貴重な生贊が無くなってしまう

「それより、アンタ…」

「ん？」

島田さんがジーっと僕のことを見つめている

なにか顔にでも付いてるのか？

「なにか？」

「どうこいつもつよ、あの点数！」

ああ、あれのことか。確かに眞面目にテストを受けた状態では始めての戦闘だったね。敵があつさうと負けてくれたけど

「そりだよ仲野富くん！ 四百点越えなんて普通に出る点数じゃないよ！ しかもあの時出来が悪いって言つてたじやないか！」

確かにあの点数は僕としては悪かつたよ。でも、あれは僕の数学での全力だからね。

苦手科目だとやっぱり400点ギリギリだった

「アレこそが僕の数学での限界だよ。あまり良い点数とは思わないけどね」

「仲野富くんの成績基準はいつたいどつなつてるんだよ…」

「時が来れば分かるさ。それじゃ、僕は戦場に戻るよ。君達も早くしなよ？」

Bクラスへと向かう

うーん、戦局はどうなつてるかな？

2・F異端審問会が大半の前線部隊を道連れにしてくれたけど、流石に四つもクラス差があるからね。多分かなりの人数が戦死してると思つよ

「あー、やつにえは言こ忘れていったよー。」

クルッと吉田くんと島田さんは向かなおす

「なによ?。」

「君達が今こじで見たことや聞いたことは絶対他言無用だからね?。」

「これ大事です。これ大事です。大事なことなので一回言こました

「なんですよー。アンタが前線に出てくれればかなりの戦力になるし

…」

「島田さん、だからだよ」

「え?。」

吉田くんは分かつてゐるじゃないか

「そう。僕は戦場に行くのがどれだけ嫌だか君に分かるか?
僕は兵器みたいな扱いは受けたくない。ましてや戦争紛いのことド
ね」

「アンタ、なんでそこまで戦争を嫌いの? これって
本当のとは全然違つし…」

「戦争であることに変わりはないんだよ。だから僕は
試合戦争が嫌いなんだよ。君みたいな子供が出てくるから

島田さんは典型的な文月学園出の生徒だよ

戦争を軽く見てる

「…こんなことをしているから生徒達が戦争の間違った考え方を持つんだよ。こんなに軽々しく”戦争”と口にしてるしね。

君達は戦争ってなにか知ってるか？ 国と国の殺し合いだよ。

第一次世界大戦を例に挙げてあげるよ。

日本の主の対戦相手は米海軍と空軍だ。これは日本がアメリカの真珠湾を奇襲攻撃したからによる参戦だったからだよ。

開戦当初は日本も勝利を重ねていた。航空機だけで戦艦を落とすという

戦争で画期的な戦闘方法を始めて行つたことでも有名だよ。でも、ミッドウェー海戦

での大敗と山本五十六の戦死の影響で日本は戦局的にも経済的にも追い詰められていた。

そこで日本が起こした行動はなにか知ってるかい？」

「神風攻撃…」

吉田くんが呟くようにそう言つ

確かゲームが好きだつたそうだね。それで知ってるんだ

「そう。日本は零戦機を使って神風特殊攻撃隊を編成したんだ。爆弾を積んだ零戦を使って戦艦や空母に体当たりといつ馬鹿げた作戦だ。

でも、それだけじゃない。あまり知られていないけど、日本はこの馬鹿げた神風攻撃よりもさらに酷い作戦を行っているんだ。

それは、桜花っていう兵器だ」

「桜花…？」

やつぱりあまり知られていないね。まあ、日本は神風の方が印象的に残っているからね

「そう。桜花っていう兵器が運用され始めて、その内容は…」

「ここの間を入れて、威圧感を出しながら言つ

「…人間爆弾だよ

「え…？」

「うそ…」

嘘じやない、紛れも無い事実だよ

「口ケットのような形をした爆弾の中に操縦席を内蔵して、いわば操作できる爆弾だよ。陸上攻撃機の中に積まれて敵艦船の上空に行つて、人を乗せたまま落とすという恐ろしい兵器さ。もちろん搭乗員の命は無い」

あまりにも衝撃的な内容に言葉を失う一人

うん、どうやら僕が戦争が嫌いな理由が分かつてきたみたいだね

「それだけじゃない。陸上攻撃機ってなにか知ってるか？
その名の通り敵を爆撃するための戦闘機だよ。でかく速度も遅い、
航空機には格好的だ。この意味が分かるかい？」

分からぬよ、平和な時代に育つてゐる人は

「桜花は敵艦船にたどり着く前に殆どが落とされたんだ

殆ど自殺行為に等しい

攻撃機が一つ落ちる度に数十人の命が失われる。攻撃に成功した
桜花なんて殆ど居ない。護衛の零戦も少なく、それどころか護衛まで
打ち落とされる始末だよ。まったく、馬鹿げた作戦だと思わないか
？」

事実、桜花の戦死者は神風での戦死者に近い

あまりに成功率が低かつたから中止されたが、もし
神風のように終戦まで決行されていたら間違いなく
神風以上の戦死者を出しただろう

しかも、米軍の博物館では桜花のことを”BAKA BOMB”つ
て呼んでる

アメリカもこの作戦は馬鹿げたことだと思っているんだよ

「他にも”回天”や”震洋”などの”人間兵器”があるけど、話を

「聞きたいかい？」

僕はそう訊いてもなにも言わない一人

「僕が言いたい意味が分かるかい？ 戦争とはそういうものなんだよ。

こんな子供だましな遊びじゃなく、人命なんて一の次、いや、三の次ぐらいだった」

僕が話し終わっても言葉を発しない一人

あはは、さっきまで戦争に関してはなんの知識もない人がこれを聞くと確かにキツイね

ちょっとやりすぎたかな

「ちなみにアメリカのアフガニスタン紛争の関与時に日本の自衛隊も

数十名が送り込まれているのは知ってるよね？ でも、兵士じゃなくて

自衛隊の医薬機関の方達だ。つまり、戦闘とはかけ離れた医者が、戦地

に出向くって意味さ。お陰で殉職者は少なくなかったよ」

その中にも僕の従兄が居るしね

楽しかったなあ、従兄と居る時は…

「僕の従兄もその一人さ」

「　　――」

驚いた表情をする一人

「だからアンタ……あんなに試召戦争に出たくないって言っていたの……」

「別に僕の従兄が戦死したから戦争に出たくない訳じゃない。
それだと銃なんてとつくに破棄してるさ。僕の従兄の死は間接的に
関わっているや」

「間接的？」

「君達は知る必要はないね。

で、これで分かつてくれたかな？ 僕が
この成績のことを言われたくない理由」

「う、うん。分かつたよ。ごめん、仲野宮くん。
こんなことを話させて……」

吉田くんに謝られる

僕に謝る必要なんてないよ。ただ分かつてくれればそれで良いんだ

「別に良いさ。じゃあ、僕はもう教室に帰るから。
さつきは戦場に行こうかなとは思っていたけど、もう
気が向かないね。精々負けないように頑張ってくれよ?
あはは」

いつも通りにこりと笑い、一人を後にする

うーん…久しぶりに長々と話したね

でも、歴史は好きだし話すのも楽しかったからね

じゃあ、僕は我がFクラスの勝利を祈りながら昼寝でもしようか

まあ、半分は嫌がらせでもう半分は面白半分だけどね

あれ、それって真面目な部分つて無くね？

七問 肩と戦争と戦争嫌い（後書き）

いかがでしたか？

主人公が戦争嫌いな理由、その氷山の一角を見せました

まだまだ過去話には入りません

第一次世界大戦の知識とアフガニスタンの知識は全て作者の自知識からです。もし間違っている点があつたら指摘してください

神風特殊攻撃隊　航空機が爆弾を積んで敵艦船に体当たりする戦法。戦死者およそ6000以上

桜花　一式陸上攻撃機で敵艦船の上空まで行き、切り離して落下させる有人ロケット

回天　水中魚雷に操縦席を内臓させ水中から敵艦船に体当たりする戦法

震洋　モーター・ボートに爆弾を積んで敵に夜間攻撃をする戦法。16～22歳の少年兵が決行。戦死者はおよそ1636名

今回の質問

一番”好き”な授業はなんですか？ 成績は問いません

ちなみに僕は日本史と世界史の授業が大好きです
（睡眠）

八問 肩と呼び名と愛犬家（前書き）

毎日更新がこんなにも早く終わつた…

残念です

今話では主人公の意外な一面が見れるはずです

では、八話です

八問 肩と呼び名と愛犬家

『勝者 Fクラス！――』

「んがつ？」

大きな物音が響いたと思ったら、誰かの雄叫びと共にそれが聞こえた

Fクラスの勝利

本当に勝つちやつたよ、Fクラスが

どんな手段を使ったかは分からぬけど、マトモな手段じやないことは
確かだね。だつて、大きな物音の後になにかが崩壊するような音が
響いたんだよ？

しかもそれに加えてガラスが突き破る音も聞こえたし、絶対に犯罪
行為擦れ擦れの
ことをしたに違ひない

「やつぱり僕の手伝いは必要無かつたね。いや、それ所か
”余計なお世話だ！” って言われてもおかしくないよ」

僕は基本、馬鹿で勉強のできない肩で通つてるからね

吉田くんと島田さん以外はみんな僕のことを馬鹿だと
思つてゐるから。いや、観察処分者の吉田くんには前から

馬鹿とは思われていな」と思つた

でも、実際は僕の点数って吉田くんより酷いんだよ？

総合科四百三十点台とこいつ誇るべき学園最下位の地位

さて、僕も一応は自分のクラスの勝利の様子でも眺めようかな

「根本、お前がコレを着て今言つた通りに行動したら
それだけでも許してやつて良いぞ」

根本くんの前に出されたのは一着の女子制服

あ、あれを着るつもりなのか…？

「ふざけるな！ 誰がそんなもの…？」

ちよつと、いや、まったく似合わないと思つただけど

「ふざけるな！ 誰がそんなの…？」

流石の根本くんも着たくないのか拒絶しようとすると、

Bクラスの生徒からボディブローが炸裂した

「グツ！？？」

『『『Bクラス全員で実行しよう！――』』』

相当嫌われていたんだね、根本くんは

まあ、僕もお互い様だけど

「うわあ、君達もとうとうそんな趣味まで持つようになったんだ
ね。正直に言つて引くよ。変態だね。近寄りたくないぐらいだ」

「へっ、それはお互い様じやねえのか、仲野宮？」

それもそうだね、坂本代表

「Fクラスの勝利、おめでとう」

「とても祝福してるよ！」
「聞こえねえな

「受け取り方は君達しだい」

それより、良く僕だと氣付いたね、代表は

「フン、回復試験を受けた後直ぐ瞬殺された
奴が言つじやねえか。ええ？」

随分と喧嘩腰だね。機嫌でも悪いのか？

あ、僕だからか

「勘違いしないでくれ、僕は確かにあの後一切戦っていないが、補修室送りにはされていない。ま、首の皮一枚繫がつたってことさ」

本当のところは四人と戦っていたんだけどね

まあ、あんな小物ぐらい倒したぐらいじゃ誇れないよ。点数だつて苦手科目なだけあって低かったしね

「腰抜けの弱虫みてえに逃げ回ってたか。無様だな」

「解釈はどうぞ」白由こ

腰抜けだつて構わないさ、今まで言われてきた”死ね！”よりはマシだしね

アレは心の底からの殺意だつたから

「ゆ、雄……」

「ん？ なんだ明久？」

吉田くんがちょっと弱気になりながら代表に話しかける

「その、あまり仲野富くんを悪く言わないでくれるかな？ 彼だって、事情とかがあるかもしれないし……」

あらり、僕つてそんな捉え方をされてるの？

もしかして二人共僕は根が良い奴だと勘違いしてるの?

駄目だなあ、ソレは。僕は根っからの屑だから、そんのは一切無いよ

よく漫画とかでは敵キャラが味方側に付くってパターンがあるけど、そんな感情なんて僕には皆無だよ

少なくとも、他の皆は思つちや居ないね

「…明久、お前どうとう頭がイカれたのか?」

「なんで僕が頭のイカれる直前だったみたいな言い方をするの…? 完全に正常だよ! なんの問題も無い普通の人間だよ!」

「芋虫じやなくて?」

「底つてあげてるのになんでそんな事を言つのヤー?」

事実だからじゃないの?

「まあいいや。とにかく、こんな奴なんぞ居ても居なくとも関係のねえことだ。これは今回で証明できたな?」

まあ、もし僕が居なかつたらあと二人の戦力、しかも数学での主戦力の島田さんを失うことになつていただけね

「そんなことは無いさー、だつて仲野富くんが居なかつたら今頃僕らは…」

そこから先は吉田さんの言葉が途切れで聞こえなかった

それもそのはず、島田さんが後頭部を殴り飛ばしたからだ

「な、なにをするのを島田さん…?」

涙田で島田さんと訴える

「ちよつと手が滑つただけよ」

「ちよつと滑つたのが右ストレートの体勢に…」

僕も突っ込もうとしたら顔面に裏拳を喰らつた

「や、そんな馬鹿な…僕が反応できなかつた?」

自惚れてこる訳じゃないけど、腐つても柔道一級と合氣道二級だからね

その僕が反応できないとほ、何者だ島田さん?»

「おこ島田、びつこいつもりだ?」

「本当にちよつと滑つただけよ」

強引だなあ、まったく

『おい! 根本の準備が出来たぞ!』

Bクラスの生徒から始まりの合図が来る

ああ、見たくないな

見たら石になる…って感じだよ

「クソ…厄魔だ…」

で、出たアア……つてこののは[冗談で、実際はそのままのイメージ
だった

根本くんが制服を着た、そんなイメージだ

まあ、子供には少々強烈だけどね

「うそ、この僕でも田が腐り落ちそうだよ。悪いけど失礼するね」

逃げるよついに教室を出る

多分田を消毒剤で浸れないといけないね

急いで帰路へ着く

行つたか…

根本の登場と同時に手で目を覆い隠し、教室を出て行った仲野宮

アイツでもさすがにアレは強烈だったか

それよりも…

「ムツツリーー。ちょっとこっちへ来てくれ

わつきから写真を撮つているムツツリーーを呼ぶ

あんな写真、ムツツリ商会じゃ売れるとは思わねえけどな

「……今は忙しい

「いいからこっちへ来い。ちょっと頼みたいことがあるだけだ

」こつしか出来そうにないしな

Fクラスの情報屋、ムツツリーーしかな

「……なんだ？」

「なに、お前には簡単だ。仲野宮浪都についてなんでも良いから調べてきてくれないか？」

ムツツリーーにとっては造作でもないことだろ、人を調べるぐらい

これでもアイツは試召戦争の時に敵地へなんども偵察や情報を調べてきたんだ

インターネットといつ便利な物もあるし、ムッシリーほどの腕があれば簡単だろ

「……なぜ急に？」

「明久と島田が怪しかった。あいつのなにかを隠そうとしていてとにかくなんでも良い、できるだけあいつを調べて来い」

「……承知」

伝え終わると、再びカメラを取ろうとムッシリーは人混みに戻る

さて、仲野富の件はこれで大丈夫だ

後はAクラス攻略を考えねえとな

「で、君達は僕になんの用かな？」

「別に…」

「ちょっとどうりで良いじゃないか」

何故か僕と同じ道を歩く一人の生命体、いや、人間

吉田くんと島田さんだ

今はもう学校外だよ？ 故に僕はもう学校生徒との関係は次の朝まで断ち切られたことになるんだ

「ストーカー罪で訴えちゃうよ？ ただでさえ既に一人のストーカーが居るんだ、これ以上増えると強行手段を行わなければならぬ」

銃で脅すとか、取り押さえて警察に突き出すとか

「だあかあらあ、ストーカーじゃないって言つてるでしょー。」

「……かと言ひながら僕と同じ道をいつの間にか歩く君には説得力が皆無なんだよ、長瀬」

「うわー！」

いつの間にか存在していた長瀬に驚きの声を上げる吉田くん

「えっと…誰ですか？」

「私は」隣に住むストーカーさんだよ。あだ名は長瀬「逆よ！私は
△クラスの長瀬流歌。」「こつとは知り合つよ」

「それほど親しい仲だつたか、僕ら？」

「知り合いで親しそうねつて…」

それぐらい僕たちの関係は蒼白な物になつていてるんだよ

「浪都はこつもこつよ。慣れなさい」

君でも慣れていないのに他人に慣れると？

「でも、名前で呼んでるならそれなりに仲が良いんでしょ？」

「あはは、冗談は止してくれ。それを聞くだけで頭がイカれそうだ。あ、もうイカれてるか！ あはは。うん、昔はそうだったけど、今となつちゃ赤の他人さ。長瀬の短い思考回路だと呼びなおすのが面倒なだけなんじやないのかな？」

「……浪都つて時々心から傷付くような」とを言つよね

涙目になりながら先を急ぐよつて僕らを追い越した

あはは、なにをそんなに悲しそうにするのかな？

君だってこの状態の方が本望なんだろ？

「な、仲野宮くん！ 後を追わなくてもいいの？」

焦った表情で僕に訊いてくる吉田くん

「ん、なんで？」

「いやだって、アンタが泣かしたんでしょ！」

それがどうして後を追うのと繋がるのかな？

僕に謝れども？ 別に僕には罪悪感なんて無いし、

あの程度で泣くよつた長瀬が悪いのさ

「それが？ 生憎と僕の感情は麻痺していくね。
罪悪感とかを感じないんだよ」

「あ、あんなにかわいい女子を泣かしたのに、って痛たたたた！」

！－

痛いよ島田さん！ 僕の間接はそりけには曲がらな……ああ－－－－！

”かわいい”とこう言葉を発した途端に関節技を決め始めた島田さん

中々上手いね。格闘技とかをやっているのかな？

「ま、ウチもこんなこと取り乱すような子供じゃないから。我慢してあげる」

それは攻撃する前に叫んだよ？

「それよつ仲野くん！」

「なんだい？」

今日は質問が多いな

「”仲野田くん”って呼ぶには余所余所しいから、
君のことを浪都って呼んでいいかな？ もう他人では無いし」

「うーん、確かにやうだね

まあ呼び方なんていぢりでも良いけど

「別になんでも良こよ、島田くん」

「だから僕の名前は吉井明久だつて！ まだ
その呼び方は変えないんだね！？」

「」の呼び方は一生変えるつもりはないね

「じゃあ、吉井。アンタもウチのことは美波つて
呼びなせこよ。ウチもあなたのことは”アキ”つて呼ぶから」

なんで「」で島田さんが入つてくるんだ？

「え、でも島田さんは…」

「なによ、駄菓子屋の？」

拳を「」キーパキと鳴らしながら訊く

いや、それは訊いているんじゃないくて”脅迫”つて言つんだよ

「わ、分かったよ、美波」

うん、これは異端審問会は黙っちゃいないね

明日が楽しみだよ。フフフフフ

「あ、それと、ウチもあんたのことは名前で呼ぶから、アンタもウチのことは名前で呼びなさいよ」

「断る。名前で呼ばれるのは構わないけど、僕自身が名前で呼ぶのはお断りだね」

そこまで仲良くなるつもりなんて一切無いし、なにより馴れ馴れしくて仕方ないんだ

あ、僕はここまでだね

自分のアパートが見えてきた

「じゃあ、僕はここまでだ。また明日。出来れば会いたくないナビ
ね」

「最後の最後でなによ……」

「長瀬さんが言つてた”慣れろ”が難しく思えてきた……」

まあ、精々頑張つてよ。僕は応援なんてしないけどね

僕は一人を後にし、マンションの階段を上る

「」は古くてエレベーターが無いからね、上に上がるだけで
ちょっとした運動になるよ

「ただいま」

《ワン!》

ドアを開けて第一声が太郎の鳴き声だった

普段は大人しいけど僕が学校から帰るといつも
テンションが上がるんだ。数分で収まるけど

「よしよし、良い子にしてたねえ~」

頭を撫でながら穏やかな口調で言つ

うん、学校の人見られたら恥ずかしさで死にたくなる

「よし、じゃあ『飯に』しようか~」

冷蔵庫からは「コンビニ弁当を取り出し、棚の中からは
ドッグフードを出す

ドッグフードは太郎の皿に乗せ、自分はお弁当を食べ始める

食卓には僕一人だけ

そう、一人

この孤独には随分慣れたものだよ

でも、今年になつて寂しさが段々と増してきた
なぜなのかな？

まあ、しばらくしたら元通りに戻るでしょう

やつぱり新しい犬でも家族に加えようかな？

ちなみに”飼う”とは言わない

犬は家族！ ペットではなく家族だ！

故に家中では自由にさせたい

そう、犬とはペットではない！

相棒でもあり、兄弟でもあり、家族もある！

やつぱり柴犬をもう一匹引き取ろうかな？

それとも道に捨てられた子犬とかも拾おうかな？

まったく、酷いことをするものだよ

犬を捨てるなんて神をも冒瀆する行為だ！

犬は人間と同じぐらいエライ！

これを聞いた大半の人は僕が狂っているっていうことを再認識したらしいね

なんでだろう？

八問 肩と呼び名と愛犬家（後書き）

いかがでしたか？

明久と美波とは仲が良くなり始めている主人公
でも本人はまだ一線置いているつもりだそうですが

主人公の異常なまでの犬への愛着心はどうでしたか？

作者も同じ風に考えてますよ？

犬はペットではない、家族だ！

今回の質問

学校の休憩時間はなにをしていましたか？

ちなみに作者は友達に数々の豆知識を言つていました

一時期はあだ名が”クソチビ”から”無駄知識”へと変わりました

（笑）

（睡眠）

九問 肩と勝負と△クラス（前書き）

今回から△クラス戦です

そして、数少ない漫画記憶を榨り出しながら書きました

うーん、なぜアニメと漫画がここまで違つた！？

では、九話です

九問 肩と勝負と△クラス

「嘘、『機嫌よー』

『総員、ねら…』

その後を聞くまでもなく、扉を閉める

直後、ドアに無数のカッターナイフが突き刺さる

「数日、毎日」などなことが起きるね

偶には別の攻撃方法を思いつかないと対策を練られるよ?

「いつもいつも温かい朝の挨拶をありがと。」

今度はどんな理由かな?」

『いつまで惚けるつもりだ、仲野宮! 貴様が
先日、我々の血の制約を破り女子生徒一名と一緒に
下校し、またその内の一名を泣かせたという情報が
入っている! そのような不届き者を放つておいて
良いのだろうか?』

『『『否ー、否ー、否ー』』』

『ならば総員、武器を持て! この者を

血祭りに上げ、見せしめとして学校の校舎に吊るせー。』

なんてグロテスクな事を提案するんだろう、須川会長くんは

それってラノベ漫画でやつていい行為なのか？

FFF団メンバー数十人が武器を持ち、僕に向かってくる

あはは、懲りない人たちだね

（十 分 後）

『貴様…覚えていろ…』

『FFF団の真の恐ろしさは…これからだ…』

まるで冒険漫画の悪役者のような捨て台詞を残し、気を失った

うん、前回より五分も時間を短縮できたよ

そろそろ初段を取つてみようかな？

「とまあ、柔道の試合を見終わったことだし、
ホームルームを始めよつと思つ」

何事もなかつたかのようにホームルームを進める代表

完全無視か、懸命な判断だね

「まず、お前達に感謝を述べたい。正直ここまで来れるとは思わなかつた。だが、お前達のお陰で俺達はこの学園の歴史に残るようなことを成し遂げることが出来る。見せてやうぜ！ 学力なんかが全てじやねえ！」

『やうだー。』

代表の演説にいつの間にか復活したFクラス生徒が賛同する

やつぱり凄い統率力だ

「俺達に必要なのはこんな卓袱台じゃねえ！ Aクラスのシステムデスクだ！」

『そりだ！ 良いぞ代表！』

「そして、Aクラス戦のことだが、俺は一騎打ちで勝負しようつている！」

一騎打ち？ だからか。一回勝てばそれで済むしね

一番勝率が高い

『一騎打ち？ 誰と誰がやるんだ？』

「もちろん、俺と翔子だ」

翔子？ ああ、Aクラス代表のことか

名前で呼び合う仲なんだね

『おい待てよ！ 坂本じや学年主席には勝てないぞ！ なぜここで姫路さんを出さないんだ！？』

それは僕も同意見だね

彼ら昔は神童と呼ばれた代表でも学年主席には勝てないから

他人から見ればとても高い点数だね

「皆、落ち着け。俺は必ず勝つ。翔子に打ち勝ち、俺達FクラスがAクラスの設備を手に入れる。俺を信じろ。かつては神童と呼ばれた俺の力を、お前等に見せてやる！」

うオオオオオ！――！――！」

クラスの士気は最高潮になつた

このクラスはやっぱり元気だけが取り得のようなクラスだね

「で、具体的な説明だが……」

あまりしつかり聞いていなかつたから覚えてないけど、確か召喚獣での戦闘は行わず、純粹なテストでの点数を競う

そうだ。科田は日本史、小学生レベルの問題で、テストは百点満点の上限あり、という条件らしい

そんなの、満点に決まってるじゃないか

でも、代表の話によるとそのAクラス代表は“大化の革新”の年号を必ず間違えるらしい。昔に嘘を教えたそつだ。汚い手を使うね

「あの、坂本くんは、霧島さんとは仲が良いんですか？」

姫路さんが代表に聞く

小さい頃に教えてたって言うのなら、それなりに仲が良いんじゃないのか？

「ああ。俺と翔子は幼馴染だからな」

その言葉を発した瞬間、Fクラス男子全員の眼が赤く光ったのは氣のせいではないと思う

「総員、狙えエエエー！！！」

吉田くんの雄叫びと共に、Fクラス男子全員が大鎌やカツターナイフといった数多くの凶器を代表に向けているついでに僕も覆面は無いが参加している

「なッ！？ おいなぜ明久の号令で全員が俺に凶器を向けるー！？」

「黙れ男の敵！ Aクラスの前に貴様をこの手で抹殺してくれるー。」

吉田くんが面白い表情で代表に殺意を向けているね

僕はいつもの「口」「顔で包丁を構えてるナビ

笑顔で包丁を構えるなんてビックのホラー映画で出てきそうだよ

「俺とアッシュはなんの関係も無い！ もう昔の話だ！
それと仲野富アー！ てめえはなに笑って見てやがるー。」

愚問だよ、代表

「面白こからに決まってるじゃないか

「てめえはいつも明久と一緒に殺してやるー。」

やれるものならやって欲しいものだよ

「あの、吉井くん？」

わざわざまで男子のよつすに怖がっていた姫路さんが口を開いた
「ん、なに？ 姫路さん？」

「あの、吉井くんは、霧島さんのような女性の方が、好みなんですか？」

「え？ ま、まあ、キレイだとは思つけど…ちょっと待つて！
どうして

姫路さんは僕に攻撃態勢を取るの！？ 美波もそんな物騒な物を投げようとしないで！」

それを聞くや否や姫路さんはファイティングポーズを取り、島田さんはとても危なつかしい物を投げつけようとしている

女性の嫉妬とは、恐ろしいものだね

「とにかく！ 僕がアイツに教えた”大化の革新”がテストに出ていたら、俺達の勝ちだ！ そして、俺達の机は…」

『システムテスクだ！…』

代表が纏め上げて皆を落ち着かせる

ちえ、本当に攻撃はしないんだ

「よし、明久！ Aクラスに宣戦布告するぞー！」

とうとうやるんだ

今回は吉田くんを生贊にするんじゃないくて、Fクラス主戦力全員で行くそうだ。ま、そうじやないと吉田くんが袋叩きになるけど

「うんー。」

代表、吉田くん、木下くん、土屋くん、島田さん、姫路さんがAクラスへと向かっていった。うーん、幾らなんでも真っ向勝負でFクラス代表が

学年主席に勝てるとは思わないな。最上位と最下位がぶつかるのは無謀だ。

大剣とシャーペンがぶつかるようなものだよ

まあ代表のことだ、なにか勝てる要素のある秘策で容易してんんだろ

うーん、そういう勝てる希望とかは粉々に潰したいんだけど、生憎と

僕はFクラスだからね。その願いはかなわない

でも、一騎打ちでも一応はクラス全員がテストを受けたらしい

まだ一騎打ちを承諾するとは決まつたわけじゃないからね

僕も今回は真面目にテストを受けた

前回のBクラス戦のテスト中は凄く暇だつたんだよ

數十分も寝たりボーッとしたりを繰り返していた

そんなに退屈になるなら真面目にテストを受ける方が時間を潰せるからね

真面目とは言つても、勉強は一切しなかつたけど

あくまで自分の自知識だけで挑んだんだ

ま、それでもそれなりには点数は取れるけどね

お、代表が帰ってきた

数分ぐらい経つと、代表ご一行様が帰ってきた

表情は少なからず満足気つことは、なにか良い条件でも貰つたのかな？

『おい、坂本が帰ってきたぞ！』

『どうだつた？』

「少々予定に変更があつたが、条件は殆ど飲んでくれた。
お互いい一対一の試合戦争の五回勝負、三つ勝てば俺達の勝ちだ。
開始は十時、Aクラス教室で対決だ」

最初の予定とはちょっと違つね

でも、まだ代表は自信満々の表情だ

まあ、二回勝つだけで良いんだから

なら候補としては…姫路さんに代表、後はBクラスで活躍したって
聞いた土屋くんか？ これで三本。もし僕が出たら四本だけど、そ

れは

天地がひっくり返つてもありえないね

僕は基本、馬鹿だからね

「では、Aクラス対Fクラスの試召戦争を始めますー。」

Aクラス担任の高橋先生の号令と共に、最上層対最下層の戦いが始
まった

会場はAクラスの教室

Fクラスの生徒とAクラスの生徒が観客として立会いながら、
お互に選ばれた五人を並べている

ちなみに僕は観客の集団とは別にこの豪華な教室
の高い壁の一一番上にある窓の枠に座っている

上るのは苦労したけど、見晴らしは素晴らしいものだよ

寝転べるし、ポジションもバレない

サボる時はここに来ようかな？

「では、一人目の方は出てください」

初戦がいよいよ始まるね

Aクラスはビン底みたいなレンズの眼鏡を掛けた女子生徒、佐藤美穂さんが出でてきた

女子生徒が多いね、男子生徒は居ないのか？

「明久、出番だ」

初戦で吉田くん？ どう考えても捨て駒扱いだと思うよ？

「え、僕！？」

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

負ける方にね

僕は吉田くんが負けるのに三百円賭けるよ

「ふう、僕に本気を出せつてこと？」

「ああ。もう隠さなくて良い。お前の全力を見せ付けてやれ

あれ？ 「コレって漫画とかでよくある、”実は弱かったキャラ

がラスボス級に強かつた”って展開なのか？

だとしたら点数は一科目1000点とかそんな馬鹿げた数字も期待して良いんだね？

「吉井君、でしたつけ？ あなたまさか……」

「そうさ、僕は今までまったく本気を出しちゃいない

段々不安な顔になつていく佐藤さん

お、これはかなり期待できるね

「それじゃあ君は……」

「そり、今まで隠してきたけど実は僕……」

お互いの召喚獣が出てくる

そして、徐々に点数が露になつていく

「……左利きなんだ」

『Fクラス吉井明久 物理62点』

『Aクラス佐藤美穂 物理389点』

「勝者Aクラス」

瞬殺だつた

まさかの出来事のAクラスFクラス問わず全員が固まる

「一Jのバカ！ テストの成績に利き腕なんて関係ないでしょ！ うがー！」

いや、それは違うよ島田さん？ もし利き腕じゃない方で
テストを受けると手が汚すぎて不正解にされちゃうよ？

「痛い！ フィードバックで痛んでるのに、さらに殴るのはカンベ
ンしてー！」

そういうえば観察処分者は召喚獣の痛みが少なからず本体にも伝わる
んだね

「とりあえず捨て駒野郎はほつといて…」

「今捨て駒って言ったね！？ 雄一は僕のことを捨て駒って呼ん
だね！？」

やっぱり僕を信じていなかつたんだ！」

「勿論俺は信じていたさ。お前が負ける方にな」

あ、それ僕も同じです

「貴様に左手でのフックを喰らわせてやるー！」

だが、このやり取りを無視して高橋先生は続けた

「二人目の方、前へ出でください」

「……」

すると、沈黙を守りながら立ち上がったのは、Fクラスの情報屋、ムツツリーこと土屋くん

「じゃあ、ボクが出るよ。一年の終わりに転入してきた工藤愛子です、よろしくね」

Aクラスからは縁髪の女子生徒が出てきた

髪はかなり短く切ついて、一人称も”ボク”というなんとも男の子らしそうな人だ。一年の終わりってことは僕とは面識はないね

「教科はなにになりますか?」

「……保健体育」

保険体育? さすがはムツツリーと呼ばれる」とはあるね

得意科目もその通りだよ

「土屋くんだけ? 保健体育に随分自信があるんだね。でも、ボクだって得意

なんだよ? 君と違つて、実技でね」

なんて女子らしくない台詞を言つんだろう

ほら、周りの男子生徒が全員ダメージを受けているよ?

僕はまったくの無傷だけど。こうこうとこには興味が微塵もないか

らね

「そこの君、吉井くだつけ？ 勉強が苦手なら、保健体育ぐらいい教えてあげるよ？ 勿論、実技でね」

かなり大胆な誘いだね。FFF団の人なら泣いて喜ぶんじゃないのかな？」

「フ、望むどーじゅ…」

「アキには永遠にそんな機会なんてないから、保険体育の勉強なんていらないわよ…」

「そうです！ 永遠に必要ありません！」

その誘いに乗じた吉田くんを、島田さんと姫路さんが制する

その制し方ってかなり酷いよ？

あらり、吉田くんが泣き出しそうだ

「早く試合を開始してください」

わざわざからずつと喋つてばかりだったから高橋先生が試合を進める
ように指示した

これは戦争の時間であつて談笑の時間じゃないからね

「はーい、サモンっと」

「……サモン」

なんで土屋くんはいつもなにか言つ時は“……”を付けるんだろう？

見た目が暗そだからかな？

土屋くんの忍者のよつな召喚獣と、工藤さんの大きな斧を持った召喚獣が対峙する

工藤さんのセーラー服に大きな斧って、凄くミスマッチだね

「バイバイ、ムツツローーくん」

工藤さんの召喚獣が土屋くんの召喚獣に向かっていく

迂闊だね

「……加速」

そう土屋くんが呟くと、いつの間にか土屋くんの召喚獣は後ろへ下がつて斧を避けていた

速いね、アレが土屋くんの”腕輪”的能力なんだ

良い機会なのでここで”腕輪”について教えてあげよう

”腕輪”とは、一つの教科で400点以上を出した生徒の召喚獣に付く物で、それぞれに新たな能力を追加する

この土屋くんの場合、”高速移動”が能力だね

勿論、僕にもあるよ

能力の内容は秘密だけど

「……加速終了」

土屋くんが再びそう呟くと、召喚獣が相手を斬り裂き工藤さんの召喚獣がバタンと倒れた

『Fクラス土屋康太 保険体育572点』

『Aクラス工藤愛子 保険体育446点』

なんだろう、400点台って普通の人にはとんでもなく高い得点なんだけど、土屋くんの点数を見たらそんな気が吹っ飛んだよ

「そ、そんな……このボクが……！」

相当自信があつたのか、かなり落ち込んでいるね

「勝者、Fクラス」

「先ずは一勝

後一回勝利すればFクラスの勝利だ

「三人目の方、前へ出てきてください」

「あ、はい！ 私です！」

Fクラスからは姫路さん

「なら僕が相手をしよう」

対するFクラスは眼鏡を掛けた男子生徒

ようやく男子が出てきたよ

しかもこの人は…

「やはり来たか、学年次席」

学年三位だった男、久保利光

姫路さんが振り分け試験を途中退席したため、
学年次席まで上がれた運の良いだけの次席だよ

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

久保くんが答えた

さすがは一応の学園次席

総合には自信があるんだね

「ちよつと待つた！　なに勝手に……」

「構いません！」

「姫路さん……」

吉田くんが口出ししそうとするが、姫路さんがそれを制する

「「サモンーーー！」」

『Aクラス久保利光 総合科目3997点』

『Fクラス姫路瑞希 総合科目4409点』

「オ、凄い点数だね

これって主席さんと同じくらいの点数なんじゃないのかな？

結果は姫路さんの圧勝。そりや、四百点も差があるからね

「クッ……姫路さんは何時の間にそんなに強くなつたんだ…？」

「ここまで差がつけられた上で負けたから悔しさが相当あるようだ

「私はこのクラスが好きなんです。人の為に一生懸命頑張るよつ
な、
このクラスが大好きだから、頑張れるんです」

……その言葉に僕はしばらく思考させられる

クククク、ああ、まさかこんなところで笑わせてくれるなんてね

人間のドロドロとした汚く黒い部分をまったく知らない！

いやあ、ここまで純粋な人は滅多に居ないよ。傑作だ！！

”自分は良いことをした、だから良い人なんだ”つていう
自己満足をねえ！ そんなことも分からぬんだ？ あはははは！
それにさあ、人の為に一生懸命じゃなくて、
皆自分の”自己満足”のために頑張ってるんだよ

後少しだけ吹きしゃうといひだつたよ、あははは！――！

うわ、良くそんなに恥ずかしいことを言えるね！

あはははははははは――！――！――！――！

と、まあ現在は一対一でFクラスがリードしている

「では、四人目の方、出てきてください」

次が勝負だいろだね

「あたしが出るわ」

Aクラスからは我がクラスの木下秀吉の双子の姉、木下優子
「儂が行こう」

Fクラスからは木下…くん?…が出てくる

兄弟対決かあ、うん、面白そうだよ

「ちょっと待つて優子」

その時、Aクラス側から木下さんを止める声が聞こえる

しかも、かなり聞き覚えのある声が

「なに、長瀬?」

Aクラス三位、長瀬だ

「IJの勝負、私が出ても良いかしら?」

「え、良いけど…」

長瀬もとつとうバトルジャンキーの交戦派になつたのか？

駄目だなこれじゃあ、Aクラスが軍事政権化しちゃうよ

「ありがとう。でも、私の相手は悪いけど貴方じゃないわ」

木下くん？を退かせる

まったく、礼儀が悪いな

「いつは敬語を使って”すみませんが、別に相手をしたい人物が居るので、申し訳ありませんが退いてくださいともよろしいでしょうか？”と丁寧に言わないと

これじゃあ社会に出ても生きていけないよ？

「え？ ちょっと、長瀬、なにをするつもり…」

木下さんが困惑した顔になる

自分の弟がぶちのめされるのが見たいのかな？

「私の相手は…」

そして、一瞬眼を閉じてから、パッと僕が居る窓の枠へ見上げ、不運にも僕と目が合ひ。まさかとは思つけど…

「そこで自分は関係ないからって高みの見物をしてるアンタよ！」
仲野富浪都！』

そう叫びながら僕に指差す

『『『はあ！？？？』』』

周りは、得にFクラスから、驚愕の声が上がる

僕はただそれをジッと微笑みながら見てるだけだった

ククク、なんだ

見に来て正解じゃないか

九問 肩と勝負とAクラス（後書き）

いかがでしたか？

ちよつと詰め込み過ぎたと思います

雄一の演説とAクラス四戦はさすがにやつ過ぎました

漫画を無くした以上、試合戦争編に進むわけには行きませんから、

出来るだけ早く終わらせたいです

まだ一、「二」話は続くと思いますが

今回の質問

学校では部活をやっていましたか？ それとも帰宅部ですか？

作者は吹奏楽部です

（寝言）

十問 肩と天才と仮面被り（前書き）

今回で主人公の学力の全貌が明らかになります
まず、かなりやつちました感があります

後、勘違いを生まないために発言しますが、僕はバカテスが大好き
です

キャラたちも全員大好きですし、とても面白いと思います
だから、一部のキャラの扱いが酷くても勘違いしないでください
では、十話です

十問 肩と天才と仮面被り

長瀬が指差す先、それはこの僕だった

予想外の相手にこの場に居る全員が驚愕の声を上げ、
中にはクレームまで言う人まで居る

『なんでアイツなんだよ！』

『負けるのが怖くて一番弱い奴指名しやがったな！』

『逃げんじゃねえよ、この腰抜けが！』

特にFクラスからの罵声が凄い。大方勝負するのが
怖くて必ず勝てる相手を選んだと思ってるんだろう

Aクラス生徒達も失望した目で見ている

「ちよつと待つてよ長瀬！ なんで
アイツなんかを指名するのよ！ それなら
あたしが出たいわよ！」

木下さんも怒っている

そりや、自分が変わつてまでも戦わせてあげたのに、
こんな逃げの選択をされたんだからね

「木下、貴方は分かっていないのよ。

私が出るからーじゃ、ーじゃで浪都を潰さないと
いけないのよ」

さあすがは天才さん、理由がしつかりしているね
一番厄介なのは僕だと考えて、先に潰しておいた
方が勝率が上がると思っていいのかな？

「ならあたしが出るわよ！ あんな奴、長瀬が出るまでも無いわよ！ あたしで十分瞬殺できる
ものす」³自信だね

「駄目よ木下、アンタじゃどうやっても浪都には
勝てない。それは私が一番良く知ってる」

君でも勝てないけどね

僕は戦争は嫌いだけど出るからには負けたくないからね

西村先生の補修と説教は受けたくないからね

「ジ…ジ…ふざけないで！ あたしが、あんな肩に負けるですっ
て！？」

良いわよ、なら見せてあげるわよ！ あんな奴、あたしだけで十分
だってね！」

怒り易い人だなあ

「下りてきなさい、仲野宮！ 一瞬で片付ける！」

うーん、長瀬の指名はもう無視するんだね

僕としては断りたいんだけど、戦う雰囲気になつていいから、それはぶち壊したくないね。軽蔑とは別の視線を受けるのは鬱陶しいから

「うーん、でも長瀬の指名だつたからねえ……なういうじょうか！」

僕は窓から飛び降りて、高橋先生の前へ降り立つ

「二人共相手してあげるよ！』

「…なんですって？」

「そのままの意味で、僕は二人共相手にしてあげるよ。
勿論、一度では無いけど

流石に僕でもAクラスを一人纏めて相手にするのはキツイよ

「浪都、それはどうこうことなの？」

「馬鹿な君達に分かり易く説明してあげよう。

僕は君達を一人ずつ相手にするから、一連勝したら
Fクラスに一勝つてことはどうかな？ 勿論、Aクラスは
僕に一度でも勝てばその時点で君達に一勝だよ」

つまり、これはAクラスにとつてはかなり有利な条件

「嘗めたこと言つじやないの。良いわよ、アンタを

叩き潰せるなら、それでいい!」

木下さんはかなり交戦ムードになつてゐる

なんで間接的なのに僕に怒るのかな?

怒るなら長瀬に怒つてくれ

「高橋先生、それで良いですか?」

「両者賛同なら、構いません」

つまり、オッケーだね

「ならいいひは同意。それひは?」

「私たちも同意」

「では、Aクラスからは最初に木下さん、次に長瀬さんで良いのですね?」

「「はー」」

「では、始めてください。教科は一戦ずつ選んでも構いません」

色々ややこしくなったけど、やっと始まった

つまり、一度勝つ度に科目が変わるんだね。上等だ

「日本史をお願いします。あたしの得意教科で、こんな奴

なんか叩き潰してあげる

随分と自信満々だね

まあ、僕はその自信満々な心を叩き潰すのが一番楽しいだけだなあ！

「サモンー！」

『Aクラス木下優子 日本史386点』

「オ、殆ど400点じゃないか

得意科目だつて言つただけはあるね

「フン、一撃よ。行け！」

木下さんの召喚獣が僕の機動隊に向かつてランスを突き刺してくる
ちょっと豆知識、機動隊員の戦闘服は防弾製だけど、刃物に対し
ては殆ど効果を持たないんだ、だからナイフやこういう武器にはめっぽ
う弱い

そのための盾なんだけだね

ランスを盾で防ぎ、持っていたショットガンで頭を吹き飛ばさうと
する

今回の銃はショットガンか、近接戦闘には相性が良いね

「クツ……！」

後ろへ下がり、弾の威力を最小限に抑えようとしている

ショットガンの弱点を知っているんだ？

このショットガンの弾は散弾だからね、後ろへ飛ぶと当たる弾の数がかなり下がる。現に点数だつて殆ど減っていないからね

「ショットガン……厄介な……」

やはり近接派の人には厄介なんだね、この銃は

「でも、点数は所詮はFクラスレベルの筈。なら、怖くはない！」

臆することなく再び突っ込んでくる

迂闊だねえ

「残念」

今度は目の前まで迫っていたけど、僕の召喚獣が殴り飛ばして遠くへ下がらせた。さすがは召喚獣、点数が一桁でもゴリラ並みの怪力があるだけはある。いつかは軍事利用されるんじゃないのかな？

「ク、避けたり防ぐことだけは上手いのね……」

それは僕のことを臆病って言つてるのかな？

「お褒めに預かり光栄です、Aクラス生徒さん

「でも、防いでばかりじゃ勝てないー。」

それでも木下さんの自信は揺らがない

まあ、それを打ち碎くことが目的なんだけど

「やういえば、君つてあの木下優子さんか？」

わざわざからずつと疑問になつていてことを聞く

「え？ やうだけど、アンタはあたしのこと知つてゐる訳ではないんだけど、噂には聞くよ

知つてゐる訳ではないんだけど、噂には聞くよ

「評判程度だよ。なんでも勉強が出来て、他人に優しく、他の生徒の勉強も手助けするようなとても理想的な生徒だつて聞くよ」

「へえ、で、それがどうしたの？」

ククク、そういう人が一番挑発し易いんだよ

長瀬が良い例だね

「いやあ、ただ、良く演じてるなあつて思つてね

そつ言つと、ピキッと額が動いた気がする

「…どうこつ意味よ？」

「分からぬのか？ 良く演じてゐるなあ、と言つたんだよ」

「この人みたいな人は何人も見てきたからね。どの人も本質はかなり悪質だつたけど

「あたしが演じてゐる？ なに馬鹿なことを言つてゐるよ」

「僕は君みたいな人を何十人も見てきた。だから演じてゐるかを見分けるぐらい造作でもないことだよ。だから言わせてもらうけど、呆れるなあ」

「うるさい…」

「うるさい？ 僕は大きな声を出した覚えは無いんだけど？ うるさいの正確の意味は、”音量が個人の聞ける範囲を超えてしまつて耳障りになる”ってことなんだけど、僕はいつ大きな声を出したのかな？」

「黙れ…！」

「それにさあ、優等生を演じても
なんの得になるのさ？ 自己満足？
達成感？ 僕からすれば過大評価されて
無理なお願いを言われるから嫌だなあ」

「黙れって言つてゐるでしょ！」

怒りに任せて突っ込んでくる

はい、ザーベン

盾で殴り飛ばして退かせる

「やつやつて怒り任せに突っ込んだら…
はつきりと言わせて貰うよ、君は優等生の資質
はないね。あそこの長瀬みたいになにかしらの
挑発された時の落ち着きが君にはまったく無い
んだよ。だからやつやつて何回も吹き飛ばされ
ているんだよ」

もう戦争のことはまったく忘れて僕に対しても
憎悪だけで突っ込んでくる。もう僕を叩き潰すって
ことしか考えていないね

何度も何度もランスを振り、突き刺せば防がれる。
振り下ろせば蹴り飛ばされる。なにも通用しない

「なんだよ……なんだなのよー！」

「長瀬が言つただろ、君はどいつもこ
僕には勝てないって。まあ、君を苛めるのも
そろそろ飽きたし、決めようか」
召喚獣をかなり遠くまで下がらせる

「なによ、怖気づいて逃げるのー?」

「冗談！　君の近くに居るのは危ないからね」

召喚獣がポケットから一つのスイッチを取り出す

「な、なにを…」

「今から見せてあげるよ」

スイッチを出すや否や、僕はニヤッと邪悪な笑みを浮かべる

「爆破」

一瞬の出来事だった

その言葉を口にした瞬間、スイッチを押すと、
木下さんの召喚獣が大爆発を起こした

驚愕なあまり口を阿呆みたいに開けながら、自分が負けたことに気付き、一度も攻撃が当たらなかつたことにも気付く

「しょ、勝者、Fクラス仲野富一…」

あははははは！ あんなに自信満々だった顔があんないだらしない表情になつていいよ！

仮面を被つていたことも含めて、僕の中では木下さんの評価は最早この学園最低クラスだよ

うん、長瀬と同じぐらい嫌いになつたよ

「腕輪…」

誰かがそう呟く

そう、これが僕の腕輪の能力さ

所謂、超小型爆弾だ

点数を二十点使用するたびに一つの超小型式の爆弾を出現させ、裏に粘着性の塗装があるから相手にくっつけることが出来る。で、ボタンを押すと同時に”ドーン”だ

今回使用した超小型爆弾はおよそ一十個

したがって点数もかなり下がってしまったよ

『Fクラス仲野富浪都 日本史259点』

「ば、爆弾！？」

後ろで吉田くんが驚愕の声を上げる

腕輪の能力は始めて使ったなあ

うん、やっぱり得意科目だと良い点数が取れるよ

「仲野富、やっぱりめえ……」

代表が僕のことを見みつける

あはは、なにをそんなに怒っているのかな？

「あはは！ 戦争は嫌いだからね、悪いけど前線には長居したくなかったんだ」

「明久と島田が隠してたのはこのことか……」

代表は頭を抱えながら呆れている

まあ、僕が真面目にやれば一つのクラスぐらい簡単に落とせただろうからね

「僕が頼んだんだよ、軍事利用されるのなんて嫌だからね」

「どいつもこもる中心的な奴だ…」

それより、まだもう一戦残ってるんだよ? ？」

これに勝てば僕たちFクラスの勝ちだ

「まあ、文句は最後の一戦が終わってからにしてくれ。後、木下さんもいい加減退いてくれないかな? 君がそんなど真ん中で座つてちや戦えないんだよ」

さつきから睡然としていたのか座つたまま動かない木下さんはつきり言つて邪魔なんだよね

「おーい、木下優子さん?」

「ツ…! 分かったわよ…」

やつと退いてくれる

「あのさあ、なにをそんなに落ち込んでいるんだ? そんなに僕に負けたのが信じられないの? でも、負けたのは事実だよ。君がどう否定しようが、負けは負けだ。なんなら、君にもう一つ良いことを教えてようか」

僕は一枚の紙を木下さんに渡す

残念ながら連絡先ではないけど

「！」「これは！？」

その紙を見て唖然としている

「分かったかな？ 君はどういっても僕に勝つのは十年早いよ」

そして、最後に止めを刺す

「雑魚はさっさと消え失せてくれ

その言葉で薄っすらと田に涙を浮かばせながらも僕を睨みつけ、引き下がる

ククク、とりあえず雑魚は片付けたね

問題はこの人だ

長瀬は僕の性格を良く理解しているし、

あまり認めたくないけど行動も少々読まれている

点数はそれなりに高いけど、警戒するまでもないね

油断すると足元を掬われる

「これでやつと、アンタと戦える……」

「そこまで僕が気に入らないのか？ あはは、
気に入らない奴は片つ端から潰していく、とても

優等生さんのあることに見えないなあ。あはは……」

僕のテンションも上々

今は気分が良いよ！

姫路さんの発言で笑わされ、望んでもいないのに召喚獣勝負をさせられ、仮面優等生さん一人の自信を粉々に砕き、さらには大嫌いな人を潰せる！

こんな最高な日はないよ！

「アンタが言える」とじやないでしょー！」

「ほら、そう声を荒げない！ そんなに頭を堅くするんじゃないくて、もっと朗らかに行こうよー！」

「は！ 昔のことを引き摺つてるあなたに言われたくはないね！」

「昔のことを引き摺つてるのは君の方だろ？ 最近ずっと僕の近くに現れるし、なにかしら僕に対しての復讐計画みたいなのを立てているのは丸分かりだよ。まったく、そこまで憎んでいるなら一思いに殺して欲しいよ！ それだとなにも苦しむ必要が無いしね

！」

「アンタなんか殺す価値もない頭のぶつ壊れた屑よ！ 浪都なんかを殺して警察に捕まるぐらいなら死んだ方がマシよー！」

「”死”という言葉は考えて使う物だよ？　その一言で全てを持っていかれたり奪われたりするからね！」

「他人の命になにも感じないアンタが言つても説得力が無いのよ！　なにが”死”という言葉を考えて使え、よ！　他人の命が危険に晒されようが笑つて見てる浪都に死を語る資格なんかないわ！」

「君こそ僕に対して死を語つてているじゃないか。僕が資格がないなら

君も同じようなものだろう？　なら君にも資格なんか無いね」

「アンタなんかと一緒にしないで！　私はアンタとは違う！」

「君だつて僕と同類だろう？　僕は他人を貶す、君は僕を貶す。対象が違うだけで、行いは一緒だ。自分一人だけ正当化させるのはあまり良い行為とは思わないね！」

「今ここで証明させる！　私はアンタなんかの屑とは違う！」

「なら僕は君のその自信を粉々に碎いてバラバラに引き裂いてあげるよ！」

高橋先生！　科目は世界史でお願いします！」

「のちよつとした言ひ合ひを終わらせ、世界史のフィールドが出ると、

お互いそれぞの召喚獣を呼ぶ

「サモン！」

視点一 木下優子

いつも^の長瀬とは違^ひ…

普段は温厚で優しいと評判の長瀬が、あの仲野富が
出でると表情を険しくさせる

それに、過去になにか問題があつたような発言も見られる

長瀬と仲野富は同じ関係なの？

「あ、優子、お疲れ様」

愛子に話しかけられる

わざと不意に流してしまった悔し涙を拭き、愛子に向かへ立つ

「あたしなんか完敗よ…」

「気にする」とはない。ボクだって
ムツツリーくんには完敗だったからね

でも、あたしは相手を見誤っていたから負けた

自分が絶対あんな屑より強い、という驕りの所為で負けた

「そういうえば、仲野宮くんから貰った紙にはなにが入っていたの？ まさか連絡先だつたり？」

「違うわよ！ これよ」

あたしは愛子に渡された紙を見せた

「！」
「これは！？」

愛子も見るなり驚きの声を上げた

それはそのはず、この紙には驚愕のこと事が書かれていた

『仲野宮浪都

現代国語402点

古典520点

数学427点

科学451点

物理431点

日本史 659点

現代社会 592点

英語 673点

保健体育 386点

総合科目 5264点

仲野富の今回のテスト結果だった

その点数は保健体育を除いて全てが400点オーバー

日本史、現代社会、英語は教師レベル

唯一書かれていないのは世界史だけど、それは今回の科目だから
なのか態と書いてないと思つ

そして、総合科目は霧島代表を圧倒的に上回る

あたしはしばらくこの紙に書かれていた事実を信じられなかつた

仲野富の噂で聞いたのはかなり悪質のものだつた

” 勉強を馬鹿にする ”

” 他人を見下す ”

”なのに自分は勉強をしない”

”人を平氣で傷付け、悲しめばそれを見て笑う”

どれも悪い内容ばかりだった

誰から聞いても彼、仲野宮浪都は肩

でも、それ以上にあたしは怒りが沸いてきた

勉強を馬鹿にして、自分はなにも努力をしないくせに
ここまで学力を持つている

それに、噂が本当だと仲野宮は今回のテストのためにはなんの
予習もせず、授業でも上の空らしい。なんの下準備も授業も聞いて
いない

つてことは、このテストは自分があらかじめ持っていた知識で挑ん
だテスト

それでこれほどの点数なら、予習した上でテストを
受けたらと思つたら恐ろしくなる

神様も理不尽なことをするわね…

でも、それと同時にあたしはこいつ思った

これが本当の”天才”だ、つて

十問 肩と天才と仮面被り（後書き）

いかがでしたか？

主人公の学力の全貌が明らかになりました

総合科目が5000点以上とは…

後、主人公の腕輪の能力も何気無く登場しています

スイッチを押すと爆弾を爆破させる。なんとも現実染みた能力でしょう

優子の扱いが酷い…主人公が嫌いなタイプの人物だったんでしょう

今回の質問

作業用BGMはなんですか？

ちなみに僕はかりゆし58とE-T-Kin∞を聞きます

これって名前を載せただけで著作権の侵害になりますか？

なるのなら早めに言つてください

（睡眠）

十一問 肩と天才と大爆発（前書き）

遅くなりました

最近はちょっとずつ忙しくなってきています

8月15日以降は特に忙しくなって、素早い投稿は
その月の終わりまで無いと思います

そういう前に出来るだけ多く投稿しようと頑張ります

今回はちょっと短いです

～後書きにアンケート～

では、十一話です

十一問 肩と天才と大爆発

僕たちの召喚獣が対峙している

長瀬の召喚獣は侍のような姿だ

防具はあまりなく、着物に刀と時代劇に出てきそうな姿だ

男物の着物だけど、女物だと動きにくいやうのかな？

そして、点数は……

『Aクラス長瀬流歌 世界史579点』

「うーん、500点台ー？ あんなのこじりやつて勝てつて言つんだ
よー。
もう殆ど600点近いじゃないかー！」

誰かがそう叫ぶ

おいおい、高が500点台でなにをそんなに騒いでいるんだ？

やる事はないと思うけど僕が真面目に勉強すれば全教科
500点オーバーに出来るよ？ 面倒だけどね

それでも、殆ど600点だね

やつぱり幼い頃に勉強を教えていたのが仇になつたのかな?

「どう? これでもかなり勉強してるのよ、私」

「しないと”天才”だなんて呼ばれないだろ? しね」

対して僕の召喚獣

相変わらずの機動隊の戦闘服に盾

唯一違うのは銃だ

今回の銃はこの召喚獣最高クラスの武器だよ。だって世界史は

『Fクラス仲野宮浪都 世界史723点』

僕の一番の得意科目だもん

召喚獣は片手で盾越しに対物ライフルという科学的且つ論理的にありえない姿をしている。幾ら筋力が高くともこれは人間学的には決して起り得ないことだよ

「ひええ!! な、700点台だぞ! いつー? なんでこんなに

高い点数が

ホイホイと出でてくるんだよ! ?」

でも、長瀬の他の科目がAクラス平均とあまり変わらないけどね

確か一科目が大体300点だっけ？

総合科目は3691点、久保くんには二百点近い差を付けられている

だから実質は学年四位だね

「や、やっぱり馬鹿げた点数ね、アンタの世界史は…」

「お褒めに預かり光栄だよ、天才さん。でも、僕なんか君に遠く及ばないよ。いやあ、なんでも出来て、素晴らしい人格である長瀬さんはまったく及ばない！ 対峙する資格すらないぐらい弱い僕なのに。

だって僕は世界一弱い人間なんだもん、君になんか一撃で倒されるよ！」

笑顔で長瀬を褒める

勿論、全て嫌味だけど

「言つてくれる！ 行け！」

刀を抜いて襲い掛かってくる

ちッ、ライフルじゃ部が悪い

これは武器の選択を誤ったかな？

なんとかその攻撃を盾で防ぐ

「どうしたの？ もつきの勝負での威勢が殆ど感じられないんだけど？」

「良く言つてくれるね、遠距離型の銃を持っている僕の身にもなつてくれよ。これなら警棒の方がマシだ」

本音だよ。対物ライフルって大きい上に重いから幾ら召喚獣でも動きが鈍くなるんだよ

「貰つた！！」

盾の隙間から刀を突き刺した

それは脇を少し掠つたが、それでも点数は減つていた

『Fクラス仲野富浪都 世界史703点』

「随分動きが鈍くなつてると、本気でやつてるの？ 手加減するなら本当に殴るわよ？」

「暴力反た！」 暴行罪は学歴に支障を齎すよ？^{もたらす} あ、それと手加減なんてしていいさ。これが僕の全力だ」「手加減なんてしたら足元を掬われる

長瀬には僕のことを知られ過ぎたからね

「へえ、なら私はアンタのことを買いかぶり過ぎたみたいね」

驚くことは無いじゃないか、僕は人類最低で最弱の人間なんだから。正直に言うと蟻一匹に殺される自信だってあるしね

これを期に長瀬は一気に攻め込んでくる

殴る蹴るなどを繰り返していく、その度に僅かながら僕の点数が削られていく。二百点もあるから一辺に削られないのかな?

『Fクラス仲野富浪都 世界史683点』

『Fクラス仲野富浪都 世界史663点』

『Fクラス仲野富浪都 世界史643点』

ETC…

『Fクラス仲野富浪都 世界史3点』

一桁にまで下げられた僕の点数

もう警察官をボコボコにする侍だね

とてもシユールな光景だよ

「呆れた…これがアンタの実力なの? 点数は取るだけ取つておいて、見掛け倒しにも程がある」

それは何回も言われた台詞だよ

しかし、僕にも一言言わせて貰つよ

「まつたく、『ほんに時間が経っているのにまだ気が付かないのか
？』」

「……え？」

意味が分からぬのか首を傾げている

この程度のカラクリにも気が付かないなんて、”天才”さんが聞いていられない
呆れる

「君には本当に呆れるよ。ここまでしたのに、まだ気が付いていない
のか？」

「……どうこのつ意味よ？」

その問い掛けを無視して、召喚獣を操作する

「…どうこのつもつ？ 武器を捨てるなんて、試召戦争じゃ自殺行
為に等しいわよ？」

そり、僕は対物ライフルと機動隊の盾を放り投げた

も「あれば邪魔にしかならないからね

「君みたいな無能には武器なんて必要無いんだよ」

「書めたことを書いてくれるわねー。さつきまでボロボロにやられてた癖にー。」

考えなしに突っ込んでくる長瀬の召喚獣

読んで字の如く、本当に無能で無脳だね

「君は一つ大事なことを忘れているよ」

刀を頭に向かって振り下ろしていく

まさに僕にとっては最高の状況だよ

「…しまったーー。」

どうやら思い出しあみたいだね

でも、もつ遅い

「僕が柔道一級だつてことをねー。」

振り下ろしてきた腕を掴み、背中をくつつかむよつて腕を掴んだまま担ぐ

そして、その腕を力いっぱい振り下ろす！

『Aクラス長瀬流歌 世界史537点』

一本負け、決ましたね

「ク…そういうばそうちだつたわね…あんた無駄に柔道が上手かつた」

「無駄とは人聞きの悪い！ 僕にだつて昔は目標ぐらいあつたさー。柔道はそのための第一歩のつもりで始めたんだ。今となつては無意味だけど」

それよりも、急に動きが素早く鋭くなつた僕の召喚獣を見て長瀬は啞然としていた

僕はそれを見て嘲笑う

「あははははー！ まさか本当にこの僕が君程度の存在に追い詰められているとでも思つたのかい？ 馬鹿馬鹿しい！ 君程度の存在に追い込まれるなど愚の骨頂！ 恥だよ！」

それに、僕の作戦に長瀬はまったく気付いていない

そこがまた馬鹿馬鹿しくて仕方が無い

「今までのは……」

「そうー。演技だよ、え・ん・ぎ！ 君の攻撃が

全て僕に当たつているとでも思つたかい？ 点数が減つているから

効いているとしても思ったのかい？ そこがまた馬鹿だつて言つているんだよ！

僕がなにをしているのかが本当に分からぬのか？ 分からないだろうね。君みたいな馬鹿には説明してやらないと一生分からないだろう！」

怒りで頭が噴火するのかと思わせるぐらいく赤くなつてゐる長瀬さん。

あははははは……！ 傑作だ！！！

「考えてみる！ どうして僕の点数がちょっとずつ減つてゐる？ どうして僕の点数は一十点ずつ減つていた？」

「…まさか！」

「そう！ 今から君に見せてあげるよ、最高の一撃をね！」

僕の作戦をよつやく理解したのか長瀬の顔が青くなつていく

「Ladies and gentlemen, please
Give your attention to the
Center of the field! As I, Ro
uto Nakanomiya, gives A very
special gift To A "genious" wh
o can only look down on people
！」

懐から一つのスイッチを取り出す

木下さんにとっては一度と見たくはないだろ？そのスイッチ

四角く、その四角の中心にある一つのスイッチ。そして、
その物体の頭から出でている一本のアンテナ

僕の召喚獣は僕と同じく極上の笑みを浮かべている

「」覧あれ！ 私、仲野富浪都の最高傑作であり、
最高の光景です！ あ、それでは眞さん、唱和ください！

L e t ‐ s B l o w E v e r y t h i n g U p !

大爆発

その言葉に相応しいほど大きな爆発が辺りを包み込む

その大きさはさつきの木下さんの爆発が可愛く見えるほど大きく、
威力がとても大きく大きかつた

その規模は、Aクラスレベルの召喚獣なんて十体は軽く瞬殺出来る
ぐらい大きかつた

それが一体だけの召喚獣に向けられたのなら、必然的に…

『Aクラス長瀬流歌 世界史の恋』

戦死だ

『う、うオオオオオ！……！』

会場の全員が硬直してたら、一斉に雄叫びのような歓声が響き渡
つた

『す、すげエ！ 五百点台が一瞬で消し飛んだぞ！』

『見直したぞ仲野宮…』

『もひ屑なんかつて呼ばねえ！』

『長瀬さん大丈夫ですか！？』

うん、僕には温かい歓声だね

温か過ぎて火傷してしまいそうだよ

特に最後の人、あんな天才を心配するなんて、涙まで出しきそりだよ

「アンタ… 最初から…」

「そうー。僕はこの一瞬のために全てをやっていたんだ！」

止めのつもりで言つケド、君の攻撃なんて一度も当たつちゃいないんだよ！

あんな遅くて鈍い攻撃なんて当たる方が難しいと思つなあ！ まあ、当たれば僕でも拙いことになつていたとは思つケド

最後の言葉を言つと、無気力だった長瀬の顔にちょっとだけ気力が戻つた

「浪都は…私のことを警戒していたの？」

「警戒？ 悪いけど君程度の存在なんて警戒するにも足りないぐらじの雑魚だからね。いや、雑魚は魚に失礼か。まあ、学年三位とこうぐらじだから攻撃は怖かつたケド、全然支障にはならなかつたね！」

でも、完全に潰すことはできなかつたみたいだよ

多分最後の言葉が効いたみたいだね

怖かつた、つまり少しでも警戒した

僕としたことが…完全に自分で自爆したね

あ、そういうえば僕にはまだやることが残つていたね

「高橋せんせー、一つお教えしないといけないことがあります

「はい？ なんでしょう？」

「実は……」

高橋せんせーの下へ駆け寄り、耳元で「ニーや、ニーや」と囁つ

聞いた途端に「え？」という表情をされた

「では、結果発表です！」

この言葉で教室が静まり返る

Fクラスにとっては待ちに望んだ瞬間

Aクラスにとっては学園生活で最悪の結果発表

だったはずだけど……

「Fクラス仲野富浪都の反則により、Aクラスの勝利です……！」

そこをさせないのが僕なんだよねえ（

十一問 肩と天才と大爆発（後書き）

いかがでしたか？

肩っぷり全開の主人公でした

罵声、貶し、さらには驅きました

長瀬にやうに強く憎まれたのは言つまでも無いですね

最後の辺りのは英会話の訳文は自身で調べてみてください

アンケート

正直に言つと、主人公を誰とくつつけるかがまだ決まっていません！

長瀬とはくつつけません！ 別に嫌いから好きに変わるわけでもありませんし、正真正銘主人公を心の底から嫌っています！

だからくつつけません！

でも、自分でも誰とくつつければ良いのかが分からなくなつてきました

でも誰かとはくつつけたいです！

そこでアンケートです

主人公、”肩”仲野富浪都を、誰とくつつけて欲しいですか？

原作キャラならオッケーです

ただ、瑞希、翔子、愛子、秀吉を除きます

作者の中では三人とも原作キャラとの関係を崩したくないので

秀吉なんて男ですよ？

一人一票までです

締め切りは九月の終わりです

（睡眠）

十一問 肩と敗北とみかん箱（前書き）

今回は色々なことが起きます

とにかく展開が早過ぎです。作者も自重しています

ですがとつととAクラス戦を終わらせたいが為にこ一話に詰め込んでしまいました。後、今回出でくる話では時期が間違っていますが、無視してください

では、十一話です

十一問 肩と敗北とみかん箱

（三人称）

「Fクラス仲野宮浪都の反則により、Aクラスの勝利です！――！」

その一言でAクラス教室の中に居た全ての人気が啞然とする

それは、勝利を確信していたFクラスや、絶望を感じていたAクラスも含めている

そして、勝負に負けたと思っていた敗者の本人達、流歌と優子も啞然としていた

『……ちょっと待てエエ！――』

大絶叫

目の前に起きた現実が理解できていないらしい

そして、そんな大騒ぎを起こした本人、仲野宮浪都はただ微笑みながら見ていた

「反則！？ 浪都が反則なんて…」

「事実だよ。僕みたいな肩がフェアに戦うとでも思ったのか？」

「常識だよ」と言しながら教室を出て行く浪都

その背中に嵐の様な罵声が浴びさせられる

『見損なつたぞ。』

『やつぱりお前は卑怯者だ。』

『反則なんかするんじゃねえよ。』

『一度といの学校に来るんじゃねえよ。』

だが、そのどれにも大した反応を示さず、そのまま教室を出て行った

五回戦勝負を戦っていた十人が畳然とする中、ただ一人だけ冷静な人物が居た

「高橋先生、反則ってどういう意味ですか？」

最後に浪都と戦った相手、流歌だった

「彼が自分から告発しました。どうやら彼によると、テスト中に教科書やノート等を見ていたそうです。それは明らかな反則行為です。なのでこの試合は反則試合としてAクラスの勝利になります」

”ノートを見ていた”

明らかな反則行為

それを行い、反則負けした浪都

勝利していたらFクラスがAクラスの設備を手に入れるはずなのが、一瞬にして崩れさつた。勝利まで一步手前なのにそれを意図的に逃した

浪都に怒りを感じる者はかなり多かった

勝つために努力し、作戦を練ってきた代表こと坂本雄一は激怒しており、もし今この瞬間に浪都に会つたら殴り倒しそうな勢いだ

木下秀吉も自身の姉が侮辱された上に倒されたことで少なからず怒りを感じており、さらにはそれが反則での勝利だったのがさらにそれを増幅させている

誰も反則を行つたと疑わない中、一部の者はこの事実に疑問を感じていた

「Aクラス」

「どうしたの、長瀬？ やっぱり貴方も……」

「ええ。絶対に違つと思つ」

戦つた本人である流歌と優子はこの事実を信じる素振りは見せなかつた

得に優子は、その本人の成績を見て、幾らノートを見ながらテストを

受けていてもあれほどの高得点を取れるとは思つていなかつた

Fクラスサイドでも疑問に感じている者が居る

直接話をした明久と美波も例外ではなかつた

→Fクラス

「ねえ美波？」

「なに、アキ？」

「これって信じられるか？」

「浪都の反則負けのこと？ 全然。

アイツの頭脳は本物よ。それはウチ等が一番分かつてるしね」

戦争を語っていた浪都はとてもカンニングやインチキでの知識とは思えないほど深く知っていた

「僕もそう思つよ。浪都はインチキなんかする必要が無いと思つしね」

まったく浪都を疑つていなかつた

～Aクラス～

「どうかしたの？」

一人が不可思議な表情をしていたからなのかクラスメイトの愛子が心配そうに訊いていた

「愛子、貴方はどう思つ?」

「どうつて、なにが?」

「浪都が反則を行つたと思う? 私と優子には思えないんだが?...」

「うーん...ボクは一年の終わりに転入してきたばかりだから、彼のことはなにも知らないんだけど、見た目からすればあまりそうは思えないかな?」

「見た目?」

「うん。彼、あの性格の悪さを無視したら結構かわいいと思つよ?」

”かわいい”

浪都にはまったく似合わなさそつその表現

しかし、実際に良く見てみると浪都は確かに少々女顔だったいや、少々では無くそれなりにだが…

「今思えば確かに…秀吉ほどではないけど、仲野富もちょっとだけ女顔なんじゃないの?」

「それでも”かわいい”とまでは…」

「多分二人共彼の性格を知っているからだよ。無意識に過小評価してあまり気付いてないと思うけど、ボクから見たら結構かわいいと思うよ?」

だが、今はそんなことは関係ない

問題は浪都がカソニーニングや卑怯な手段を使つたか

「そんなことより、今は浪都が嘘を言つているのか本当に白状したのがが分かりたいの」

「でも、それって本人に訊かないといふからないんじやないのかな?」

だが、とうの本人が正直に白状する可能性は極めて低い

今回の戦闘で浪都は学園が誇れるほど の高得点を叩き出した

普通ならば”頭が良い”と認識され、浪都の評価も上がるはずだが、本人はそう簡単にそれをさせるのだろうか？

評価が上がるということは、学力が過大評価される
そして、学力の過大評価は戦争への干渉が多くなる
大の戦争嫌いの浪都がそんなことをさせるのか？

答えは”否”

自らが戦線に行かなればならない状況を作るほど、浪都は幼稚ではなかつた

今回の戦争では本気で戦えられたが、最後の告発により自分が”
天才”だという事実は消え去つていた

思う存分に暴れた後は証拠がまったく無い、警察で言つ”完全犯罪
”だ

「全て浪都の計画通りに進んだってことね…ああ！　イライラする
！」

手の平に踊らされていただけと分かった流歌も別の意味で激怒して
いた

「落ち着いて長瀬。でも、いつか絶対に仲野宮を倒す！
あんな奴に負けたままなんて、あたしは嫌だから！」

「では、最後の勝負を始めたいと思つます」

高橋の号令と共に、Fクラス対Aクラスの最終戦が始まった

「Aクラス代表、霧島翔子とFクラス代表、坂本雄一。前へ出でください」

「（こいつなつたら、俺で決めてやるー）俺は翔子に日本史で挑む！
ただし、内容は小学生レベル、100点満点の点数上限ありだ！」

驚きの内容にAクラスメンバーがざわめき始めた

『おい、これだと満点確定だぞ？』

『集中力と問題に気をつけて読めるかで勝負が決まるな』

誰もが満点を予想していた

「それだと問題を用意しないといけませんね。少々お待ちください」

高橋がコンピューターの前まで行き、問題を作つていく

数分後、二人の代表の前には一枚ずつ紙が置いてあつた

視点一 吉井明久

雄二の奴、本当に大丈夫かな？

いや、あんな雄二でも一応は”神童”って呼ばれていたしね！
負けるはずが無いよ！

『おい、テストが画面に表示されているぞ！』

これで”大化の革新”の問題があるか確かめられる！

『大化の革新』

『年』

あつた！！

やつたよ雄一！ これで勝てるよ！

「そこまで！ では、結果を発表します！」

よし！ これで僕たちFクラスの勝ちだ！

『Aクラス坂本雄一 51点』

『Fクラス霧島翔子 97点』

「3対2により、Aクラスの勝利です！」

僕たちの卓袱台が、みかん箱になつた…

視点一 仲野宮浪都

「これはどうじうじとかな?」

僕は珍しく動搖していた

それはそのはず、太郎の散歩を済ませ、
自分の教室に登校してみたら、卓袱台が全てみかん箱
になつっていたのだから

これつてつまり、Fクラスが負けたつてこと?

「吉田くん、これはどうじうじとかな?」

「あ、浪都か。うん、見ての通り雄一が負け
僕たちの卓袱台がみかん箱に変わったんだ」

代表には後で異端審問会に通報しておかないとね

それで償つてもらおう

まあ、みかん箱でもそこまで大差は無いけどね

「全員、さつさと席に着け！ 出席を取る」

乱暴に教室のドアが開くと、ある一人の教師が入つて来た

僕にとっては厄介の存在

戦争中はずつと避けてきた教師

学園で僕を軽蔑しない数少ない人たちの一人

そして、長瀬と同じぐらい僕の個人情報を知っている人物

「西村先生、なにしに來たんですか？」

我が文月学園生活指導担当の鉄人こと西村先生

「仲野富、言葉は慎重に選べ。俺はお前等Fクラスの担任になつた。

あれだけ派手に暴れたんだ、その分の補修はきちんと受けるんだぞ」

ちッ、面倒な…

珍しく僕も嫌がつてしまつた

始めてじゃないの、笑顔以外の表情を見せるのは？

「へえ、あの仲野富でも鉄人には怖いのか」

「この人には全てが悟られているみたいで気持ち悪いんだよ」

「ああ分かる分かる… それ凄く分かるよ… 僕らがなにかする時はいつも駆けつけて来るし、ちょっと不気味なんだよね」

「お前等三人は補修の時間を二倍にして欲しいようだな…」

大声で本人の悪口を言つたらさすがの西村先生でも怒るらしい

「まあいい。出席を取るぞ。新井！」

『はい』

「青木…」

『はい』

ETC…

「仲野富…」

「坂本雄一が霧島翔子とイチャイチャしていました」

『なアにイ！…！…！』

僕がさり気無く囁いたこの一言でFFTF全員の殺氣が代表に向いた

「なー? わよつと待て! 仲野四一。てめえはなに囁つてんだよ!

!」

「あれ、違つの? いやあ、頭を撫でられたりしてたからつきづ
そつだと…」

『なんだとオオ! ! ! ? ? ?』

「あれのどじが撫でてこるみたい見えるんだ! アイアンクロード
うアレはー!」

でも、幸せでなによりだよ

『坂本オ 雄一イ…』

吉田へんも含めてほぼ全員のFFTF団員の殺氣が代表に向いていた

これは昼休みが楽しみだ

「次! 吉井!」

全ての殺氣を無視して西村先生は出席を進めた

「雄一を殺します

「よし、全員来てるな。宜しい」

「良く無いよ! 明らかに俺への殺氣がこの教室に漂つてこぬじや

ないか!」

「氣のせいだよ代表。それは自意識過剰なんじやないかな?」

「貴様が元凶だろ!」

「ではホームルームを終了させる。後は担当の先生が来るまで静かにしていろ」

そう言い残し、西村先生は教室を出て行った

そして、出て行つた瞬間…

『諸君、いよいよだ?』

『最後の審判を下す法廷です!…』

『異端者には?』

『死の制裁を!…』

『男とは?』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの!…』』』

『宜しい。』れより異端審問会を開く

須川会長ぐる率いる異端審問会、通称FFF団の儀式が始まった

「ひょっと待て! ビーからその斧や鎌を出した!?

そのロープはなんだ!? それに一人だけ拳銃を持っているぞ!
ちょっと待て、そいつは仲野富だな！ ふざけるな!』

この数々の問い合わせに僕が答える

『それはね、代表。 知る必要は無いんだよ。
いや、君はなにも知る必要は無い。 もう君の
人生はここで終わるんだから』

「ふざけるな!」

『我々は大いに眞面目だ。 貴様の行いは
我々異端審問会への冒瀆と受ける。 それ
相応の罰を受ける覚悟はあるのだろ?』

須川会長くんの問い合わせに代表はさらに激怒する

「貴様正氣か!? それ以前に俺は
なにもしていないし、罪なんかは無い!」

『会長、被告人は我々に応じないと言つている。
さつさと処刑してしまいましょう』

『良い提案だ。 ではこれより、被告人坂本雄一の処刑
を決定する。 皆の者、この決断に相違無いな?』

『相違なし、須川会長！ 異端者には死を！
血肉と悲鳴の制裁を!』

統率力において異端審問会を凌ぐ集団や団体は存在していないと

思つ。

ターゲットを抹殺するためなら地の果てまで追つてくる殺人集団、それが

異端審問会さ！ 僕は雇われているだけだけど

そして、武器を持ったFFF団員が代表に襲い掛かるつとするところ

「あ、バカなお兄ちゃん！」

とても幼そうな声が聞こえ、FFF団全員が動きを止める

教室のドアを見ると、そこにはどこか誰かの面影がある、小さな小学生ぐらいの女の子が居た

誰かの妹なのか？

「葉月！ 何しに来たの？」

島田さんが驚きの声を上げる

知り合いなのか？

「お姉ちやんがお弁当を忘れたから、葉月が持つてきましたー。」

弁当を片手にさつと云つた

へえ、偉いねえ

そういうのを見ると、肩と呼ばれている人なら涙が出てくるよ

でも、相手が悪かったね

僕は子供が大嫌いなんだよ

「美波、誰だいこの子は?」

吉田くんが異端審問会ロープから着替えて島田さんに聞く

「島田葉月、ウチの妹よ」

やつぱり?

でも、クソガキは高校になんか来ちや駄目だろ

「あ、バカなお兄ちゃん!」

吉田くんも知り合いか?

ん、あれ?

『「これより異端審問会を開く』

いつの間にか拉致されていた吉田くん

そして、それを取り囲む多くのFFF団員たち

「ちょっと待つて！ 僕がなにをしたっていいんだ！」

『被告人、吉井明久は、小さな女の子に手を掛けるという大罪を犯した。よつてこの者は死刑とする。皆、この決定に相違は無いな？』

『『『全員、相違ありません！……』』』

『有罪、死刑！』

「ちょっと待つ……ぐがごらべしゃるがごむの、あアアアアアア……！」

吉田くんの断末魔の叫びが聞こえたが、それを無視する

安らかに成仏してくれ

そして、その島田妹さんはクラスをキヨロキヨロと見回してゐ

誰か探しているのかな？

「あ、居ました！」

何故か僕に指差す島田妹さん

「久しぶりです、ワソちゃんのお兄ちゃん！」

…え？

「…はい？」

珍しく、僕は目を見開いてボカーンとしてしまった

十一問 肩と敗北とみかん箱（後書き）

いかがでしたか？

主人公の反則？負けでした

ですが素直に信じてもらえない主人公

これって喜ぶことですが、本人にとつてはイライラすることです

そして、最後は珍しく狂氣以外の感情を見せました

”困惑” ですけどね

実は女顔な主人公、見た目は読者様に任せますが、
これは前から決定していました

→アンケート途中経過

長瀬流歌…一票

木下優子…六票

小山友香…一票

佐藤美穂…一票

マイナー キャラの誰か… 一票

島田美波… 一票

島田葉月… 一票

吉井玲… 一票

小暮… 一票

現在ではこのような状況です

優子が圧倒的に人気ですね（笑）

現在でも続いているので投票は感想欄で、自由にしてください

今回の質問

小説家になろうでのお勧め完全オリジナル小説はなんですか？

ちなみに作者のお勧めは『そこにカイロスはいるのか？』という小説です

（睡眠）

十三問 肩と仔犬と犯罪者（前書き）

次話投稿が遅れました

言い訳としては… 部活です！

今回は前半ではキャラ崩壊。主に主人公の

そして後半はまたしても重い話

なんとかバカテスの雰囲気を出そうと頑張りましたが、
やっぱり最後は重い話になってしまいました

では、十三話です

十二問 肩と仔犬と犯罪者

「お久しぶりです、ワンちゃんのお兄ちゃん…」
え？

僕は田を見開いて驚いているが、島田妹さんは二三回も手を振つてきた

ちよつと待つてくれよ、僕は君なんか知らないぞ？

「え？ 浪都、葉月の知り合い？」

いやいや、違うよ島田姉さん

僕は君の妹なんか知らないよ

「知り合いな訳ないだろ？ 僕は今日始めて会つたんだから

「違います！ 葉月はワンちゃんのお兄ちゃん
とは会つてます！ 初対面じゃないです！」

そんなに必死に言われても、僕には記憶が無いんだから

僕は胸の辺りで腕を組んで記憶を繰り返した

「うーん… 残念ながら記憶にないね

「ねえ葉月、具体的に何で会ったの？」

「ワンちゃんこのお兄ちゃんと一緒に公園に太郎の散歩をしていたら会いましたー。」

ああそうか、僕って休日は毎回公園に太郎の散歩をするから会つたんだ

でもそんなに印象的だったかい？

「散歩？」

「はい！ ワンちゃんのお兄ちゃんと一緒に公園にワンちゃんと一緒に公園で遊んでもしたよー。凄く楽しかったし、葉月にもワンちゃんを撫でてわくわくしました！」

ちよ、それは言わないでくれよー。

ほりあ、クラスメイトたちが疑わしい田で僕を見るのじゃないか！

これじゃあ僕のキャラが立たないだよー。

「仲野富が…」

「犬と楽しく遊んでるだつて…？」

「似合わんな…」

そんな目で僕を見ないでくれ！

なに「面白い」と聞いたって顔になつているんだよ！

僕には軽蔑と憎しみの目で見てくれ！

「すひじく楽しかつたです！ 公園の子とも全員遊んでたりして、ワンちゃんも凄く楽しそうでした！ ワンちゃんのお兄ちゃんもいっぱい笑つてました！」

それ以上は言わないでくれ！

「ほお、仲野宮、お前にも人間らしい一面があるんじゃないか」

「か、勘違いしないでくれ代表！ それに、僕が犬好きなの文句でもあるのか？ あるのなら言つてみろ…」

…しまつた！ つい感情的[…]

「分かつた分かつた。ふん、犬好きか…なら今度の戦争ではいつてあれをすれば…」

「なにを企んでいるんだ！？ クソオ、やつぱり知られたくないよ…」

「浪都つて犬が好きなんだ？ 意外とかわいい所もあるじゃない」

「うん、浪都つていつもこんな性格だと思ったけど、実は優しいんだね。

子供とも遊んであげてたって言つてるしね」「

そんな微笑ましい顔をしないでくれ！

ちッ、なにか打開策は…思いつかない！

「葉月はあの時のお礼がしたくて来ました！」

完全に迷惑なんだけどね、僕からすれば

多分あの時は太郎を運動させようと近くの公園に行つたんだと思つ

そこで、子供達が一度良く居たから太郎に遊ばせただけなのに…

「あの、ちょっとといいですか？」

姫路さんがもじもじしながら階に訊く

これ以上になにか言つ必要もあるのか？

「なに、姫路さん？」

「実は、私も…この前仲野富くんを見かけました」

君もか… まつたく、なんで僕はこんなに遭遇率が高いんだよ！

「へえ、姫路さんも。ビームで？」

「ペッシュショップです」

最悪だ！一一番見られたくない場所で見られてしまったじゃないか！

「「「ペシッシュョップ！？」」「

全員が驚きの声を上げる

拙い、あそこにしてたことが知られる僕の作り上げてきたキャラが一気に崩れてしまう！これじゃあ誰もが僕のことを避けなくなるし、

犬好きっていうレッテルだけを貼られてしまう！

クソオ、僕の理想の学園生活がア…僕が作り上げてきたイメージがア…

「ペシッシュョップなんかでなにしてたんだ？」

「い、犬の太郎の、」飯を買おうとしたんだよー。

なんとかして誤魔化さないと…

「そうだったんですね？」

「な、なにかおかしなことを言つたかい？」

駄目だ、ちょっと焦り過ぎてる

なんとかしていつも通りに戻らないと…

「いえ、ただ…」

「 「 「 ただ? 」 」 」

姫路さんの言葉にクラス全体が興味を持つ

ちよ、それ以上先は…

「仲野宮くんは仔犬と触れ合いかが出来るパートナーで凄く
楽しそうに遊んでいましたから違うかと…」

「 「 「 なに? 」 」 」

「ちよ、それは言わないでくれえ…!…!

僕の魂の叫びは虚しく、全員が驚きの声を上げる

ああ、終わった…僕の学園生活が…

「まさか…仲野宮にそんな趣味があつたとは…」

代表は畠然とした表情で僕を見てくる

「昨日の狂氣ぶりが嘘のよつじゅ…」

木下くんはちよと引いてる

驚愕するのまだ良こナビ引くのはやめてくれ…!

「こや、でも浪都つて秀吉みたいに結構女顔でしょ?
そういうふうだと似合つんじゃないのかな?」

吉田くんが見直したかのよづに

その箇所は触れないでくれ！」の顔はコンプレックスなんだよ！

「……新しい商売

ムツツリーくんは良い物を見つけたような顔になつてカメラを容易し始めた

君はいったい僕のなにを撮るつもりなんだ！？

「ちょっと待つてくれ皆！ 僕がそんなことをするわけが…

「……証拠写真」

「何時の間に撮っていたんだよ！？」

ムツツリーくんはポケットの中から一枚の写真を取り出した

その中には僕が笑顔でペチットショップで遊んでいる姿だつた

「ムツツリー、お前は何時の間に仲野宮の写真を撮ったんだ？」

代表も疑問気にムツツリーくんに訊いた

「……依頼された日の帰りに偶然見掛けて撮つておいた

「でかしたぞ」

依頼とはなんだ？ 僕に関する依頼なのか？

そんなの僕の行いの報復ぐらしか思いつかないなあ

「あ、それよりあと少しで授業が始まるんじゃないのかな？」

「あ、いけないもうこんな時間！」

葉月、お弁当ありがとう。でも後少しだけ授業が始まるから、悪いけど一人で帰れる？」

「はい！ お姉ちゃんも頑張つてください！」

バカのお兄ちゃん、ワンちゃんのお兄ちゃん、セヨウヒナリーハー。

僕としては君の所為でかなり苦しんでるんだけどね

もう一度と来なくて良いよ

島田妹さんは元気に手を振つて教室から出て行った

はあ、とんだ災難だつたよ…

「やうこえばどうなつてるんだ、依頼は？」

お前なら一日で大体は達成できるはずだろ

「……今回は調べるために困難だったが、これだけしか集まらなかつた」

ムツツコーーくんは代表に一枚の紙を差し出してい

なるほど、僕を調べたんだ

別に僕は知られても困ることなんて無いけどね

でも勝手に人の個人情報を調べるのは関心しないなあ

「雄一、なんだそれ？」

「ムツツリーーーに仲野宮について調べてもらつたんだ。
これだけしか集まらなかつたらしいが」

「あのムツツリーーーでも情報が入らなかつたのか！？」

「……情報はあつた痕跡があるが、どうやら全て消されていたようだ」

僕がやつたんだけどね

購入履歴、前の学校の入学時の記録、昔住んでいた住所などは
全てハッキングして僕に関する情報は消去したからね

知られて面倒になるのは僕だ

犯罪だけど仕方の無いことだよ

「フン、目の前に本人が居るんだ。事実の確かめにもなるし、
読んでおいて損は無いだろ。なあ、仲野宮？」

「知りたければ『自由に』

「なら読むぞ。

仲野宮浪都、1994年6月23日に京都府京都市に生まれ、
その翌年に父親の仕事の都合でこっちに引っ越してきた。家族構成は
父親、母親、姉、妹、仲野宮の五人家族。父親は警視庁機動部隊隊
員であり、

警視庁爆発物処理班班長の警察官、仲野宮零都なかのみや れいと警部。そして、中学

一年から

親戚の援助を受けながら一人暮らしを始め、今に至る

どこか間違ってる所もあるか?」

「え、これは頑張つて調べたものだね

「いや、どこも間違えていないよ。いやあ、良く調べたね。
関心関心。良く頑張りました!まあ、僕みたいな屑を調べても
無意味なんだけどね」

「てめえは意外にも大家族らしいな、それに父親が機動隊であり
爆発物処理班

でもある。そんな家で育つてんのになんて一人暮らしをしてんだ?」

「僕にだつて理由つていうのがあるんだよ」

「でも、皆もこれで分かつただろ? こいつ、仲野宮は昔から
一人暮らしをしてんだ、つまりあいつの行いを注意する親が居ねえ
んだよ。

「こいつは口クな育ち方をしてねえんだ」

僕も自分の育ち方はかなり悪いと思うけどね

それも否認しないよ、寧ろ賛同するわ

「あの、坂本くん。今までも話の必要は……」

姫路さんが氣まずやうと言つた

「構わないよ。こや、寧ろこれぐらいにはなにも感じないさ。何年同じことを言われてきたか分かるか？　その年月に比べればこれぐらい大したことでもないよ」

「なんでそんなことを言ひのせー。いつの時はなにか言ひ返せないと、悔しくないのか！？」

今度は畠田くんが僕の対応にクレームを付けてきた

「なり君は僕に対する悪口に全て反論しないとでも言ひののか？」

「や、それは……」

「毎日何度も言われる悪口に全て答えていたらキリが無いよ。君は周りの言葉に敏感過ぎだね。もうちょっと”無視”っていうのを覚えた方が良いこと思つよ？」

自意識過剰とも言つしね、いつのことは

「明久、ここには何を言つても無駄だ。文字通り仲野宮は頭がぶつ壊れてるんだよ」

あはは、今更だね

まあ確かに、”注意する大人”と一緒に住んでいなかつた僕は自分の行いが悪いことだと言つてくれる人が居なかつたけど、良いことと悪いことぐらい分かるよ？自分の行動は悪いことだって自覚してくるしな。変える気なんてまったく無いけどね

「でも良いことと悪いこととの差が分かつてゐるだけマシだひ？ましてや犯罪行為擦れ擦れの行動を行つ君達よりはね」

「ほあ、言つてくれるじゃねえか。俺たちの行動になにか間違つててることでもあつたのか？」

うん、典型的な現代の若者の考え方だね

「例えば島田さん、君が一番酷いと思つよ？」

僕が急に島田さんの名前を言つたからか驚いた表情になる

「ウチ？」

「うん、君以外に誰が居るんだい？君が一番酷いと思つね。主に吉田くんへの暴行に対してもだよ」

「ここ数日のクラスでの生活を見る限りはそうだね

「あ、あれは……」

「立派な暴行罪だ。もしかしたら吉田くんの両親に訴えられるかもしれないんだよ？警察にだつて届ければ最悪の場合は更正所や

少年院に送られるよ。

懲役は15年以下、罰金は最悪の場合は50万円だよ。しかも君の場合は吉田くんが死んでもおかしくないぐらいかなり過激な暴行だろ？殺意の有無はともかく、傷害罪により被害者が死亡したら

”傷害致死罪”の罪で最低三年以上の有期懲役さ。明らかな殺意があつた場合は殺人罪の罪で最悪の場合は死刑さ。いや、一人殺して死刑にはならないけど、最悪でも無期懲役だね」

僕が暴行罪に関しての様々な罪状を述べると、島田さんの顔がちょっと青くなつていた

そこまで自覚が無かつたみたいだね

「分かるか？ 傷害罪でも行き過ぎれば死刑にもなれるし、ご両親にだつて多大な迷惑になるんだよ。それに罪を認めて少年院から出ても社会じや生きて行けないよ。

何故だか分かるか？ まあ分かり易く言うと、僕が会社の社長だつたら経歷に傷害罪のある人は雇わないと思うよ？ つとこのように社会からは”乱暴な人”つていうレッテルが貼られて仕事が見付からなくなる。犯罪つてそれだけ悪いことなんだよ？」

でも、島田さんだけに言つのはちょっと可哀想だな

島田さんと同じぐらい犯罪染みた行動をしているのは……あの子だね

「君もだよ、ムツツリーーくん

「……俺か？」

「うん、君の場合は社会で生きていくにあたって最も貼られたくないレッテルを貼られる可能性が一番高い。それは、”変質者”だよ」

僕がこのことを言つてもムツツリーくんは首をブンブン振りつぶすだけだった

「……そんな事実などない」

反論するが、それを無視して僕は話を続ける

「盗撮罪、盗聴罪、セクハラ行為や痴漢行為だよ。僕にとっては一番馬鹿馬鹿しい犯罪だけね。盗聴や盗撮した内容にもよるけど、最低でも三年の懲役年数に加えて多額の罰金を支払わないといけないんだけど、なにより一番嫌なことは、償つた後だよ」

僕の言葉に疑問符になるムツツリーくん

言つてる意味が分からぬなんて、まったくどうも…

「考えてみなよ、就職先の会社はわいせつ行為を働いた人物を雇いたいと思うか？」

答えは、”NO”だよ

僕でも雇わないね

「つまり、島田さんの件同様で仕事が出来なくなる。

君達は軽く見てる」の盗聴や盗撮だけど、未来では多大な影響を与えるんだよ？ そしてその経歴は永劫自分と一緒に付いてくる

とまあ現状況で一番危ない人を述べてみた

元は代表の言葉を答えたつもりだけど、気が付いたらかなり話していたね

「他にも器物損傷や不法侵入などもあるけど、言つて欲しいかい？」

「…いや、結構だ」

代表も僕に言い負かされたのが悔しかったのか
嫌な表情をする

あはは、僕を論破するなんて十年早いよ

ちなみに島田さんとムツツリーくんだけ

ムツツリーくんはあまり気にしていないみたいだ

相変わらずカメラを磨いている

うん、これだけ言つても方針を変えないのでならぬにを言つても無駄
だね

そして、島田さんは…

色々と考え込んでいたような表情だった

うん、僕としてはそれが一番だよ

「吉田さん、遅れてもみません。席に着いてください」

そして、十分ほど遅れて一限目の先生がやつてきた

授業は適当に聞き流し、一日を終わらせる

あの後は何事も無く、吉田くんにも話しかけられる」ともなく
全ての授業を寝わらせ、僕は帰路に着いている

最近はちょっとずつ夏に向けて熱くなつて来たのか、
冬の制服が暑苦しく感じる

「珍しくストーカー（笑）さんにも会わなかつたし、
久しぶりの一人つきりかな？」

そんな独り言を呟きながら、家へと向かう

「なにか用かい？」

しばらくすると、隣に気配を感じた

最初は無視しようとしたけど、気配に耐え切れなくなつて思わず振り向くと、そこには予想外の人が立つっていた

「別に……」

島田さんだつた

あれからかなり落ち込んでるつていうか、考え込んでいるみたいだけど、どうしたんだろう？

やつぱりちょっとここ過ぎたかな？

「ねえ浪都……」

「ん、なんだい？」

「あの浪都の言葉を聞いて考えてたんだけど、

どうしたアンタはウチや土屋のことを言つてくれたの？

突然僕が警告をした理由を訊いてくる島田さん

「うーん…難しい質問だねえ。強いて言つと、嫌いだからかな？」

「嫌い？」

僕の言葉に頭を傾げる島田さん

「うん、僕は君みたいな”犯罪を犯罪と自覚していない人”が大嫌いなんだよ。だから訂正させたんじゃないのかな？」

「”犯罪を犯罪と自覚していない人”…」

僕の言葉に再び考え込む島田さん

「そう。これは警察官だった僕のお父さんの口癖だったんだけどね。

”犯罪者の中で一番性質たちが悪い

のは、凶悪な殺人犯でも、テロリストでもない。一番怖いのは、犯罪を犯罪と認識しない未成年だ”」

何度もお父さんから聞いたこの台詞。

こんな精神状態だけど何故かこの言葉だけは覚えているんだよね

「え？」

「大人なら更正の余地がある。でも、子供がもし犯罪を犯罪と自覚しなかつたら、更正もクソも無いんだよ。それどころか、それ以上の犯罪を犯して、もしかしたら人の命まで奪われるかもしれない。だから、少年犯罪が一番性質たちが悪いんだよ」

うーん、これはちょっと書いちや拙かったかな?

「アンタにも、そんな考えがあるのね…」

「まあ、僕は君に説教なんてする資格、無いし、そんなエライ人でもない。考えだつて代表が言つたみたいにマトモでも無いし、僕自身も自分が”ぶつ壊れてい”つて自覺しているよ。この言葉を聞いてもこれをどう行動に起こすかは君しだいだ」

しばらく立ち止まって考え込む島田さん

この言葉をどう人生で活用するかは島田さん次第だよ

「えっと、その…」

「なにか文句でもあるかい?」

「ち、違つわよー その、ありがとう。浪都は氣を遣つて注意してくれたんでしょ?」

うーん、どうだろう?

正直僕あまり分からぬいかな

「解釈は君に任せるよ。じゃ、僕はこの辺で」

アパートの近くまで着いたので部屋へと戻る

しかし、今日は大変な一日だったなあ

でも、なんであんな話をしたんだろう?

僕はなにをしてるんだろう?

十三問 肩と仔犬と犯罪者（後書き）

いかがでした？

主人公のキャラ崩壊、それだけ知られたくない事実だつたんですね

後最後は美波にフラグ？的なのが立ちましたけど違います。もし投票があつたら変更ですが、フラグではありません。まだ投票は幾らでも受け付けます

↙アンケート途中経過

長瀬流歌…一票

木下優子…六票

小山友香…一票

佐藤美穂…一票

マイナーキャラの誰か…一票

島田美波…一票

島田葉月…一票

吉井玲…四票

小暮葵...二票

明久姉と小暮先輩の人気がかなり上がってきてています（笑）

順位がどう変わるかは作者も分かりません

（睡眠）

十四回 肩と懸夢と祭りの準備（前書き）

週末の投稿です

しかし、自分で書つのもなんすけど、つまらないですね今回は
まったくストーリーの展開も無い、面白い箇所も無い、つまらない
ですね

タイトルでもお分かりになられると思いますが、
これが清涼祭編のプロローグです

主人公はどう行動するんでしょう？（笑）

ちなみに召喚大会で要素を一つ加えました

では、十四話です

十四回 肩と悪夢と祭りの準備

とある学園の校舎

その裏側にある人気のない場所で、一人の少年が蹲っている

その周りを囲むように位置するのは、数人の男子生徒

そして、怒声と共にぶつけられる数々の暴行

『お前の所為なんだよ…』

違う、僕じゃない

『てめえさえ居なればあんなことはならなかつたんだ…』

僕の所為じゃない

『お前なんか生きる価値も無いんだよ…』

ヤメロ。チガウ、ボクジャナイ。ボクハナニモヤツテイナイ。
ボクハワルクナイ。ゴカイナンダヨ。ボクノセイジャナイ

『死ねよ肩！』

やめてくれ…………！

「わッ！？」

そう叫びながら、僕は布団から飛び起きる

隣では何事かと思ったのか部屋中を駆け回っている太郎が居る

「あはは、悪いね太郎。なんでもないよ」

少し機嫌が悪そただけど、大人しく再び布団に潜る太郎

時計を見ると…まだ4時か…

はあ、幼稚園児じやあるまいし、今時昔の夢を見るなんて

まあ大したことじやなかつたけどね

僕は得に気にすることなく、再び布団の中へと入っていく

清涼祭、いじ文月学園にとつては学園祭のよつなお祭り

毎年生徒達が自身のクラスで出し物を決め、
他所から見学に来る人々を賑わうとても伝統的な
行事である

各クラスはその清涼祭の出し物を決め、既に製作に取り掛かっている

「一塙へ回れえ！」

：僕たちFクラスを除いてね

「行くぞ吉井！」

「来い須川くん！」

僕などの一部の人を除いてFクラスは元気に野球を楽しんでいた
製作どころか出し物すら決まっていないのに…

「貴様らああ…！　なにを遊んでいる…！」

「げッ、鉄人だ！」

そこへ鬼の形相で駆けつけた西村先生によつて全員が教室へと
文字通り”叩き戻された”

「出し物すら決まつていないので野球とはノンキだね」

「黙れ愛犬家」

「まだそのネタを引き摺つているのかー」

いい加減にして欲しいな…

「さて、まずは… Fクラスは清涼祭の出し物を決めたいと思つ

氣を取り直して代表が皆に言つ

「まあとりあえずFクラスの出し物討論の進行係を任命したいんだが、

誰かやりたいという人は居るか?」

当然、めんどくさがり屋の集まりのFクラスに立候補する者は居ない
僕だってこいつのことは嫌いだから、不干涉且つ安全に関わらないこととした

「誰も立候補者が居ないのなら、俺が決める。島田、お前で良いか
?」

とにかく仕切らないといけないからね、気が強い人を指名したんだ
ろう

それだけが取り得みたいなものだしね、島田さんは

「ウチ? うーん、悪いけどウチは召喚大会に出るから、ちょっと無理と思つたけど…」

召喚大会、他所から見学に来た人たちのための試戦の『テモンストレーション』

みたいなものだよ。ちなみに優勝者は景品がもらえるらしいけど

はあ、『テモンストレーション』のために戦争するなんて、ビックリする
これじゃあまるで、”新しい兵器を開発できたからそれのテスト
のために”
他国に宣戦布告します”と言つてこようがなんのだと

「やつらか…なら姫路ばっかりだ?」

「わ、私ですか?」

うーん、逆に姫路さんは気が弱すぎると感じないのかな?

無理な意見を却下する度胸や首を纏める統率力に欠けているからね

でも、そつ考えると代表が適任なんじゃないかな?

生憎と代表は清涼祭に関しては無関心らしいけど

「姫路さんは仕切り役には向かなこと思つよ~。」

珍しく吉田くんが良い意見を言つ

「それに、瑞希もウチと一緒に召喚大会に出るのよ」

つまり、それはペアで出場つてことなんだね

「ここ」でまた余談だけど、召喚大会は大きく一つのトーナメントに分かれている。個人戦とペア戦で分けられていて、優勝者は一人ずつ出るんだ

「そりゃ…他に使えそりゃ連中は居ねえからな。島田、補佐を就けるつてのはどつだ？ これなら仕事だつて減るだろ？」

「補佐？ 任命者しだいじゃやつてもいいけど」

「そりゃ。ならここから候補者を一人選ぶから、島田はその一人から選んでくれ」

そう言つと、様々な意見が上がつてくる

『仲の良い吉井でいいんじゃないのか？』

『仲が良いつて言つたら姫路さんだろ？』

『でも坂本の方が資質があるんじやないか？』

うーん、これじゃあキリが無いね

「もうこいわよー。ここから候補者を選ぶから、

皆でどっちが良いか決めて」「

候補？… 吉井

候補？… 明久

うーん、この二人から選ぶのは難しいね…

「」の二人から選べ」

「ちょっと待って！ 候補者が一人とも同一人物だよー！？」

吉田くんはなにがイケナイって言つんだりう？

『どうする？ どっちが良いと思つ？』

『うーん、どっちも馬鹿だしなあ…』

苦渋の選択だよ、まったく

「他人を馬鹿と呼ぶ人こそ馬鹿なんだ！」

「明久、お前が言つても説得力なんか無いぞ？」「

「なんか大嫌いだ！」

渋々と島田さんの隣に上がつていく吉田くん

「さて、誰か良い案はない？」「

「……（スッ）」

すると、一人の生徒が沈黙を守りながら手を上げる
上げたのは、ムツツリー二郎と土屋康太くんだった

「はい、土屋」

「……写真館」

君の「写真館は放送できるようなものなのか？」

「アンタの写真館は拙そうな写真が大半を占めそうだけど、
とりあえず書いておくわ…」

そして、吉田くんが黒板に案を書き入れる

『「写真館」秘密のぞき部屋』

そんなタイトルじゃ一発で教師陣に却下されると思つけどね

「はい」

今度は別の男子生徒（名前を知らない）が手を上げる

「なに、横溝？」

「二郎はストレートにメイド喫茶と行きたいが、
それに一味加えて”ウェーティング喫茶”なんてどうだ？」

ウェディング喫茶？

「なにそれ？」

「メイド喫茶ではメイド服を着るが、こちらでは女子がウェディングドレス、男子がタキシードを着るなんてどうだ？ 新新だし良いと思うが」

「へえ、それは良さそうね」

そして、幾つか賛成する声が聞こえる

『憧れる女子も多そうだな』

『確かに斬新なアイデアだし、オリジナリティだってあるぞ』

でも、反論するものだって居る

『服の調達が大変なんじゃないのか？』

『コストだって馬鹿にならないと思うし』

『それに、結婚式って男子にとつてはある人生の墓場だろ？』

様々な意見が飛び交うけど、僕は一切介入しない

うん、まったく興味が無いからね

「はい、静かに！ アキ、とにかく書いて」

「う、うん」

『ウエディング喫茶”人生の墓場”』

案だけではなく、タイトルも斬新だね

「はい」

今度はFFF団リーダーの須川会長くんが手を上げた

「須川、なにか案でも浮かんだの?」

「俺は中華喫茶を提案したい」

中華喫茶つて、ラーメンや餃子でも出すの?

「それってなに? 中華料理を出すとか?」

「いや、違う。手作りのお茶や団子などを出す本格的な中華喫茶だ。今では中華料理はヨーロピアン文化にかなり汚染されているが、中華料理ほど食に奥深いジャンルは見当たらない。そもそも食といつのは…」

以下省略、よつあるにお茶や団子を出す喫茶店が良いんだって

「これはマトモな意見ね。アキ、これも書いて

「う、うん」

書く手が戸惑っている

あはは、内容を理解できていないんだね

『中華喫茶』『ピーロピアノ』

聞いた単語を適当に書いているだけだよね？

その時、教室の扉が乱暴に開いた

『ガラッ！』

「清涼祭の出し物は決まったか？」

わざわざFクラスを教室に引き摺り戻した西村先生だった

「わざわざ黒板に候補を三つ書きました」

そして、見せるのは三つの題名

『写真館』『秘密の覗き部屋』

『ウエディング喫茶』『人生の墓場』

『中華喫茶』『ピーロピアノ』

改めて見るとマトモなのが無いね

「どうやら補習の時間を倍にして欲しいみたいだな…」

『ひ、違いますよ！ 全て吉井が勝手に書いただけです！』

俺たちは関係あつません!』

『俺たちは馬鹿じやあつません! 全て吉井の責任です!』

「じゃ、罪をそんな簡単に僕に擦り付けないでくれ!」

吉田くんを生贊にして助かるのですからクラス生徒たち

うわあ、簡単にクラスメイトを売っちゃったよ

「お前等…そもそも馬鹿な吉井を選んだ時点で既にお前達は馬鹿なんだ!」

「貴様はこつか殺してやる!」

「またたべの正論で吉井くそは反発してこの

正論を言つてこゐのになにか文句でもあるのかな?

「またたくお前等は…」の清涼祭を期に金を稼いで
クラスの設備を向上させるところえすり無っこのか?

おお、なるほどね

稼いだ分を設備向上の資金に注ぎ込めば少しはマシになるとと思つ
しね

流れに沿ひながらカン箱では不満だらうしぬ

『おお、その手があつたか!』

『さすが鉄人、考えも大人染みていてイヤらしい』

「貴様等、補習を一倍では無く三倍にして欲しいのか?」

『『『すみませんでした』』』

本人の前で悪口なんて相当度胸があるね

それもよつにもよつて西村先生に

『なじびつする? いじは稼ぎ易い喫茶店にするか?』

『そんなの使いまわされてるだろ。それなら独創さのある
ウエディングの方が良いんじゃないのか?』

『でもそれだとコストが高過ぎで利益にならないだろ。
それなら出費の低い写真館が良いと思つ』

『馬鹿、ムツツリーの写真館だと教師に見られたらアウトだ。
男子は集まると思うが危険が高すぎる』

『でもハイリスクハイリターンの可能性だつて否定できないだろ?』

『そのリスクの所為で営業停止になつたら元も子も無いんだよ』

珍しく眞面目に討論しているね、Fクラスは

やつぱり金が絡むとやる気が出るんだ

「皆、 静かに！」

考えが纏まらない所為か島田さんが手をパンパンと叩いてクラスを黙らせる。やつぱりまとめ役に向いているんだね

「もう多数決で決めるから、 皆もそれで良いわよね？ やりたい方に手を上げて、 多かつた方に決定するから！ はい、 写真館が良い人？ 次、 ウェディング喫茶が良い人？ 最後に中華喫茶が良い人？ はい、 オッケー！」

結局は多数決で決まるんだね

まあ、 それが一番合理的で論理的だけどね

「Fクラスの出し物は中華喫茶に決定！ 各自役割分担をして、 全員が協力すること！ 得に浪都、 アンタはいつも寝てばっかなんだから手伝いなさいよ！」

ええ、 僕もか？

僕みたいな貧弱人間なんて力にならないと思うよ？

「それならお茶と団子は俺が引き受ける」

「……（スツ）」

厨房を名乗り出たのは中華喫茶に熱烈な拘りのある須川会長くんとなぜか料理が出来るムツツリー二くんだった

うーん、 僕は料理が出来ないから厨房はちょっと無理かな？

「二人とも料理は出来るの？」

「俺が提案したんだ、出来ない訳がないだろ？」

「……紳士のたしなみ」

後者の理由はちょっと納得行かないけど、これで大丈夫だね

「じゃあ、皆には二班に分かれてもうから！ 廉房に回りたい人は須川と土屋の所に、ホールに行きたい人はアキとウチの所に来て！」

両方とも駄目じゃないか

厨房は料理が苦手だから回れない、接客だって嫌われてるしお客さんを苛めちゃいそつだから駄目

出来ることが一つも無いじゃないか

「島田さん、質問」

「なに浪都？」

「僕は食材調達に回って良いかい？」

それ以外に出来そうのが見当たらぬんだよ

「なに言つてるんだよ、浪都は結構可愛いんだから

ホールに行つた方が…痛い！ 美波、なんで僕の急所を殴るの！？」

今は僕でもカチンと来たね

一瞬殴りたくなったよ

「とりあえず、浪都はなにか理由もあるの?」

「僕は料理が出来ないし、接客も性格がコレだしね」

「うう」と呟く島田さん

「これに納得できる島田さんを怖く思つたのは僕だけかい?」

「へッ、またぐの役立たずじやねえか

うん、僕はまつたぐの役立たずだよ

わざわざまで寝転んでいた代表がそつ吐き捨てるよつ吐つ

「あはは、反論も出来ないよ」

「はあ、まあ自分でやつぱり別に良くなさう

溜め息混じりに島田さんが言つ

「じゃあ、僕はテーブルとか食材を持つていいくから、後はよひよへ

「うそ、『若狭さん』

ホントはサボるためなんだけどね

そもそも僕たちFクラスはテーブルどころか机も無いんだよ？

食材なんて色がヤバそうなのしか手に入らなさそうだし、そんな金は無い。僕だって生活は苦しいんだよ

僕はFクラス教室を出て、適当に校舎を彷徨っている

うーん、サボったのは良いけど、暇だなあ

あ、分かった！

他クラスでも苛めようか！

十四問 肩と悪夢と祭りの準備（後書き）

いかがでしたか？

今回はプロローグ的なもので、原作とほぼ同じです

祭り本番では主人公はやはり最低な行為に走るでしょう（笑）

～アンケート途中経過～

木下優子…八票

吉井玲…七票

小暮葵…四票

島田美波…三票

票数の変化は以上です

吉井姉が優子に追いつきそうですね

～睡眠～

十五問 肩とサボりと暇潰し（前書き）

今回でアンケートを終了します

沢山のご意見を頂き、作者は嬉しい限りです

結果は、後書きにて

今回は珍しく主人公が黒くなります

あれ？ この小説つて主人公が黒くないといけないのに、珍しくってなんだろう？

最近主人公が丸くなりすぎている気がしてます

では、十五話です

十五問 肩とサボリと暇潰し

暇潰しにAクラスに来たは良いケド、忙しそうだなア

机に布を被せたり、衣装を作つてしたり、メニュー製作をしていたり、

とにかく大忙しだった。まるで引越しを数日に控えた家族みたいだ

とりあえず、誰に気付かれることもなくクラスの進入に成功する

皆自分の仕事で手一杯だからね、こんな大きなクラスなら尚更だよ

「なんの用、浪都？」

「なのになんで君は僕の存在に気付くんだろ？」「

作業に邪魔なのか、髪を後ろで纏めた状態で長瀬が話しかけてきた

手には金槌つてことは、看板とかの製作を手伝つてるのかな？

「アンタの雰囲気は嫌でも感じられるわよ」

それって喜ぶべきことかな？ それとも嫌がるべきかな？

「やつぱり君は大工仕事なんだね。見かけによらず不器用だし

「う、煩いわよー。あんな繊細なこと、やつてるだけで眠たくなる
し……」

なにも変わらないね、君は

悪い意味でだけど

「ま、頑張つてくれよ」

僕はAクラスを後にしようと教室を出ようとする

「これは苛めても面白い反応を見せるのは長瀬以外に居ないしね

そんなのじゃあ面白くない

「ちょっと待ちなさいよ」

でも、グッと肩を掴まれる

「僕になにか用かい、ストーカーさん？」

「ストーカーじゃないっていつまで言えば気が済むのよー。」

「冥王星が太陽を公転するまで

「何百年後の話かー。」

「正確に言つと247・74年だケドね

「真面目に答えるなー！」

あはは、こいつ苛めても面白い反応をしてくれるなア

「で、僕になんの用かな?」

「浪都、アンタ暇?」

「なんで?」

「学園祭の準備を手伝って欲しい」「忙しい」即答するな!」

どちらかと言うとかなり暇だ

まあ学園祭の手伝いなんてもつと嫌ケドね

「僕は暇じやあないんだ。それに頼む相手を間違えていいか?」

完全に頼む相手を間違えているね。頼むならもつと優しくて人間として出来上がってる人に頼まないと

「忙しいのならAクラスには来ないでしょ?」

「むむ、痛いところを突いてくるねえ。でも、

僕は本当に忙しいんだ。材料とか器具を借りてこないといけないんだ。Fクラスの出し物のために」

本当は別のクラスを苛めに行くためなんケドね

「長瀬、どうしたの? 誰と話して…」

「ああ、また面倒な人が来たね

「やあ優等生さん。頑張つて仮面を被つているかい?」

「仲野富浪都……！」

恨めしそうに僕を睨むのは、先日ボコボコにした似非優等生、木下優子さん。まだ根に持っているのか？

「こやあ、Aクラストップ10の優等生さんに僕の名前を覚えてもらつて光榮だなア。うふ、僕にはそんな価値も無いぐらいい馬鹿で肩人間なのに、どうしてだらうね？」

「反則した癖に偉そくなことを……！」

「悪いかい？ 勝者が敗者の上に立つ、それは世の中じや常識さ。君は僕に一度も攻撃を当たられないま敗退したいんだ、戦争の勝ち負けに関係なく。なら僕がなにを言つても文句は無いだろう？」

あはは、と笑いを付け足して

木下さんは悔しそうな表情をする

「優子、挑発に乗らないで。」いつの話なんてマトモに聞くだけ無駄よ

「……そんなことは分かつてゐるわよ

でも、相当悔しいみたいだね

あはは、僕に負けた君が悪いんだよ。精々

猛勉強でもするんだね

「二人共、楽しそうだね。ボクも会話に交ぜてくれないかな?」

すると、今度は緑色の髪をした別の女子生徒が話しかけてきた
染めてるの? いや、それよりこの会話を”楽しい”と思つ
君もおかしいと思つけど

「愛子、これの何処が楽しく見えるの?」

「え、違ひの?」

愛子さん(仮) ほんと神経をしてるんだろう?

田の前には学園きつての肩とクラスメイト一人

両者ともとても恨めしそうにボクを見ている

これのどこが楽しそうなんだ?

「ま、いいか。で、この子が皆大嫌いって
言わてる仲野富浪都くん?」

的を得た知り方だね。でも、僕を知らなかつたのか?

「そうだけど。へえ、同じ学年で僕を知らない
なんて、転入生が酷く無知な人なのか?」

「言い方が悪いね、でも確かにそうだよ。

ボクは一年生後半に転校してきた工藤愛子です

一年生後半か…ボクこの学園に居なかつたじゃないか

普通の学校に居て、PTAのお子さんを泣かせたら退学になつたんだっけ？

あはは、あの時は爆笑だつたなア

「うん、」丁寧にどうも。僕は仲野富浪都。親しみを込めてにも「ミ肩とでもシンプルに肩とでも呼んでくれていいよ？」

いつも通りの笑顔で僕は自己紹介をする

僕のその”いつも通り”が気持ち悪いらしいケド

「す、凄まじい自己紹介だね。今時こんなに

自分のことをゴミ肩なんて呼ぶ人は居ないんじゃないのかな？」

その問いに僕はあざ笑つて答える

「あはは、”マトモ”な人はね？ 生憎と
僕は”マトモ”じゃないんだ」

僕は笑顔を絶やさず話し掛けている

笑顔でも話してゐる内容のギャップだからなのか、
工藤さんも少し気まずそうな表情をしてゐる

「じゃあまたね、三人組みさん。精々食中毒者を出さないように頑張るんだよ？あはははは」

最後にもう一度だけあざ笑つて、今度こそAクラスを後にする

視点一 Aクラス

浪都が去った後も、三人はしばらく突っ立つたままだった

あの異様な雰囲気に当たられ、少しボートとしていたのだ

「…相変わらず気味の悪い雰囲気ね。いつまで
経っても慣れやしない」

「元からあんな雰囲気なら、正直引くわよ？　あいつの
子供時代が凄まじく気になる」

「正直に言うと、ボクも彼は苦手かな？　人格とか、
見た目とかじやなくて、なんか…”雰囲気”が駄目だよ」

と、それぞれの感想を述べる

元々お人好しの愛子でさえ、浪都のあの異様な空氣と雰囲気には苦手らしい

視点一 仲野宮浪都

うん、次はどのクラスを苛めよつか？

でも、AクラスとFクラス以外は知り合い居ないしなア

まあいいや。なら上から順番でBクラスに行こうか

本当は一年Aクラスの後は三年Aクラスの先輩方を苛めたかつたんだケド、確か三年にはあの人気が居るよね？ 会うのはちょっと嫌だなア… 正直に言つとあの人はちょっと苦手だしね…

と、考えていた内にBクラス教室の前へ到着した

「（機嫌よー、Bクラス諸君！）」

思いつきつてドアを開け、第一声にそう大声で言い放つ

急にドアが開いて驚いたのか、Bクラスの方々は固まっている

「おやあ、Bクラス変態さんも見えるね。もう

女子制服を着るのは止めたの?」

「なんの用だ、仲野富浪都?」

代表の根本くんは僕を睨みつけながら少しひ聞きかけてくる

僕はなにもしていないだろ? 憎むなら代表や吉田くんを憎んでくれ

「いやあ、ひょっとした嫌がらせかな?」

『ふざけるなお前!』

『喧嘩売つてゐるのか!..』

『いじつちはほんじいんだ!..』

Bクラス全員が僕の目的に怒りを露にした

なんだよ、少しごらい僕の暇潰しに
付き合つてくれても良いじゃないか?

「おやおや、数学得意の長谷川くんも見えるね。
もつ立ち直つたのかい? あはは

僕がこの学園で始めて真面目のテストで潰した長谷川和彦くんまで

見える

でも、彼の周りに生徒が居ないことから、根本くんと同じく信頼とかを失ったのかな？

「黙れ！ お前の所為で俺は幹部としての威厳を失い、友達だった奴等にも怒りの目で見られる！ お陰で俺はクラスじゃ無視されんだ！ どうしてくれる！」

「そんなに僕を怒らなくても良いじゃないか？ 元々は君が僕たちを深追いしたのと、僕の点数を見誤ったその驕りの所為でこんな結末になつたんだよ？ 全部君の所為だから……」

僕は一呼吸置いて、笑顔でこう言い放つ

「『僕は悪くない』」

自分の本心を眞に言い放つ

あはは、啞然としちゃつてゐるよ

”なん……だと……”なんていう漫畫ではテンプレな

啞然の仕方だよ

漫画ネタは結構いっぱい言つ派だよ、僕は？

だつて僕は漫画は結構読むからね。得にジンプが大好きで
ワピスやB-LACは大好きなんだよ
ジンプじゃないけど、他にもマイナーなGt Bacers
やRVEは大好きだよ？

得にRVEはお気に入りの漫画だよ。うん、結構年月が経つた
今でも一番好きな漫画なんだ

おっと、話が逸れたね

僕の発言に激怒している長谷川さんを無視し、僕は再び根本くんと
向き合つ

「ねえねえ、確かに君つてもう代表としての尊厳を失っているんだろ
？」

「…お前には関係ない」

「それに、彼女だった大山さん?とも破局したしね」

「…大山じゃない。小山だ」

ありや、吉田くんがBクラス戦でチラッと言つた名前だから
かなり曖昧になつていたんだよ

「おっと失礼。で、君はその大山さんと再び付き合つ
ために、この召喚大会で優勝すると？」

」の発言に「クッ」と反応する根本くん

でも、僕がまた名前を間違えたことは訂正せれないんだね

「…それがどうした？」

あはは、とても素直な方法だね

力を見せ付けることで自分に従わせる、圧政の典型的な手段だよ

「うん、君のその手段はかなり気に入っているよ。
力を見せ付けることで、自分につかせる。それこそ、
現実社会での現実を表したようなことだよ」

「……」

僕のこの発言には沈黙する根本くん

「でも、その手段だと絶対に”実力”が必要なんじゃないのかな？」

「…なにが言いたい？」

僕が言いたいことが分からぬのか？

「はつきりと言おう、僕が見た限りじゃどれだけ
高得点を出しても君では優勝できないよ

「なんだと…」

「やつきパソコンで調べて分かつたんだケド、あの吉井くんと坂本代表のコンビも出場するらしいんだ」

僕は爆発物処理班だった父さんに似たのか、機械の扱いには長けているんだ

「ツ…！」

苦い表情をする根元くん。やっぱり良い記憶はないみたいだね

「僕は今まで前線に繰り出されてきた所為か、吉井くんの試召勝負は何度か見たことがあるんだけど、あの操作術は天下一品だね。たとえ僕が八百点ぐらい出して逆転されそうだ」

今度試してみようかな？ 八百点程度、世界史か英語で出せそりゃもん

そのためにはいつも以上に真面目にしないといけないケドね

下準備の勉強はしないケド

「それについては否定しない…」

「うん、今の君じゃ確実に負けそうだ」

でも、僕の目的が分からぬ根本くんは不思議そうに僕を見ている

まだ分からないのか？ まったく、鈍い人だなア

「升を数えりか?」

十五問 肩とサボりと暇潰し（後書き）

いかがでしたか？

まさかの根本手助け展開。正直、主人公はこれぐらいすると思いま
した

某過負荷の大嘘憑きの台詞をパクリました。本当にありがとうございます

い

ちなみに作者もRAVEはお気に入りの漫画です。

フェアリー・テイルの作者だと言えば分かりますかね？

↙アンケート結果

待ちに待ったアンケート結果発表です！

え、待つてない？ 冷たいことは言わないでください

そのために、今回は主人公の浪都くんに登場してもらいました

肩「やつほー、台詞の名前の箇所まで”肩”ってなってるほど
の人類最低、仲野富浪都だよ！」

でもそれを否定しないとはさすがですね

屑「それより、さつさと結果は報告してくれ」

へいへい、では、結果発表です

「最も多く投票を頂いたのは…

同点です！」

はい、実は大変なことに、一人の同点が出てしました。

その二人とは、木下優子さんと吉井玲さんです！

屑「なんでこの二人なんだろ？ 木下さんなんて大嫌いだし、後者の人なんか知らないよ」

ちなみにトップ3は以下の通りになりました

一位： 吉井玲 And 木下優子（14票）

三位： 島田美波（5票）

という結果です。ダントツに一位一人の人気が高かったです（笑）

なので、申し訳ありませんがもう一度アンケートを行いたいです

今度は、このトップ3の中から選んでください

一人一票までです。複数の人物に投票した方はカウントしません

肩「では、また次の機会で」

（睡眠）

十六問 肩と園ナリ三途の川（前書き）

かなり雑になってしまった

それに、かなり強引な展開になってしましました

得にあの人との接触で…

では、十六話です

何気いやつてみましたバカテスとです

『学園祭の出し物を決めるためのアンケートに』協力ください
あなたが今一番欲しいものはなんですか?』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

『メント

『姫路さんらしい答えですね。楽しい思い出が沢山できるような
学園祭にできるよう、頑張りましょう』

吉井明久の答え

『カロリー』

『メンター

『「Jの答えに先生は凄く不安になりました』

仲野富浪都の答え

『楽しい思い出（笑）』

『メンター

『（笑）やべ訂正してくれれば良くなんどうナビ……』

仲野富浪都の答え（訂正版）

『楽しい思い出（爆笑）』

『メンター

『やつこつ意味ではあつません』

十六問 肩と岡村と川越の川

とりあえず根本くんはまた今度にしようつか

今後の予定のことを軽く話し合つと、僕はBクラスを後にした

根本くんは自分でテストを受けて好成績を出したって言うから、僕は勉強に付き合つてあげられないけど、別の方法で僕は手助けすることになった

どんな手助けかは、お楽しみだ

うーん、次はCクラスか？

あそこは確かに根本くんの元カノの大山さんが居たはずだ

あそこにも嫌がらせしようかな？

「見つけたわよ…」

すると、突然物凄い握力で僕の肩は掴まれた

僕の肩を握りつぶさんとばかりに込められているその手の持ち主は、声だけで分かるけどね

「いったい僕になんのようつかな、島田さん？」

「島田よー。」

ホールの手伝いを担当することになった、島田さんだつた

「それより、僕になんの用かな？」

「なんの用つて…アンタ、本当に分からぬの？」

殺氣の籠つた目で僕を睨んでいる

あれ、僕はまだなにもしていなのはずだけど？

「分からぬもなにも、僕はまだなにもしていないんだから」

「なにもしていないつて、アンタ……」

益々手の握力を上げる島田さん

つ
て
痛
い
！

「仕事サボつておいて、なに言つてんのよ。」

!

**B i t t e ! H e l f e n S i e m i r ! E s t u t
m i r l e i d !** (お願いだ！ 助けて！ 僕が悪かつた！)

い！ やめや！）

!

D a s c u s a ! D a n o n p i ? ! P e r d o n a m
i ! (謝るから！ もうしないから！ 許してくれ！) 「

「なに言つてるか分からぬわよ！」

あまりの激痛に僕の他国語はかなり混乱している

肩が外れる！

激痛で投げ飛ばすことも出来ない！

「離せええーーー！」

「はいはい、分かったわよ

僕を解放してくれる島田さん

ハアツ…ハアツ…死ぬかと思つた…

「僕の肩を胴体と分別させる氣か！ 何回も謝つたじやないか！」

「最初、ドイツ語はともかく、他のは意味が分からぬわよ！」

クソ、これじゃあ地味に腕が動かなくなるよ

「それより、これお願ひ

ドサッと僕の前に置くのは、大きな袋

中には大量の胡麻や茶葉が入っていた

「これをどうじゅうとへ。」

「材料届けるのがアンタの仕事でしょー。」

「やうだつたつけ？ 悪いけど僕は必要の無い
記憶は無かったことにしているから、忘れていろと想ひよ

「やうだつけ？」

「自分から立候補したんでしょー。」

あ、そつか。うん、そういえばやうだね。

「『メン、ゴメン。うん、じゃあ運んであげるよ。肩が
握り潰されて殆ど動かない重傷を負つてるけど、大丈夫だと思つよ。』
途中で倒れたりするかもしれないけど、なんとか送り届けると思つ
しね！」

だから安心してくれ！ うん、重傷を負つていてる草食系男子の見本
とも

言える僕にこんなに重い荷物を運ばせられて、島田さんも中々良い
性格
をしてるねー。」

色々と言つた後、僕は袋を持ち上げる

「……」

島田さんもそれを無言で見ている

「よこしまつと…」

結構重いね、これ

はつたりのつもりだったけど、これは
ちょっと拙いかな？

幾ら格闘技をやっても、体の弱さは直らないね…

「ちょっと待ちなさい…。」

そのままエクラスへ歩き出そうとする、また止められる

ビンゴ

「それ、ウチが持つから、アンタはもう帰つて」

「ええ、良いの？ でも、これ僕の仕事だしなあ…」

「良じからー、さつやと帰つてー。」

袋を僕から奪い取るよつて持ち上げるとい、そのまま島田さんは歩き
出した

僕はそれを見て密かにガツッポーズ

「頑張つて〜」

あはは、だあまあれたあ〜！

親切心を利用するのは良心が痛むんじゃないのかな?

あ、僕に良心なんて無いか

上機嫌に僕は自分のクラスに戻った

「ちょっと良いでしょ?」

「ん?」

Dクラス辺りまで戻ると、またもや僕は声を掛けられた

声からすると、生徒ではないね。大人の声だ

「誰ですか、貴方は?」

一応、敬語を使っておこづか

「そういうえば貴方は今年からの編入生でしたね。私はこの学園の教頭、竹原です」

男性は僕にそう挨拶してきた

「教頭、ねえ…僕になんの用なんだろ?」

「そんなお偉いさんが僕になにか用ですか? 大方教頭は学校の評判を守るために、『ミリ層である僕を退学にでもしたいのですよ?』

普通はそういう考え方だよね

教頭なんて偉い人が僕に用事なんてあるわけ無いし

「退学? とんでもない。私は貴方にある頼み事をしたくて接触したのです」

僕に頼み事?

「頼み事? なんでしょう?」

「これは頼み事というよりも依頼なのですが、貴方のコンピューター操作技術は知っています」

ああ、学園のデータを荒らしまくったからね

僕に必要な情報は無かつたけど

ま、用心に越したことはない

「それがなにか?」

「いえ、ただ、貴方にはあることをしてもらひたかったのです

「あること?」

「はい、貴方のハッキング技術を買ってでの依頼です。
報酬もちゃんと払いましょう」

僕のコンピューター技術を買って、か…

それに報酬も…

自分で分かりづらい僕は邪悪な笑みを浮かべていると思う

多分、漫画だと”ニヤ”って効果音が出ているだろう

「…詳しく聞かせてくれませんか?」

Fクラスに戻ると、かなり作業が進められていた

既に出来上がっている試作品の団子も幾つか見える

いやあしかし、教頭も中々凄い人だね。僕、
あの人は気に入つたよ

報酬もそれなりに良かつたし、傭兵っぽいことしてて本当に良かった
「ん、なんだ仲野宮か。役立たずのゴリが、今まで何処に行つてた
んだ?」

誰かと思い僕を見上げたら、代表は確認するや否や再び寝転んだ

「温かい挨拶を有難う。お、これはなんだい?」

みかん箱には一つの団子が置いてあった

「ツ…! わ、お前にやるよ。俺はもう食わねえから」

一瞬嫌な表情をした代表だけど、なにがあったのかな?

「本當か? いやあ、僕は甘いものが大好きでね。遠慮なく頂くよ」

胡麻団子を拾い上げ、一口で飲み込む

「うん、外はバリバリ。中はネバネバ。甘過ぎず辛過ぎず、
苦過ぎる味わいが口いっぱいに広がつて…」

解説していると、僕は気付いてしまった

「ぐッ…。」

その瞬間、僕の意識は途切れた

視点一 坂本雄一

「ぐッ……」

逝つたか……さまあみる、仲野富

「ねえ雄一？」

「なんだ明久？」

「ここに置いてあつた姫路さんの団子を知らない？ 今の内に
処分しておきたいんだけど……」

それなら既に処分済みだがな

「処分はもう済んだ」

「済んだって……つて浪都！ 何で浪都が倒れているんだ！？」

“ぐつやうりアイシはくたばつたらしこ

「姫路の”アレ”を全部一口で食いやがったんだ。だから
処分済みって言つただろ？」

「なにふざけたことを！ それは人体が耐えられる域を超えてるじゃないか！」

なあに、流石に十分経てば復活するだろ

「つッ……」
「だ？」

俺と明久が騒いでる所為でおきたのか

仲野富も復活が早いな

「浪都！ 大丈夫なのか？」

「ん？ 大丈夫だけど…夢の中で僕の従兄に会つたよ。川があつて、その向こう側から手招きしてたけど…」

「その川は渡るな！ 渡つたら戻れなくなつたぞ！」

完全に三途の川だな。従兄は知らねえが

「つッ… 今日はちょっと気分が悪いから早退するよ…」

へ、ざまあみやがれ

「雄一もなに寝てるの… 後一步で浪都が

あの世で従兄さんと暮らすことになつたんだぞ…」

「アイツのことなんざ知つたこいつちやねえ。それより、

召喚大会はどうするんだ？」

俺たちは絶対に優勝しなくちゃいけねえ

「そりや、優勝を狙おうよ？ そうすれば、姫路さんのお父さんも見返せるしね！」

「そうだ。俺たちは絶対に優勝しなくちゃいけねえ。翔子にあのチケットは渡さん！

あのペアチケットが翔子の手に渡れば、お終いだ

俺の人生も、アソツの手に渡っちゃまつー

絶対に優勝してやる……

姫路のためにも、そして……

俺の人生のためにも……

視点一 仲野宮浪都

あの悲劇の一回から一日、僕は奇跡の回復を遂げた

何度も三途の川を渡りそつになつたし、従兄の誘惑にも負けそつとなつた

だが、僕はまだくたばれない！ 全国の幸せ者を不幸にするまで、
僕は死はない！

とまあ、最低な台詞を格好良く書いてみたけど、学校に行かないと

「太郎も良い子にしてるんだよ～」

ワンと返事をした後、僕は家を出る

「」機嫌よ一監さん。結構良い感じに改裝されてるじゃないか

清涼祭初日の朝、僕がFクラスの喫茶店に入ると、かなり改裝されていた

みかん箱は布で被せられてテーブルっぽくなつていて、
本格的な胡麻団子とお茶の匂いが漂つていて、

うん、他の出し物に引けを取らないと思つよ~。

「あれ？ 代表ご一行様が見えないけど？」

「……召喚大会が始まるからそつちへ向かつた」

僕の疑問にムツツリーくんが答えてくれる
もつこんな時間か！

僕も喫茶店から出る

校舎の庭に作られた試合会場

そこには見物人で溢れていた

軽く見積もつただけで数百人は居るんじゃないのかな？

そこまで戦争が見たいか…

『これより、召喚大会を開催したいと思います』

やっと始まつたか

『まず始めに、個人戦を開催したいと思います。しかしですね、純粋な試合戦争がご覧になれます』

チームワーク関係無しの純粋な勝負だからね

『第一試合！ 赤コーナー…

Bクラス、長谷川和彦…』

第一試合最初の選手はさぞやら數学お得意の長谷川らしき

これで汚名返上っていうわけか？

『青コーナー…』

でも、運が悪かつたね

『Fクラス、仲野富浪都！』

僕も出場しているんだよ

十六問 肩と園子と三途の川（後書き）

いかがでしたか？

はい、教頭との対談がかなり難になってしましました

ですが、ちゃんと介入させるための良い案が思いつきませんでした

そして、主人公のじでかすことはかなり肩になるでしょう

一体なんのために召喚大会に出場したのでしょうか？

アンケート途中経過

木下優子…十七票

吉井玲…十一表

島田美波…一票

相変わらず木下姉と吉井姉が人気です（笑）

言い忘れましたが、今回のアンケートの締め切りは九月の終わりまでです

（睡眠）

十七問 肩と一回戦と姉弟／兄妹（前書き）

書きたくなつて書いてしまい、連続投稿になりました

今回はまたもや主人公のことを少し明かします

とは言つても、後半にですけど

いつもとは少し長いです

確か、9000文字ぐらい行つてました

一話に詰め込み過ぎてこると思ひますが…

それでは、十七話です

何気尼やつてみたバカテスト

『国語のボーナス問題です。解答は自由です
短歌を作つてください』

仲野富浪都の答え

『ホトトギス

鮮やかであり

華やかだ

旨を癒し

木々を飛びぬく』

教師のコメント

『おや？ 珍しく真面目に答えてますね。
でも、ホトトギスにそんな表現が当てはまるとは
思いませんが…』

十七回 肩と一回戦と姉弟・兄妹

『青ローナー、Fクラス仲野宮浪都!』

解説がそつ呼ぶと、僕は階段を上がりて召喚フィールドに立つ

Fクラスの人たち、特に吉田くんが予想外の出場者に驚愕している

あはは、ビックリしてるー。

まあ、僕もそれと回じらい出たくないんだけど、仕事だからね

「貴様、仲野宮!」

「久しぶりだね~長谷川くん。あ、昨日会っていたか!

『メンメン、僕は必要の無い記憶は無かつたことにしてるから、
忘れちやつてた!』

僕と向き合つと、憎しみの含んだ目で僕を睨んでくる長谷川くん

そんなに睨まないで欲しいなあ

せめて名字を覚えていてあげただけラッキーと思いたよ

「ビームで俺を喰めてやがるー、へ、その余裕

があるのも今の内だ! 前をぶつ潰して、汚名返上させちまひう

!』

「やれるものならやつてみなよ。なら君にもつ一度

思い知らせてあげるよ、肩の戦争をね…」

『では、召喚大会個人戦第一試合、開始です！ 科目は…』

会場に設置されてある巨大モニターにルーレットが移され、これが止まると科目が決定する

いわばランダムで科目が決定される

そして、ルーレットが止まる

『…現代国語です！ では、開始してください…』

げ、僕の苦手科目じゃないか

「良かつたね、僕の苦手科目で。この運の良さでこのまま勝つと良いね」

「嘗めたようなことを…サモン…」

「あはは、サモン」

僕たちの点数が表示される

『Bクラス長谷川和彦 現代国語173点』

さすがBクラス、一科目は150点近い

Bクラスの平均点は150点以上で、その上のAクラスは200点だ

だから、長谷川くんの点数は数学以外は普通つてことになる

数学が得意なだけで幹部にされたのかな?

そして、しばらくしてから僕の点数も表示される

都浪宮野仲入ラクエ

「なにイイイ！？？？」

僕の点数を見て長谷川くんが会場の全員が驚きの声を上げる
ある意味凄い点数だろ、コレ？

『なんと、Bクラス相手に仲野宮選手は僅か17点です！

解説の人も驚いている

僕の点数は学年ゼンジウカ学園最下位なんだよ？

通常は平均点は20点前後、総合点数は僅か304点だ

「お前、ふやけているのか！」

「ふやかるもなにも、僕が毎回眞面目にテストを受けるとは限らないよ？ いや、寧ろこうこう点数の方が断然多い」

観客席に座っている人は皆呆れたり、がっかりしている

初戦は観客を引きつけるための、言わば”盛り上げ役”で、かなり大事なんだけど、こんなショボイ点数を見れば誰でも落胆するよね

「うっ、どうやら本気らしいな」

そう言いながら、長谷川くんの召喚獣が僕に迫ってくる

武器は通常通りランス

僕の召喚獣も銃以外はいつも通り

今回の銃は前回長谷川くんと戦った時と同じ短機関銃だ

僕の召喚獣の武器は、テストの点数によつて変化する。例えば十点台だと拳銃だし、高い点数だと重機関銃やマシンガンも貰える

つまり、点数が高ければ高いほど良質な武器を貰えるし、低ければ低いほど悪質な武器になるんだ

殆ど賭けみたいなものだよ

「でも、操作技術に点数は関係無いんじゃないのかな？」

振り上げたランスをかわし、腕を掴んで捻り上げる

召喚獣はランスがランスを離すと、僕はすかさず懐へ入り込んで胸倉を掴む

そして、一気に地面に振り下ろす！

『Bクラス長谷川和彦 現代国語152点』

「そういえばそつだつたな。お前、柔道知ってるんだつけ？」

「そうだよ。こんな重要なことを忘れるなんて、君はまったく進歩していないね。少しがつかりだよ」

「フ、ほざけ！」

ランスを拾い上げ、再び向かってくる長谷川くん

前回と違つて、今回はそつ簡単に挑発に乗つてくれないね

厄介な…

「ワオ、おつとつと、フツ！」

僕は攻撃をなんとか避けたり盾で防いでいるけど、怖いなあ。点数が低いだけあって一撃でも当たるとお終いだから

今日は勝たないと仕事でないしなあ

「こやあ、ちよのこひよひ。弱すがゆよ、君」

「なんども言へー わつお前の挑発なんかには乗らなー。」

ちっ、面倒な…

それに、短機関銃を使つても頭に当てる以外では効果は薄そつだ
し、

当てるのも容易くは無いと思つ

銃の知識はあっても、それを使いこなせないのは問題だなあ…

そもそも僕はそこまで射撃は得意では無いし、どちらかと言つて
手かな？

吉田くんを狙撃した時もジッとしている吉田くんを外したし

「でも、君こそ攻撃を当たないと話にならなーなあ」

「やの内一撃くらわせてやるよ。ま、やの一撃で終わらせる
だな」

よく分かつてゐるじゃないか

「お前は急な出場で勉強もしてねえらしくな。
そんな奴に、俺は負けない！」

頼もしいねえ

こういうのを主人公キャラって言うんだっけ？

一度負けても、努力してその人に打ち勝つ

なら僕はやられ役の嫌われ者か？

希望のない名無し敵キャラ…ぴったりじゃないか

「ちょ、うわ！　ストップ！　危ないから…」

途端に攻撃するスピードが早くなる長谷川くん

急激な上昇に多少は驚いてるけど、まだ問題ないね

かわせるレベルだ

すると、疲れたのか召喚獣の動きが遅くなる

チャンス！

僕はそのまま長谷川くんに接近し、盾で殴りつける

でも、それだけでは止まらず、むらには盾を置いて、腰を掴んで、そのまま全体を捻つて投げ飛ばす！

『Bクラス長谷川和彦 現代国語107点』

払い腰、僕が得意な業の一つだ

慣れればとても使い易いし、便りになるよ

「へッ…ハニみたいにこちゅじまかと…鬱陶しい…」

「こな点数じゃつづきがつ削つていくしかないだらつへ。」

「それもわうだな」

少し感情的になりかけたけど、直ぐ冷静さを取り戻す長谷川くん

ホントに挑発に乗らなくなつたね、少し残念だ

試合戦争をする時は相手を挑発させて自滅させるのが
僕の楽しみなのに…これじゃつまらないよ…

「へ、点数と腕輪やえ無けりや大したことねえな！」

「いや、それ普通なんぢやないのかな？ 点数で攻撃、防衛、
体力も決まるから、点数が低いと必然的に僕は”大したことない”
んだ」

操作技術で乗り越えることも出来るけど

吉田くんが良い例だ

十倍も点数差を付けても巧みの操作技術で毎回ひっくり返している
からね

僕でもあの操作技術にはお手上げだよ

「まあ、ここまで諂ひめられるのも嫌だし、それなら真面目にじょうつか」

「このまま持久戦になると間違いなく僕が負けるしここはお遊び半分で勝ちたかったけど、どうやらやつは行かないみたいだ

「論理的に君を殺してあげるよ」

視点一 長谷川和彦

「論理的に君を殺してあげるよ」

そう仲野富は俺に向かふ

その言葉に俺は思わず身震いをしてしまつ

なんなんだよ… ここでのこの『霧因氣は』…?

こいつのアソシの”気持ち悪さ”ではなく、

「こいつの雰囲気から”恐怖”を感じられる

俺はアイツを恐れていますのか？

「まあ、殺すと言つても君の召喚獣を戦死させるんだけどね」

相変わらず気持ち悪い笑顔だが、言つてることが残酷だ

「う…！ やれるもんならやつてみるー！」

なんとか恐怖を薙ぎ払い、俺はアイツに向かっていく

ランスを心臓に突き刺す

だがそれは当たることなく、空氣を通るだけだ

そのままランスを下へ振り下ろすが、
盾で防がれる

そして、あいつはランスを掻むと…

「な、なに…？」

俺の召喚獣を「ランス」と持ち上げやがった…

「知ってる？ 召喚獣って点数が一桁でも
ゴコラ並みのパワーを持つてるんだよ？」

… そりか

例え点数が高くても、召喚獣の腕力は強いんだ

「いつの一柄でもかなりのパワーを持っている

「ぐッ…」

あいつはそのまま召喚獣を投げ飛ばした

『Bクラス長谷川和彦 現代国語91点』

点数の減るペースこそ遅いが、
確実にダメージを与えできている

それに比べて俺は一撃も当たられていらない

アイツの点数は僅か17点なんだ！

一撃さえ当たれば決まるんだ！

だが、どれだけ攻撃しようが、どんな

方法を取ろうが、俺の攻撃は一度もアイツに当たらない

盾で防がれたり、単純に受け流されたり、逆に投げ飛ばされる始末だ

「クソ！」

冷静になれ、冷静になれ俺

アイツの点数は17点なんだ

一撃をうけたれば俺の勝ちなんだ

「（スー、ハー）」

俺は深呼吸をし、全神経を仲野富に集中をむか

よし、行ける！

ランスを振り上げ、アイツに向かつて振り下ろす

「うッ…！」

当たった…当たった！

「当たった！ 俺の勝ちだ！」

ランスはアイツの頭部に見事命中していた

勝ったんだ！ 俺はついに勝ったんだ！

「ざまあみろ、仲野富浪都！ 俺の勝ちだ！」

だが、アイツは無言のまま動かない

ククク、衝撃のあまり言葉も出ないか

「束の間の喜びは済んだかい？」

え？

なにを言つてやがる？

俺の攻撃は、お前に当たったんだぞ？

Bクラスレベルの召喚獣の一撃が、十点の召喚獣に当たったんだぞ？

そんなの、戦死に決まっている

「もつ一度良く僕の点数を見て」じりん

奴の点数を確認する

『Fクラス仲野富浪都 現代国語2点』

「2点……だと？」

馬鹿な…なぜアイツの点数は残っているんだ…？

俺とアイツでは十倍も点数の差があるんだぞ！

なのになぜ一撃で仕留められないんだ！？

「あははは、なに困惑した顔になつてゐるんだ？」

「なぜ貴様の点数は残つてゐるんだ！　俺とお前じや一元々の点数は十倍も差があるんだぞ！　それほど差があるので、なぜお前は戦死していない！」

そしたら、仲野富は困惑した表情になつた

「”元々の点数が十倍もの差？”　一体どこからそんな寝言を教わつたんだ？」

…俺が間違つてゐるとでも言ひのか？

「僕の点数が表示された時、僅かだけど聞があつただろ？
それは何故だか分かるか？」

確かに、俺の点数が表示された時、その数十秒後にこいつの点数が表示された

それがどうしたんだ？　単にシステムが遅かつただけなんじやないのか？

「それがどうしたって言つんだ！」

「どうした、つて…」

すると、仲野宮の召喚獣は邪悪な笑みを浮かべながらポケットに手を突っ込む

そして本人もとても邪悪な笑みを浮かべている

「いじつ」とぞ

奴はそう言つと、後ろを向いてスタスターと俺から離れるように歩き出した

「爆破」

「え？」

本当に一瞬だった

アイツがあの単語を言い放つと、俺の周りが大爆発を起こした

それも、アイツが言った直後、周りの地面が少し間を開けて一度

づつ

大爆発を起こしていた

『Bクラス長谷川和彦 現代国語〇点』

俺の…負けか？

「馬鹿な！？ なぜお前は腕輪の能力を使える！？ お前の点数は僅か17点、なのになぜ腕輪の能力が使える！？」

「まつたく、うるさいなあ。いつたい何時誰が僕の”元々の点数”が17点だって言つたんだよ？」

どういう意味だ？

「つまり、僕の最初の点数は17点なんかじゃないんだ。最初の点数の表示に間があつただろ？ その時に僕は自分の点数を17点まで下げたんだ」

自分の点数を17点まで下げるだと…？

まさか…！

「そう、僕は開始早々に腕輪の能力を使用したんだよ

それでアイツは自ら点数を減らし、自分の元々の点数が低いと俺に油断させ、これをするタイミングを狙っていたのか？

アイツが今まで発していた言葉も、全て俺が

“一撃決めれば終われる”という自身を持たせ、油断させるため…

それどころか、アイツは攻撃する時は手加減をして、俺の点数を少しずつ減らすことで錯覚をさらに強めたのか…

奴、仲野富は、俺だけではなく、この会場の観客全員を騙していくんだ：

「今回使用した超小型爆弾の数は225個。後は自分で計算してくれ」

それだけ言い残し、仲野富は会場を去る

そしてその瞬間、会場から歓声が爆発した

『…………』

『すげえ！ アイツ、本当は凄かつたのか！？』

『俺でも気付かなかつたぞ…』

『あんな奴が文月に居たのか！』

反応は上々

しかし、誰一人として分かつていないことがある

この作戦は、一見とても頭脳的で策略的だが、ある意味無茶過ぎる

自らの点数を極限まで削ることで、その大きな見返りで勝利することが出来たが、逆に考えれば点数を削ったことで戦死する危険も限りなく高くなるんだ

彼ら元々の点数が高くて、僅か17点しか残らなかつたら一撃でなくとも一撃で決められていた

一撃決めるのはそう難しくは無い

つまり、この作戦は仲野宮の高度な操作技術があつてこそ、成し遂げられるんだ

俺は改めて感じた

こいつは霧島や久保や長瀬より間違いなく…

”本当の天才”だつてな

視点一 仲野宮浪都

いやあ、派手に決められたな

まあ、今回の作戦は正直無謀過ぎたけど

開始早々爆弾を25個も地面に接着させておいたら、
残り点数が17点になっちゃったんだよ

長谷川くんが召喚獣操作が苦手で助かったけど、普通の人だったら
間違い無く負けていたね。嫌がらせのつもりでこの戦法を取つたけ
ど、

二度としたくない。結末だつて”爆発させる”っていうワンパター
ンだし

ちなみにこの大会のためのテストでは、僕は
とあることをやつたんだ

僕にとっては必ずやつてはいけないタブー

そう、僕は、”テスト勉強”をしてしまったんだ

我ながら恥と思つ

この大会に出ると決まった夜、僕は数年ぶりに参考書を取り出し、
真面目に勉強した

お陰で点数はかなり良くなつたけど、それでも僕の学歴には支障だな
ちなみに現代国語は一番悪い点数だったよ

やつぱり国語は苦手だなあ…

『これにて、一回戦を終了したいと思いますー。』

どうやら僕の勝負と同時に他の一回戦が開始されたらしい

まあ、大規模に作った会場だ、一度に何戦も出来る方が得だろう

『現在の勝者は、このようになります!』

モニターに表示されたのは、一回戦突破者の名前だった

『一年 F クラス	仲野富浪都
一年 C クラス	遠藤浩二
三年 B クラス	小林優奈
一年 A クラス	長瀬流歌
三年 B クラス	徳田一樹
三年 A クラス	琴吹雪音
一年 C クラス	堺健太郎
一年 D クラス	平賀源一

へえ、意外と三年生も多いね

受験勉強で大変とは思っていたけど…

そして、勝者リストの中になぜ居るんだ長瀬?

カンベンしてくれよ… A クラスだから絶対勝ち抜いてくるし、
僕と戦うのは確実になつたじゃないか…

ま、その時は瞬殺するだけ

抵抗させる暇も無く、その眉間に鉛弾を撃ち込んであげるよ

それに、三年生の中にもあの人居るしね

なぜ僕は知り合いとの遭遇率が高いんだよ！

よりもよって何であの入なんだ！？

はあ、やっぱ召喚大会、棄権しようかな？

でもそれだと仕事も出来ないし、報酬も貰えないし…

だあもうこうなつたら自棄だ！

あ、そういうえば根本くんはどうなつてるかな？

根本くんと大山さんは協力したつもりだし、効果はあるかな？

チーム戦での結果発表を見てみると、確かに根本くんの名前があつた

彼も勝つてくれたんだ、うん、手助けしたし、当然かな？

よし、喫茶店に戻ろうか

僕も丁度喉が渴いていたところだし

「やつほー、畠さん。吉田くんに代表もあめぐだとう」

「浪都もね。出場してるのは思わなかつたけど……ちなみに僕の名前は吉井だからね？」

喫茶店には既に一回戦を終えた吉田くんペアだった

でも、チーム戦は流石にまだ全組終わっていないね

それほど会場はデカくないから、まだ根本くんと吉田くんのペアしか終わつていなかつた

その証拠に、まだ島田さんと姫路さんのペアが帰つてきていない

「お、それ胡麻団子かい？ 好きなんだよねえ、甘いもの。頂いても良いかな？」

代表が座っているテーブルに団子が一つ置いてあった

誰も食べないみたいだけど、お腹いっぱいなのかな？

「あ、浪都。それはやめておいた方が…フゴッ！？」

吉田くんがなにか言おうとしたが、代表のボディーブローが炸裂した

「遠慮せず食え」

代表が僕にものを勧めている？ 今日は嵐でも来るのかな？

「ならお嘗葉に甘えて」

僕は団子を手に取り、一口かじる

ふむふむ…

「外はネバネバ、中はドロドロ。甘過ぎず辛過ぎず苦過ぎず、酸っぱ過ぎる味わいがとても味わい深くて…」

そして、異常に気付く

「ぐッ…！」

一瞬意識を失こうになつたが、なんとか持ちこたえる

「なに、姫路の料理を食べてくたばらないだとー？」

「君は僕をどうするつもりなんだー！」

「これは姫路さんが作ったのかー？」

なんて強烈な…

不味いとかそういうのじゃなくて、物質的に”ヤバイ”んだよ

この風味は…科学薬品か！？

「浪都！ 大丈夫なのか！？」

「なんとか死なずに済んだわ…」

『ガラツ』

すると、突然Fクラスの喫茶店のドアが開いた

入って来たのは二人組の女子生徒

一瞬姫路さん「ゾンビだと思い無視しようとしたら、違うのにすぐ気付いた

なぜなら…

「浪ちゃん……ん！？」

一人が僕に向かつて突っ込んで抱きつこうとしているからだ

「フン！」

広げている腕を掴むと、相手が突っ込んでくる力を利用して地面へ叩きつける

パワーアップバージョンの一本背負いだ

「いつたあーー！」

痛がつていてるが、あれほどの威力の背負い投げをくらつておいて”痛い”で済ませる君の方がおかしいんだけどね

「な、なんだ！？」

わけも分からず他の人たちは混乱している

「か弱い女の子になにするのー！」

「そんなのどこにも見当たらぬけど？」

「ひつビーー！」

真っ黒の短い髪が特徴的な年下の女子生徒

「悪いね浪都、久しぶりに会つて急に迷惑掛けて」

「別にいいぞ、これぐらいは予測の範囲内だしね

もう一人は僕たちと比べてかなり大人びた、おそらくは年上の女子生徒。やれやれと言わんばかりに首を振つていて、その長い黒髪が揺れている

「誰だ…この一人？」

代表がかなり困惑している

そりや そうだよ。見ず知らずの女子生徒が一人入ってきて、しかも一人はいきなり肩として有名な僕に抱きついてきたんだから

「紹介するよ、代表。この一人は…」

僕がこの一人を自己紹介しようとすると、ある人物によつて妨害される

「おい坂本、一体なんの騒ぎ…なにイーーー?」

厨房から戻ってきた須川会長くんだった

『諸君、ここはどーだ?』

『最後の審判を下す法廷です!…』

『異端者には?』

『死の鉄槌を!…』

『男とは?』

『愛を捨て、哀に生きるもの!…』

『よろしい。これより異端審問会を開く』

須川会長くんが僕を確認するや否や、ホールと厨房から突如
数十人の教徒たちが溢れ出てきて、僕を包囲する

F F F 団の制服？を身に纏いながら

「ほんにちは須川会長くん。僕になにか用か？」

『惚けるな！ 横溝、罪状を述べよ』

『はい、須川会長…』

須川会長くんが隣のリーダー格の生徒にそう尋ねる

『どうやらこの”横溝”って生徒が副会長なんだね

『ええ、罪状：被告、仲野宮浪都（以下、この者を”肩”と称
す）は、

召喚大会出場後、異端審問会二級審問官であつながら、Fクラス喫
茶店内で一人
の女子生徒との接触を果たしています。これは明らかな異端行為と
みなし、十分な調査
を行つた後に、肩に対してもしかるべき処置を…』

『御託は良い、さつあと罪状を述べよ』

長々と罪状を語る横溝くんに痺れを切らしたのか、須川会長くんが
急がせる

『女子生徒の知り合いが居るのが羨ましいのですますー。』

『うむ、實に分かり易い罪状だ』

なんという嫉妬心なんだろ？..

「あ！ そりいえば須川くんがさつき女子に告白していたね」

またもや仲間割れ作戦

『 『 『なこイ！……？？？』』』

「なッ！？ ちょっと待て！ 僕はずつと厨房で働いていたんだぞ！」

告白できるわけがないだろ？..」

僕のいきなりの発言に須川会長くんは驚いているが、正論を言つ

でも、そんな手が僕に通用すると思つてこるのか？

「でも、情報によると須川くんは団子を運ぶ際、
秘密裏に女子生徒に電話番号とメールアドレスを渡していらっしゃ
！」

嘘だよ

料理を運ぶのはホールの仕事だし、須川くんは厨房で手一杯だから渡すのは不可能だよ

でも、頭に血が上っているFFF団にそんなことは思いつかず、必然的に…

『須川ア！… 貴様アアア…』

全員が激怒した

「待て！ 眙まるな！」

だが、須川くんの言葉に聞く耳を持たず、FFF団全員が鎌などを須川くんに向けていた

『貴様ア、会長でありながらの異端行為！ それがどれほど愚かな行為か、貴様の消し飛んだ体に叩き込んでやろうつー。』

「俺の体を消し飛ばすのが前提なのか！？」

全速力で須川くんは喫茶店を出て行き、その後をFFF団員が追う

僕は完全に空氣だ、作戦成功

「さて、邪魔者も居なくなつたね」

改めてやっと自己紹介が出来る

「クスッ、浪都のクラスメイトは面白い人ばかりだな

「これでも苦労しているんだよ…」

年上の女子生徒が微笑する

「浪都、この人たちは誰なんだ？」

FFF 団の登場で多少の落ち着きを取り戻した吉田くんが訊いてくる

「紹介するよ。この髪の長い方が琴吹雪音で、僕が投げ飛ばしたのが琴吹彩音。

僕の実の姉と妹だ

「なに――――――――――――――――? ? ? ? ? ?」

僕の発言に吉田くんと代表が啞然としている

はあ、僕としては会いたくなかったんだけどねえ……

こんな血の繋がつただけの”他人”には
…

十七問 肩と一回戦と姉弟／兄妹（後書き）

いかがでしたか？

何故か長谷川くんが良い勝負をしてしまいました

でも、主人公の勝ち方がワンパターンな気が…

そして、主人公の姉と妹の登場です

プロフィールに追加しておきます

名字が違う理由など、詳しくは次回にて

ちなみにバカテストの意味を分かつた人は凄いと思います

途中結果

木下優子	十八票
吉井玲	十二票
島田美波	一票

そこまで変わっていません

ちなみに前回締め切りは十月の終わりと書いてしまいましたが、
申し訳ありません、打ち間違えです

締め切りは九月の終わりになります

（睡眠）

十八問 肩と姉とひつじやな姉弟（前書き）

書くことがない…

キングクリムゾン！

では、十八話です（笑）

バカテスト

『次の英会話文を訳しなさい

This is the bookshelf my grand
mother used』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が使っていた本棚です』

教師のコメント

『正解です。一言一言が上手に訳されていて、完璧です』

吉井明久の答え

『これは僕の本棚が使っていた祖母です』

教師の「メント

『 答えの正解不正解以前に、自分で訳した文を良く読んでみましょ

う』

仲野富浪都の答え

『

・

教師の「メント

『 嫌がらせのつもりですか?』

ちなみに前回のバカテストの意味のヒントです
各行の頭文字を下から読んでみましょう

十八問 肩と姉となりつけめぐらやな姉弟

「僕の実の姉と妹だ」

「「な」「イイイ！－！？？」」

代表と吉田くんは驚愕の声を発する
そんなに意外なのか？

「初めまして。君たちが私の弟の友達なのか？」

雪姉さんが吉田くん達にそう訊く

あは、友達じゃないよ。良くて他人、悪くて
抹殺対象だ。僕がその対象だけどね

「違うよ雪姉さん。この二人はただのクラスメートで、
憎まれるべき存在なんだ。友達じゃない」

「お前も相変わらずなんだな、少し心配になつてきただぞ」

「人はそう簡単に変わらないよ」

そして、ある意味”しつち”はまったく変わっていないからね

勿論、悪い意味で

「浪ちゃん……ん……！」

ମୁଦ୍ରଣ

再び襲い掛かってきた生物をスキップして避ける

君もまたまた甘いね

「なんて過ってるの！」

「避けないと痛いんだよ、彩の攻撃は」

さつきから襲い掛かってきたのが、僕の一つ下の妹、彩音だ。彩って呼んでるケド

”童”を付けるとややこしいんだね

ここで我が家の名前の決め方を教えてあけよ。

我が仲野富家では名前を二ける時に幾つか決まり事があるんだよ

男には”都”を、女には”音”を最後につけるんだ

僕の名前は”浪都”、父さんの名前は”零都”、
お祖父ちゃんの名前は”和都”、従兄の名前は”海都”、
叔父さんの名前は”啓都”ってなっているんだ

そして、僕の母さんの名前は”静音”、姉の名前は”雪音”、妹の名前は”彩音”、お祖母ちゃんの名前は”莢音”、そして海都さんの妹、つまり僕の従妹の名前が”朱音”となっているんだ

皆統一性があるんだ

元々は仲野富家と僕の母さんの家での決まり事を合体してこんなにややこしくなったんだ

で、もう皆についてるから言つのが面倒になつて、今では”音”を抜いて呼んでるんだ

「ほら、彩音。浪都の憎まれ対象がビックリしてるじゃないか。ちゃんと血筋[ひ]紹介しないと駄目だろ?」

「あ、うん! そうだね! ボクは浪ちゃんの妹の彩音です! 今は高校一年生です! よろしくお願ひします!」

「そして私は浪都の姉の雪音だ。いつも弟がお世話になつてるね

行儀良く自己紹介する雪姉さんと違い、彩は

元気良く似非敬語を使って自己紹介する

物凄い姉妹の差だね。ここまで姉妹の中で違いが生まれるもののか?

それでも…

「雪姉さんの男の子らしい口調はともかく、彩は

まだその癖を直していないのか?」

「癖？ なにが？」

「うやら氣付いていないらしい

彩は昔からお兄ちゃんっ子で、いつも僕の真似ばかりするんだ

そのせいだいつしか、僕と同じ話し方になくなってしまっていた

その証拠に、一人称も未だに僕と同じになってるしね

本人はまったく気付いていないらしいけど

「こつもいつも浪都浪都って言つてるんだ。正直とても苦労しているんだよ……」

はあ、と溜め息を吐く雪姉さん

苦労しているなんだね

「！」苦労さん

「代わってくれ……」

「その瞬間僕の自由が消滅する」

「でも着こなしだよ

二人共文月に通つてゐるのか？」

「今年入学した彩音はともかく、私は一年の時から
ここに通っていたぞ？ 浪都がただ来るのが遅かつただけさ」

へえ、知らなかつたな

「ここに通つていることは、同じ町に住んでいることだろ？」

それなのに一度も会わないつて、少し凄いんじやないのかな？

「浪ちゃん全然ボクたちに会つにきてくれないから、自分達で浪
ちゃんの
クラスに乗り込んじゃつたじゃないか！」

「その呼び方は止めてくれ。イライラするんだよ」

わざわざからわちゃん付けで何度も何度も…

「浪ちゃんは浪ちゃんだよー。」

はあ、いつも時は頑固なんだかい…

「浪ちゃん？」

今まで口を開いていなかつた吉田くんが訊いてくる

よひやく状況を飲み込んだのか？ 代表は未だに固まつてこるけど

「彩が僕をこう呼んでいるんだよ」

不本意だ、と付け足す

「だつて、見てよ」の浪ちゃんの顔一男の子なのに
凄く可愛こよね！これは浪ちゃんと呼ばばずには困られないよー。」

僕の「コンプレックスをやつ堂々と言こやがつて…

「彩は少し落ち着」づぜ？僕がかなり迷惑しているんだよ

「ボクが元気潑刺で良かつたじやないか！」^{ヒトコト喜びつけ}

本当に話し方が僕と同じなんだね、話し合つてると気持ち悪いな

「やついえぱ、雪音先輩？」

「ん？ なんだ？」

吉田くんが雪姉さんに話しかける

琴吹だと一人居るからややこしいみたいだね

「どうして浪都と名字が違うんですか？ 本当に姉弟なら、
雪音先輩の名字が”仲野宮”になるか、浪都の名字が”琴吹”
になるんじゃないんですか？」

ああ、そんなことか

「僕たちは一緒に暮らしていないんだよ。小学校六年生
になつた時、僕は一人暮らしになつて、雪姉さんと彩音が
叔父さんに引き取られたんだ。だから”仲野宮”じゃなくて、
叔父さんの名字の”琴吹”を名乗つているんだ」

母さんの元々の名字は琴吹で、その母さんの
お兄さんに引き取られたから名字が仲野富から
琴吹に変わったんだよ

「引き取られた？ ビックリ？」

「私たち仲野富家には複雑な事情があるんだよ。
詮索しないでくれれば嬉しい」

雪姫さんって彩と違つて、凛々しくなつてるね

男勝りといふか、そんな感じだ

僕みたいな草食系男子じゃなくて、皆を仕切るコーダータイプ
まさに底辺の存在である僕とは正反対の存在だ

「え、あ、うん」

吉田くんも空氣を呼んだみたいだね

それにもしても、吉田くんは余計な詮索をしなくて助かるよ

他のFクラスの人たちだと遠慮なく訊いてきそうだし

よしー 今日から吉田くんは、あきら 明彦くんに昇格だ！

ちなみに次の昇格では名字を正しく書つてあげるよ

「明彦くんは見切りをつけるのが上手いね」

「やつとが前で呼んでくれたと思つたが、今度は名前も間違えて言ひのかよ！ われなら名字を正しく呼んでくれー！」

そんな一階級特進なんて駄目だよ

昇進順は吉田 明彦 吉井 明久 ヨシ アキツテ順だ

最後の一つな絶対に呼ばなこと思つたが、最高で吉井かな？

僕の中の吉田さんの本名は、吉田明彦よしだあきひこってなつてるから

「一文字も間違えてあげていいだけ運が良いと思つよ？」

僕にとって君は吉田明彦よしだあきひこくんなんだ

「それなら吉田の方が合つてるよー。吉田よしだは良いけど明彦あきひこは止してくれー！」

明彦は一文字違いで吉田が一文字違うだからかな？

まあいいや、ならこつも通り吉田へ吉田へと呼ぶよ

「はあ、ならこつも通り吉田へ吉田へと呼んであげるよ

「間違つてゐること少しあくまで呼んでかけてくれー！」

もう慣れちゃったというか、馴染んじゃったんだね、吉田

「ねえ浪ちゃん？」

「なんだい、彩？」

「浪ちゃんって、全然背も伸びていないよね？」

いきなりそう言つ彩

そつか？ 僕としては結構高くなつたつもりだけど…

「俺が170ぐらいなら…仲野富はだれぐらいなんだ？」

代表も珍しく訊いてくる

うーん、あまり計つていなかね…

僕って代表よりかなり身長が低いから

代表が170なら…僕はその結構下か？

「ざつと見積もつて150ぐらいなんじゃないのかな？」

吉田くんは何センチなんだい？」

「僕は155は行つてると想つけど、浪都は

僕よりもかなり低いよね？ ならもう少しあげないと想つけど…」

これより下？ 流石にそこまでは…

だって、流石に僕でも木下くんよりは高いよ？

木下くんは140前後って聞いたから…なら僕は145ぐらいか？

「なら最低でも一四五ぐらいこと頃がよ~。」

「「低……」」

二人共声を揃えてそう突つ込む

「ひ、低くな~せー、これでもかなり成長したつもりやー。」

「でも一年年下の彩音ちゃんよりも背が低いよ！？ それではかなり成長したのなら浪都は元々は何センチだつたんだ！？」

そりゃあ… 一四〇ぐらいだけど…

「木下くんぐら~いだつたかな？」

「それだと五センチしか成長してねえじゃねえか！ これのど~かなり成長したつもり”だ！”

「う…なにも言い返せない…

「浪都は私と似て背が殆ど伸びないんだな。一年で五センチはさすがにちょっと拙いじゃないのか？」

雪姉さんも僕に追い討ちを掛けないでくれ

「それより、次の試合はまだなのか？」

終わってからかなり時間が経っているよね？

ならそれから始まつてもおかしくないんだけど…

「多分人数が多いから時間が掛かっているんだと思うよ。だつて、今回は個人戦だけで十人ぐらい出場してるし、チーム戦も入れるとかなりの人数になるよ？」

それとも、システムに不調があつたとか？

ん？ システム…不調…

ああ！ 忘れてたよ

教頭先生の協力をしないといけないんだっけ？

まあ、協力というよりも半ば強制的みたいだったけどね

報酬はそれなりに良かつたから構わないけど

「雪音先輩は召喚大会に出場してるんですか？」

吉田くんが雪姉さんに訊いている

「え？ まあ、受験の息抜きに出てみただけだけど、優勝できるとは思っていないよ。流石に召喚獣を操作するのは久しぶりだし、ブランクの大きさは少し厳しいかな？」

「かと言いながら雪姉さんは一回戦は勝つてるね

「相手が相手だつたからな…」

少し気まずそうな顔をして答えた

相手が多分よつほど弱かつたんだろうね、
考えただけでそんなに落胆するなんて…

一体誰だつたんだろ？

『ガラツ！』

すると、再び喫茶店の扉が開いた

入って来たのは、今度こそ姫路さんと島田さんのペアだった

やつと終わったみたいだね。かれこれ三十分ぐらいか？

「あ、姫路さん。どうだった？」

「なんとか勝ちました！ 美波ちゃんのサポートのお陰でした！」

チーム戦だからいつもやつだらうね

でも、島田さんだと足手あとになると思っていていたけど、
案外そうならないんだね

役立たずのまま終わると思つたら、チームワークで勝つてるんだもん

「やつらの方々は…」

琴吹姉妹を見ながら姫路さんはもじもじと訊いて来る

「イライラするなあ、もじもじするんじゃなくてほつときどき言つてく
れよ

鬱陶しいし、なによりイライラして仕方が無い

「僕の一つ違ひの姉と妹だよ。姉は三年生の琴吹雪音、
妹は一年生の琴吹彩音。雪姉さんはこう見えて先輩だよ?」

僕とあまり背が変わらないしね

「こいつ見てってどういう意味だよ? まあいか。私は
浪都が言ったみたいに姉の琴吹雪音だ。名字が違うのは触れないで
くれ」

手を差し出しながら自己紹介をする雪姉さん

またこのやり取りか…面倒臭いな

「ボクは浪ちゃんの妹の彩音です!」

またもやはしゃべ彩

まったく、子供は元気が有り余っているね

「へえ、浪都に兄妹が居たんだ? 言われてみれば似てるけど。
ウチは島田美波、浪都の…知り合ひ? です」

知り合ひ? そこまで仲が良いとは思わないけど…

「私は姫路瑞希です。一応は仲野町くんのクラスメイトです」

雪姉さんの差し出した手を握手する一人

改めて見ると、僕らはかなり違つね

雪姉さんと彩には僕が持つていて、『気持ち悪い雰囲気』が無いらしいから、

姫路さんもかなり気楽で挨拶している

僕ってそんなに重苦しいかな？

『じゃれより、個人戦の一回戦を開催したいと思います。各選手は至急会場へと向かってください』

チーム戦が終わったら、どうやら一回戦が始まるようだ

この様子じゃチーム戦と個人戦を交互にやるのかな？

それは好都合だ。それだとピンポイントで根本くんの援護が出来るし、思う存分手助けできる

「だつてさ。行こう、浪都」

雪姉さんも会場へと向かっていく

僕はその隣を歩く

久しぶりに雪姉さんと歩くなあ

まあ、こんな血の繋がつただけの他人と歩く
なんて御免だけね

「しかし、浪都も相変わらずだな」

「それは良い意味として受け取つても良いのか?」

「解釈はお前次第さ」

「でも、雪姉もんだつて変わらないね。その身體といふ……」

「おじおじ、身體のこと止してくれ」

「その”僕を気遣つよつな話し方”もね」

「う……」

足を止め、しづかに無言になる僕たち

雪姉さんは引き攣つた顔になつていぬけど、
僕は相変わらずの笑顔だ

雪姉さん……いや、琴吹先輩は何時まで経つても変わらないんだね

いい加減諦めた方が楽なのに……

「…まだそんなことをいつののか?」

よつやく先輩が口を開く

「それはこちらの台詞だよ。いい加減諦めたらどうなの？」

僕は今まで経っても変わる気はないし、君も止めたら？
琴吹先輩の目的はただ自分の労力と頭を無駄使いしてゐるだけだしね」

「諦めてたまるもんか。例えどれぐらい掛かるつと、
私は絶対にお前を元の浪都に戻してやる」

「前にも似たようなことを言つていた人が居たよ。結局は
諦めて、人一倍僕を憎むようになつたけどね。先輩はいつまで
持つのか、楽しみだよ」

そして、僕たちは再び歩を進める

お互い言葉は発しないし、かと言つてお互いを見ているわけでもない

ただ隣同士で歩くだけ

「…着いたようだ」

僕たちはようやく会場に着いた

観客席には既に多くの人々が座つてゐる

どうやら間に合つたようだね

「じゃあ、一回戦も頑張つて、琴吹先輩」

「ツ…！」

苦い表情のまま僕を後にする先輩

あはは、自分の実の姉をあんな表情にさせたなんて、
僕も凄くないか？ そこに痺れる憧れるう、つてなんないか？

え？ なんない？ そんなこと言わないでくれよ…

あれ？ 僕は誰に話しかけてるんだろう？

それより、なにか忘れていくよいつな気がするんだけど…

「ボクを置いて行かないでよオー！」

後ろから全力で走ってきた忘却された人物を
軽く避けると、僕は控え室へと向かった

僕どころか、琴吹先輩にも忘れられていたんだね

ドンマイ、彩！

十八問 肩と姉といひつかひやな姉弟（後書き）

いかがでしたか？

姉と妹登場

ちなみに今回からできるだけバカテストをやりたいと思います
ちなみにテスト 자체はつる覚えなので原作より
少々違うと思いますが、お許しください

実はこの前、感想欄にてアンケートの件でとても良い〜指摘をされました

実際、この三人が残りましたけどこの三人の中から本当に
カップリングが出来るのか？、という指摘でした

この指摘をされた後、数日ぐらい悩みました

そして、結論を出しました

アンケートを中止します

本当に申し訳ございません

ですが、アンケートは中止せてもらっています

考え抜いた末に、作者は「自分の文才じゃ無理」だと判断し、アンケートを中止させることを決意しました

”それならカップリングはどうなるんだ？”と
思う方もいらっしゃると思いますが、それは

小説投稿以前にチラッと思い浮かんだのにさせてもらいます

詳しくは、物語にて

最後に、沢山のご意見を頂いたにも関わらず、こんな
終わらせ方をしてしまい、本当に申し訳ございませんでした

（睡眠）

十九問 肩と物理との戦（前書き）

まず、大変遅くなつてしまつて本当にすみません

活動報告でも書きましたが、かなり忙しなつてしまい(r y

ですので時間のある今で意地で書き抜き、投稿しました

その所為でかなり雑になつてしましましたが、お許しください

では、十九話です

バカテスト

『アメリカ大統領の中で、絶大な人気を誇り、現在のオバマ大統領以前では最年少で大統領に当選した歴代アメリカ大統領の名を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『ジョン・F・ケネディー』

教師のコメント

『正解です。ケネディー大統領は歴代の大統領の中でも

最も人気があつたと言つても過言ではないでしょう。その暗殺までは軍ではなく経済的に合衆国を支え、国民から絶大な支持を持っていました』

吉井明久の答え

『（省略）大統領』

教師のコメント

『省略して誤魔化そうとしても無駄です』

仲野富浪都の答え

『John F Kennedy ちなみに短歌で僕が書いた意味が分かりましたか？』

教師のコメント

『なにも英語で書かなくても…それと、短歌の件は後で職員室に来てください』

十九問 肩と物理と二回戦

召喚大会個人戦第二回戦

運よく通過した者、実力で通過した者が参加できる試合

第一回戦を勝ち抜いた者が進めるその試合に、僕は出場していた

一回戦なだけあって通過しているのはAクラスやBクラスばかり
だけど、

中にはCクラスやDクラスの数名の姿が見える

おそらくは運で通過したと思つけど、一応は確認しておこうか

『それでは文月学園召喚大会個人戦第二回戦を開始したいと思いま
す!』

解説の人気がそう宣言する

波乱の召喚大会二回戦の戦いの火蓋が切つて落とされた

『最初は第一試合と二試合を同時に行いたいと思います!
観客の方々は好きな方に席を移動してください』

やつぱり少しづつやるんだね

前回は一辺にやりすぎてかなり混雑しちゃったから

『第一試合！ まずは赤コーナーから！』

お、どうやら僕の試合みたいだね

『予想外にも最低クラスからの進出者です！ 実力はまだ未可知数、一体なにを見せてくれるのでしょうか、一年Fクラス仲野宮浪都！』

Fクラスからの勝ち抜きもあって会場はザワザワしていた
マグレだと言う人、脅迫で勝ったと言う人、
八百長試合だとほざく人と様々だ

『そして青コーナー！ 巧みの操作技術で一回戦を勝ち抜いた、一年Cクラス堺健太郎！』

召喚フィールドに上がってきたのは、眼鏡が特徴的でいかにも真面目そうな男子生徒だった

多分今時で言う”がり勉”タイプの人だね

「やあ、僕はFクラスの仲野宮。お互い仲良く潰し合おうよ？」

「君みたいにマグレで勝ちあがつた人とは潰し合うまでも無いね。 そうなる前に君はボクに敗退するのだから」

随分と自信満々だね

自意識過剰？ 自己中心的？

まあ、僕が君のそのプラス思考をマイナスまで”墮おちとして”あげるよ

「へえ、随分と余裕だね。もしかして僕が相手だからかい?」

「仲野宮浪都、学園きつての肩で不真面目。勉強も口クにしない問題生徒」

僕が堺くんにやつ問うと情報が帰ってきた

内容からして僕の情報だと思つけど、それがどうかしたのかな?

「それがどうしたんだい? まったく地味な嫌がらせだね。するのなら

もつとストレートに貶して欲しいよ、鬱陶しいんだよ」

「フ、その余裕も直ぐに消してあげるよ。こんな肩にボクは負けないからね」

皆同じようなことを言つていたよ?

”こんな肩には負けない”だの”お前みたいな不真面目は潰してやる”とか

もっと独創さが欲しいものだよ、同じのを聞くと段々飽きてしまつんだよ

『では、科目を決めたいと思います!』

フィールドの画面にルーレットが映し出され、勢い良く回転し始める

それがゆっくりと止まると…

『物理です！』では、開始してください！』

また僕の苦手科目か、面倒だなあ

なんでこんなに運が悪いんだろう？

「うう…サモン」

「ん？ サモン」

僕が思わず唸ると、堺くんは不思議そうにこちらを見た

そして、僕の点数を見てニヤリと笑みを浮かべている

『Fクラス仲野富浪都 物理471点』

『Cクラス堺健太郎 物理429点』

「他の科目と比べると、どうやら物理は苦手のようだね

『もつともです、堺くん

今回の僕のこの点数はなにも誤魔化していない、正真正銘僕の物理

の点数なんだ

勉強はしたつもりなんだけどねえ…

現代国語が一番低いとは言つたけど、実際はこっちの方が低い

恥ずかしくて嘘を言いました、「ゴメンナサイ

今回はかなり調子が悪くて、しかも前夜に他の教科を勉強し過ぎて理数系がかなり疎かになってしまった

特に科学、数学、物理がとても低かった

それに対して堺くんは物理が得意らしく、400点台まで取っていた

苦手科目で相手の得意科目に勝つなんて…普通できないだろ？

そう…“普通”ならぬ

「君には丁度良いハンデだろ？」

「その余裕が果たしていつまで持つかな？ 女子生徒だからって容赦しないよ！」

お互いに挑発し合つ

つてその発言は聞を捨てならなによ？

僕は列記とした草食系男子や

それに真面目だと思つたけど、意外にも毒舌なんだね

『では召喚大会! 1回戦第一試合、始めてください。』

僕は訂正させよつとするが、解説の言葉に遮られる。

それと同時に、僕たちはお互いの召喚獣を一歩下がらせる

僕と堺くんの召喚獣が対峙している

僕は相変わらずの（以下略）

しかし、手に銃は無く、盾しか持つていな

僕の召喚獣の最大の利点とも言えるのは武器の豊富さだけど、
他には自分で武器を持たない設定にも出来る

IJの場合は遠距離ではなく完全なる近距離戦になるけど、
重い銃が無い分動きが素早い

いわば格闘戦用のスタイルだ

そして、堺くんの召喚獣

デフォルメされたCクラスの甲冑、そして細長い長剣

とてもベーシックな姿だ

手首に付いている腕輪の存在を除けば、ね

「行くぞ！」

その大剣を突きつけて向かってくる堺くん

「おつとつと

それを軽く僕は避ける

「少しさはやるようだね、だがそれもここまでだ！」

蹴りを放つてくる堺くんの召喚獣

僕に対して肉弾戦なんて、迂闊だよ？

その足を受け止めると、それを投げ飛ばす

「ぐッ！」

「やるね、でもこれで勝ったつもりになるなよー。」

挫けず立ち上がり、長剣を振り下ろしていく

体を軽く捻らして、それを避ける

「振動！」

『Cクラス堺健太郎 物理344点』

次の瞬間、長剣が地面に当たったと思つたら、召喚フィールド全域が地震にでも遭つたのかのように揺れ始めた

「ええ！？」

いきなりのことに思わず僕は動きを止めてしまつ

「隙あり」

「あ…」

その好機を堺くんが逃すはずもなく、すぐさま接近してきてその長剣で斬り裂いた

『Fクラス仲野富浪都 物理298点』

ちッ、今のは利き過ぎたな…

「これが君の腕輪の能力かい？」

「良く分かつたね。そうだ、点数は 80 点使用する度に長剣を振り下ろすことによって大きな地震を起しきることが出来るんだ」

「いいの、僕に教えても？」

仮にも敵だぜ？

迂闊？ それとも必ず勝てるっていう血脉陶酔から？

「80 点ねえ… 地味に高いんだね」

「それほどの価値があるんだよ、この腕輪の能力は。それに、まだまだ使えるぞ？ それに比べて君はもう 400 点を切っているから腕輪の能力が使えない、勝負あつたね」

堺くんの召喚獣はさつきの地震で捲り揚げられた地面に上った

腕輪が使えなくなつたからつて君の勝ちじゃない

そういうのを油断大敵だつて言つんだよ

「甘いね、爆破！」

僕がそう言つと、堺くんの周りの地面が爆発を起こした

足場を失い、堺くんの召喚獣はそのまま真っ逆さまに落ちていく

「なッ！？」

そして、地面に叩きつけられた

『Cクラス堺健太郎 物理301点』

やっと大ダメージを受けたね

これで点数差は無いに等しい

「くッ、何時の間に……」

「君が地震を使って直ぐに僕に攻撃した時だよ。見たところ君は上から田線の時が多いから、多分僕を見下してる。なら、思い切って僕を見下ろせるところに行かないかなあ～って思つたら見事的中したよ。ま、運も実力の内つて言ひし」

ラッキーで良かつたよ

「フン、なにかと思えば所詮は運便りか。なら警戒する必要も無い。そもそもCクラスの君がCクラスであるボクに勝てるはずが無いんだ」

おいおい、言ってくれるね

それなら僕にも考え方があるよ？

「油断大敵、この言葉を良く覚えておくといい。言つとくけど、僕の爆弾は一発ずつとは限らないぜ？」

再び爆発を起こす堺くんの召喚獣

それを見て本人は驚愕していた

が、その隙に僕は彼の懷に潜り込み、盾で彼の召喚獣を殴り飛ばす

『Bクラス堺健太郎 物理235点』

「なッ！？ 馬鹿な、君の召喚獣の点数は既に400点を切っているはずだ！ もう腕輪の能力は使用できなのはず！」

「あはは、もしかして知らなかつたの？ 僕は爆弾を出現させるには確かに20点使用しないといけなくて、400点を切つている時点でも「使えない」

「なら何故…」

困惑している堺くんを僕はあざ笑つ

まったく、この学園はなんで柔軟な思考を持つていらないんだろう？

長瀬といい、長谷川くんといい、この堺くんといい、なんであつとだけ作戦を捻ると困惑するんだろう？

「そんなの簡単だよ。一度で複数の爆弾を出現させれば400点を切ることなく使用できるよ」

僕の腕輪の能力を正確に言つてあげるよ

点数を二十点使用する度に粘着性の超小型爆弾を出現させる。威力は一つじや低いけど、何個も使用し、喰らわせることで大ダメージを与える

他にも、今回みたいに足場を爆破させて地面に叩き落して大ダメージを与えることも出来る

爆弾の数が低い時は隙を作るために使用もするつまり、僕の腕輪の能力の強さは単純に爆破させて与えるダメージ数多くの利用法があるから、僕の腕輪の能力は凶悪なんだじゃない

でも、こんなに低い点数じゃ一発が限界だけね

この爆弾は大量に使用するのが基本だ

故に一発だけ使えるなら、利用法は駆使するべきだろ？

「そうか、一度で複数出せばまだ大丈夫だね」

「どうやら堺くんも納得したようだ

「どうやらボクは君を甘く見ていたよつだ。ならもう手加減はせず、全力で君と戦つてやるつー。」

そつは言つてるけど、まだ上から目線だね

そんな彼とは逆に、僕は大してやる気も出さない

「あ、こういうタイプの人は一番やり難いなあ…

「別に僕は君と全力で勝負する気は無いんだけどね。

…あ！ 思い出したよ。僕、さつきから君に言いたいことがあったんだよ

会話した時から言いたかったことがあったんだけど、忘れちゃっていたんだよね。でも、今やっと思い出した

「言いたいこと？」

疑問符にそづり言ひ堺くん

「君つてさあ、ホラー映画で一番最初に殺されそうだよね？（笑）」

「」の会場の空気が凍つた

僕の発言に堺くんは固まる

「なんかさあ、君つて自分の力を過信してるでしょ？そういう人つてホラー映画では自分で怪物を倒そうとして殺されるつてパターンが多いよね？ いやあ、君に似合って過ぎて思わず笑っちゃったよ」

一見すれば嘲笑には少し中途半端だけど、プライドの高そうな人には「うう」微妙なのが一番効くんだよ

「…け…な」

堺くんは地面を向いたまま小声でなにかを言つが、静か過ぎて聞き取れない

もつとはつきりと大声で（笑）！

「S a y C l e a r l y! はつきりと喋つてくれ」

すると突然、堺くんがこちらに顔を上げる

その表情は怒りで染まっている

「ふざけるなアアア…！」

そして、物凄い勢いで突っ込んできた

感情任せの怒りの攻撃、まさに白滅パターンだ

「おつと」

それを軽々と避けると、堺くんの召喚獣が足を踏ん張つて立ち止

まり、

僕の召喚獣に向かつて剣を荒れ狂うように振り回す

「『Jのボクが！　君程度に！　そんなことを言われる筋合には無い
！』

お怒りだねえ、さつきまでの余裕は何処に行つたことやら…

「しんじオオ！…！」

『Jクラス堺健太郎　物理155点』

再び80点も使用し、地面が大きな地震を起こす

まさか、そんな攻撃が再び僕に通用するとでも思つてるのかい？

さつきは奇襲による攻撃だつたからビックリしたけど、
能力さえ分かつてればこんな地震痛くも痒くも無いよ

地震を起こし終わつた後、再び急接近して長剣を
振り上げているが、それを盾で防ぎ、そのまま堺くんの
召喚獣を投げ飛ばす

『Jクラス堺健太郎　物理97点』

投げ飛ばした場所が運よく先が鋭く尖つていた

地面だつたからなのか、かなり多くの点数を削られた

自分が80点も使用して使つた能力が

デミリットしか自分に与えていない事実に、

堺くんは益々ライラし始める

「ツ～～！！！ クソがア！ 振動！」

考えすら纏まつていないので腕輪の能力を使用する堺くん

勝負あつたね

現時点では堺くんの持ち点は97点だ。そして、腕輪を使用するには80点も消費しなければならない。つまり、腕輪を使った時点で堺くんの点数は僅か17点にまで落とされる

一応は元々の点数が対等の戦いではそれは自殺行為だ

でも、我を忘れている堺くんにそんなことは分かつていない

僕の狙つたとおり、自分で自滅行為をした

『Cクラス堺健太郎 物理17点』

でも、火事場の馬鹿力なのか、今まで以上の地震が発生する

規模で言つと、震度7ぐらいか？ 召喚獣の
再現とかもかなりリアルなんだね

「ワオ」

さすがの僕の召喚獣もバランスを崩して倒れてしまつ

それを期に堺くんの召喚獣は僕の召喚獣に急接近し、

殴る蹴るの暴行を何度も繰り返していく

『Fクラス仲野富浪都 物理85点』

大きな攻撃を何度も喰らってしまい、点数は一気に削られる

でも、これで僕の勝ちは確定した

「ククク、ボクに対してそんな口答えをするからだ！」

もう君の点数は僅か85点。削るのは容易い

あるえ？ もしかして、堺くんは今の自分の状況に気付いていないの？

「知らないの？ よく自分の召喚獣の点数を見ようぜ？」

「なんだと…？ なッ！？ なぜ17点にまで…？」

よつやく自分の点数がここまで落とされていてことに気が付く堺くん

「君は点数管理を怠ったねえ、後97点しかないのに
腕輪使っちゃって。でも、もうそんな細かいことは関係ないよ。
だつてもう僕の勝ちは決まってるんだから」

「もう勝ったつもりかい？ 悪いけど、君にはこれぐらい
の点数で十分なんだよ…」

へえ、この状況で勝てる気なんだ

逆にどんな作戦があるか見てみたいよ

でも、そんなのこ付かぬひまじ僕は気が長くない

それに、どう足搔いても僕はもう勝ってるんだから

いや、僕と会話してしまった時点で君はもう既に勝機を失っている
んだ

「やつぱぱ氣付いていない？　まったく…この学園に入っちゃ
ど二つもここつも鈍感だなあ

「…どう意味だい？」

そう訊き返してくれるが、僕はそれを無視する

「あ、会場の皆わん！　こんな駄目試合に付き合ってください、
本当にありがとうございます！　最後はこの私が最高に笑えるよう
な結末を

用意しましたので、どうかお楽しみください。それでは皆わん、
さよならあ～！」

Ciao! 「

そして、僕の召喚獣は足のホルスターから一丁の拳銃を取り出し、堺くんの召喚獣に向けて弾丸を放つ

いきなりの攻撃に一瞬ビックリしていたが、大した速度でないため簡単に避けられる

「はッ！ これが君の秘策なのかい？ 甘いね、この程度で勝とうなんて…」

すると、突然堺くんの言葉が途切れる

それはそうだ、急に自分の召喚獣が消えたのだから

『Cクラス堺健太郎 物理〇点』

堺健太郎くん、戦死

僕の勝ちだ

『な、なにが起きたのでしょうか！？ 急に堺選手の召喚獣が消えました！』

弾丸を避けたその瞬間、突然消えました！ 一体何が起こったのでしょうか！？』

解説席もかなり大騒ぎしている

簡単に説明しよう

僕の放った弾丸は、元々堺くんの召喚獣に向けて撃つてはいなんだ
僕は”堺くんの召喚獣の後ろにあつた壁”に向かつて撃つたんだ
あの壁は堺くんが始めて腕輪を使つたときから所々不安定になつて
いた

それを、やたら怒り狂わせて腕輪を使わせればどんづん
弱つていき、最終的には小さな弾丸一発で倒せるまでにね

それに、最後に地震を使ったとき、あのポジションに誘い込めたしね
そして僕は弾丸を放ち、壁を倒して堺くんの召喚獣を押しつぶした
わざわざだつて会話していたのも、あの壁から注意を逸らすため

そして、弾丸を放ちすぐさま離れ、文字通り彼を潰した

呆気ないフィナーレだ

「じゃあね堺くん、ともつまらない勝負だつたよ。
出来れば今度は楽しませる勝負をやせとね？」

笑顔でそう堺くんに言つ

まあ、仮面被りの笑顔だけ

啞然としている堺くんを置いて、僕は会場を後にする

まだ観客とかが意味も分からずザワザワしてたけど、大丈夫かな？

まあいいや

ん？ 待てよ…

僕は会場を離れてようやく気が付く

堺くんってまだ僕のことを見つけて思ってるよね…？

十九問 肩と物理とい回戦（後書き）

いかがでしたか？

今回はかなり雑になつてしましました

時間がなかつたんです！

多分また今度大幅修正をすると思いします

ちなみに戦闘も駄目文全開です。上手く書ける作者様が羨ましい…

バカテスでよく見かけますけど、バカテスのコラボって
読んでいて面白いですね

自分でもやつてみたい、とは思いますがこの主人公は
まったくコラボに向いてませんしね（笑）

次回の更新は… 今月中にしたいです

（睡眠）

一十問 肩と敗者と友達（前書き）

遅くなつてしまつて本当にすみません！

色々と忙しくなつて、全然執筆ができませんでした

かなりの駄目文ですが、どうぞ

では、一十話です

バカテスト

『「」ことわざの意味を書きなさい』

『会つは別れの始め』

姫路瑞希の答え

『出会つた時から別れが始まつていて、会つた人は
かならずいつかは別れてしまうという意味』

教師のコメント

『完璧です。これは人間の人生の中での切ない
現実を表現した言葉です。この言葉を胸に、会いたい
人とは精一杯一緒に居ましょう』

仲野富浪都の答え

『出会いは永遠には続かず、いつかは
かならず生き別れなどで居なくなってしまう
といふ人生の醜い現実を表した嫌なことわざ』

教師のコメント

『一応は正解ですが、どうかしたんですか?
このことわざを酷く嫌っているようですが…』

F F F 団全員の答え

『我々が居る限り恋愛は一瞬じゃあ―――。』

教師のコメント

『君達ほど”迷惑”が似合う人を先生は
見たことがありません』

一十問 肩と敗者と友達

いよいよ根本くんの試合が始まる

今まで僕は自分の試合があつたから観戦できなかつたけど、これでよひやく根本くんを直接サポートできる

それに、小物らしく既に幾つか”仕掛け”や”小細工”もしたしね

『それでは召喚大会チーム戦第一回戦を始めたいと思います！まずは赤コーナー！ Fクラスから出場、吉井明久と坂本雄一！』

おいおい、根本くんの相手は代表と吉田くんなのか？

まつたく、一回戦でいきなりの大戦かよ

『青コーナーは一年Bクラス、根本恭一と一年Cクラス、小山友香』

代表ペアと根本くんペアがお互い睨み合つていい

「坂本…吉井…！」

「よお、女装趣味のBクラス代表わん。今日は女子制服じゃねえのか？」

「あの田の畠尋、今こじで晴りあせてもいい？」

睨みあつてゐる根本くんと代表を大山さんと吉田くんが苦笑いを浮かべて見守つている

『それでは科目を決めたいと思いますー。』

画面上にお馴染みのルーレットが映し出され、回り始める

『…科目は数が あれ?』

一瞬ルーレットが数学で止まつたと思つたら、また急に不自然に回りだした。その様子に解説役は少し困惑している

『か、科目は英語です! では開始してくださいー!』

「なッ!? ちょっと待て! もう一度数学で止まつてたじやねえか
!」

得意科目だったのか変えられて怒り出す代表

あはは、これは僕が変えたんだけどね

召喚システムにハツキングして数学から英語に変えたんだよ。

前回の試合では代表はかなりの高得点を出したと聞いたけど、それは

代表が勉強して得た点数だ。ほんの数ヶ月で全科目を高くできたら苦労はない。多分理数系ばかり鍛えてるから、『ソリフ』、『英語』とかの点数

は多分低いと思つ。だから、根本くんが有利になるためにわざわざ
ハッキング
してあげたんじやないか。

「どうした坂本？ 惡氣付いたか！ サモン！」

「ちッ、 サモン！」

『Fクラス坂本雄一 英語73点』

『Fクラス吉井明久 英語53点』

『Bクラス根本恭一 英語199点』

『Cクラス小山友香 英語165点』

あらり、 前回の179点とはかなり差が出来てるね、 代表

「雄一…」

「なんだ明久？」

「勉強したんじゃないの？」

吉田くんは失望したような目で代表を見ている

でも、 そんな代表より君の方が低いよね？

「短い期間で全科目は無理だ！」

やつぱりね

それでもその代表より低い吉田くんってどうなんだろ？

「安心しろ明久、手は打つてある」

…なに？

すると代表はポケットから携帯を取り出し、誰かの掛け始めた

誰に電話してるんだ？

「もしもしし、ムツツリーーーか？ 例の物を出せ」

代表がそう言つと、突然会場に一冊の本が投げ入れられた

…あれは…？

「拙い…」

僕は急いで腰から拳銃を取り出し、その本を打ち抜いた

「なにッ！？」

その様子に代表は驚愕していた

まさか、あの本を使うなんて…

僕より汚くないか？

「お前…その本は…」

「ちっ、どうやらバレたらしいな…」

あの本は、Bクラス戦後に根本くんが女装された時に撮られた写真集だった。あの本を大山さんに見せて棄権させるつもりだったのか…僕より汚くないか…?

「どこまでも汚い真似を…！」

流石の根本くんも怒っている

「どの口から言つてやがる、肩が」

表情には見せていいけど、多分あの作戦が成功しなくてかなり動搖してるね

まつたく、真っ向勝負もしないでなに優勝狙つてるんだろう?

『早く試合を開始してください』

解説の人から試合開始を強いられるが、根本くんは舌打ちをし、大山さんの方を向いた

「坂本は俺に殺してくれ、吉井のことを頼めるか?」

「あんなFクラスの馬鹿コンビに負けるはずがないでしょ? 任せて」

根本くんは匕首を一対一で代表を潰すそ�だ

今回の根本くんは一味違うね。正々堂々
真っ向勝負で代表に挑むなんてこの前までの
根本くんとは大違いだよ

「行くぞ坂本！」

一つの大鎌を握り締め、代表の召還獣に突進する
根本くんの召喚獣

「甘え！」

だがそれを代表が難無く避けると、自身の召喚獣のメリケンサックで

根本くんの召喚獣の顔面を殴り飛ばした

「ちッ！」

『Bクラス根本恭一 英語131点』

クリーンヒットしたにも関わらずまだ100点も点数が
残っているところから、代表の点数の低さが災いしたね

「どうした坂本！ 利いてないぞ！」

大鎌を振り上げ、代表に向かつて振り下ろした

だが代表はそれを両手で受け止め、根本くんの召喚獣を
大鎌ごと投げ飛ばしていた

さすがは”悪鬼羅刹”って呼ばれていた代表だね。

戦闘スタイルも殆ど喧嘩に近い

「はッ！　てめえみてえな雑魚の攻撃なんぞ当たらねえよー。」

代表は根本くんの数々の攻撃の失敗を見て嘲笑っていた

一体どつちが屑なんだか…

「訊いておくが坂本、お前はともかく、吉井は大丈夫なのか？」

「どういふ意味だ？」

「言つておくが友香はCクラス代表だぞ？　あの吉井の貧弱な点数じゃ十分も持たないと思うが」

多分根本くんは大山さんがさつわと吉田くんを片付けて自分をサポートしに来てくれると思つているんだね

でも残念だよ根本くん

「てめえは明久を讃めすぎだ。いやらも言つておぐが、明久は観察処分者だぞ？」

「それがどうした？　そんなバカの代名詞の称号を持つてようが、関係ないぞ」

「馬鹿なのはてめえの方だ根本。観察処分者ってのは痛みがフィードバックするに加え、物質に触れることが可能になるんだ。

だから明久はいつも教師の雑用係にされてる

そう、観察処分者は教師の雑用係だ。人間より断然腕力のある召喚獣を利用して物を運んだりするんだ。つまり…

「だからそれがどうしたっていつんだ」

「分からねえか？なら教えてやるよ。観察処分者ってことはつまりな…」

学園一の操作技術を持つてるってことなんだよ！」

すると突然、大山さんの召喚獣が根本くんの方に飛ばされていた

『Jクラス小山友香 英語〇点』

「なッ！？ 友香！？」

「JJつちは終わつたよ、雄一」

「JJ苦勞だつたな明久。さあ、残るはJの肩野郎だけだ」

そう、観察処分者っていうのはつまり

召喚獣を使う時間と回数がほかの生徒と比べて
極端に多いんだ

極端に多いってことはその分経験が重なって、
操作技術は他を遙かに凌駕する

だから吉田くんの操作技術は僕も含めてこの
学園の誰よりも、天下一品なぐらい上手いんだ

『Fクラス吉井明久 英語53点』

例え点数が低かろうが、攻撃をひたすら避けて
自分だけダメージを与えていれば、どれだけ相手の
点数が高くても逆転できる

それが僕が集めた情報の中にあつた吉井くんの強さだ

「ぐッ！」

根本くんが唖然している隙に、代表は接近し
パンチを顔面に当てた

『Bクラス根本恭二 英語74点』

根本くんの点数と代表の点数が並んだ

「さ、坂本オオ！！」

根本くんはそう叫びながら代表に突進した

「決めるぞ明久！」

「オッケー！」

代表と吉田くんも根本くんに向かつて突進する

「もう一辺その頭を冷やして来い肩野郎！」

代表のメリケンサックと吉田くんの木刀が
根本くんの召喚獣の頭を挟み撃ちにし、文字通り
”サンドウィッチ”にした

『Bクラス根本恭一 英語〇点』

根本くんの負け、か…

『そこまでです！ 勝者はFクラスの坂本雄一と吉井明久です！』

そう解説が宣言すると、会場が歓声に包まれた

「あんな点数差があつたのに勝てたのか！」や、
「かつこよかつたぞ！」などの声が聞える

「てめえが正々堂々俺達に挑んできたのは
褒めてやる。だがな、それでもその他の人を見下す
ようなことをやめねえ限り、てめえは俺達には勝てねえよ」

代表は落ち込んでいる根本くんに向かつてそう言い放つ

あはは、面倒見の良い代表らしいと言葉だね

でも、それは間違ってるぜ代表？

別に根本くんは人を見下してるから勝てないんじゃない。

彼は僕と同じで、人生の敗者だから負けるのは仕方の無いことなんだよ

視点一 根本恭二

「クソ！」

会場から出た俺はそう叫ぶ

何故だ！？ 何故かてないんだ！？

そんな俺を見て、友香は冷たい視線を送つてくる

「さよなら、恭二」

「ちょっと待つてくれ！」

だが、そんな俺の悲願に友香は聞く耳も持たない

「言つたでしょ、この大会で優勝できたら
また付き合つてあげるって。でも、ようこもよつて
Fクラスの馬鹿コンビに負けたんだから、もうお終いよ

「待て、考え直してくれ友香！」

「あ、それと…」

友香は振り向かず俺に向かって「…」

「私のこと、名前で呼ばないで？」

その言葉を聞いた俺は膝から崩れてしまった

そして、友香の姿は見えなくなる

「…クソオオ…！」

「何でだ！ 何で俺がこんな目に…」

「やつほー！ 残念だつたね、根本くん」

「…なんの用だ、仲野宮？」「

俺の目の前に現れたのはチビの女子みたいな
顔立ちをしている男子生徒、仲野宮だった

召喚大会で俺に協力はすると言つたが、俺は
サポートなんてまったく感じなかつた

「まつたく、僕がせっかく科目を代表の苦手科目にしてあげたのに、なんで負けちゃってるんだよ？」

「…あれば、お前の仕業だったのか？」

急に科目が変わったり、坂本が

友香に見せようとした本が急に弾け飛んだのも

「！」名答。まあ、分かり難かったと思うけど。ちなみに君が出場した試合の全てに同じことをさせてもらひたよ

俺の出場した試合とは言つても、一試合しか出てないがな

そつか、そうだったのか

俺の得意科目ばかり選ばれるわけだ、全部こいつが細工していたのか

「まあ、それでも君は勝てなかつたけどね」

お前まで言つのか、仲野高

「まつたく…」おめでしてなんで勝てないんだよ？」

「黙れ！ お前になにが分かる！？ 僕でも分からいいんだよ、何故勝てないかが！ なにをやつてもいつもあの馬鹿コンビに負かされる！」

もつ何故かでないかまつたく分からないんだよー。」

お前みたいに出鱈目な点数なんて俺は取れない、そんなことも

「こつは分からぬのかー

「何故勝てないかって？ そんなの簡単だよ。

君はまだ幸せにならうとしているからだよ

幸せにならうとしているから、だと？

「なんだと……？」

「君はまだ自分が幸せになれると思つてゐるからだよ。なれるはずも無いのに、そんな叶えられない目標なんか持つてゐるから勝てる試合も勝てず、負け続けてしまつんだ」

ふざけるなー、俺が、幸せにならうとしてるからだとー？

俺だつて人間だ、幸せにならうとぐらに思つだりー。

「その話が本当なら、俺になにをじかつて言つんだよー。」

「認めるんだよ」

認める、だと？

「…認める？」

「そう、認めるんだ。自分は屑だ、負け犬だ、人生の負け組だ、社会の塵だ、絶対に他人と仲良くなれないって。自分自身に起ること

を全て認めるんだよ。争おうとするな、受け入れる

認めて、そして忘れよう。幸せの意味を忘れれば良いんだ。
そうすれば、”不幸せ”の意味も忘れられるからね。だって、
もし幸せを知らないなら、不幸なことが起こっても気付かないよね？
それを”不幸”だと感じないよね？だから忘れるんだよ。幸福も、
不幸も」

ツ…！

「認めて、忘れるんだ。そして、受け入れる。

不条理を、理不尽を、嘘泣きを、言い訳を、

いかがわしさを、インチキを、堕落を、混雜を、

偽善を、偽悪を、不幸せを、不都合を、

罵声を、流れ弾を、見苦しさを、みつともなさを、

風評を、密告を、嫉妬を、格差を、

裏切りを、虐待を、巻き添えを、一次被害を、

暴力を、恨みを、憎しみを、辛さを、

『全てを受け入れるんだよ』

そつすれぱきっと、僕みたいに不幸も辛く感じなくなるよ

… そりか

思わず俺は地面に座り込んでしまつ

受け入れること、か

上等だ

それなら仲野宮、受け入れてやるよ

不幸も、不幸せも、罵声も、全て受け入れてやるよ

それでこの辛さが少しでも無くなるなら、受け入れてやるよ

「どう? 気分は良くなつたかな?」

そうだ

なにもかも受け入れると、不思議と体が軽くなつて、すつきりした
気分だ

一気に全てを受け入れるのが、ここまではな

「ねえ根本くん?」

「なんだ仲野宮?」

「友達になろう!」

仲野宮は笑顔で自分の手を俺に差し出した

今まで俺を汚いと、肩だと黙ってきた連中とは違つて、仲野富のその手に、偽りは感じられなかつた

ただ純粹に、友達になろうとしているだけだ

同じ肩の仲間つてか？

「まつたく、とんでもない奴だよお前は」

俺はその手を受け取り、立ち上がつた

「じやあよんしけね、恭一くん」

始めての本当の友達が、笑顔でそつと黙ってくれた

一十問 肩と敗者と友達（後書き）

いかがでしたか？

根本くんには雄二・明久コンビとちやんと戦つもらいました

負けましたけど（笑）

そして、まさかの主人公と友情成立。主人公の心境はあえて書きませんでした

次回の更新は… いつになるか分かりません

今月までに投稿したいです…

（睡眠）

一一一問 習と喧嘩と異変（前書き）

またまた遅れてしまいました

不定期更新を早く脱したいです…

はあ…では一一話です

バカテスト

『日本の水泳のルーツはどこから来ましたか?』

姫路瑞希の答え

『元々は日本の武士が川を渡る際に使用した泳ぎ方が伝わったことが、水泳の始まりと言われています。それが現代まで伝わり、今の水泳に至ったと考えられています。』

教師のコメント

『正解です。あまり知られてはいない豆知識なので、知っているのに先生は驚きました』

土屋康太の答え

『柴田亜衣』

教師のコメント

『確かに、柴田選手は日本の誇る水泳選手ですが、不正解です』

仲野・面浪都の答え

『＼（^__^）／』

教師のコメント

『テストの回答用紙を落書きに使わないでください』

一一一問 肩と喧嘩と異変

『さあ始まりました召喚大会個人戦準決勝！　一回戦、二回戦を勝ち抜いた強豪たちによる一騎打ちがまもなく開始します！』

恭一くんと友達になつた次の日、やっと召喚大会準決勝が始まった

ここからは少し厳しくなりそうだ

準決勝に出場していることは、最低でも二連勝はしていることだ

なら、それほど強力な人たちが出てくることだよ

『第一試合を開始します！　まずは赤コーナー！これまで一試合、我々の度肝を抜くような策略で勝利してきた最低クラスの生徒、一年Fクラス、仲野宮浪都！』

名前を呼ばれると、僕はフィールドへ上がる

そこまで驚くような策略だったかな？

ちょっと頭を捻れば簡単に気付けるような作戦だったと思つけど…

『対する青コーナーは！　これまで圧倒的な点数と操作技術で快勝してきたまさに才女！　Fクラスのダークホース相手にどう戦うのでしょうか！　三年Aクラス、琴吹雪音！』

ツ…！

よつにもよつて琴吹先輩が相手かよ…

「どこか威圧的な雰囲気を出し、
なにか決意を固めたような眼差しで
琴吹先輩はフイールドに上がってきた

いつたい何を考えているのやら…

「一日ぶりだね先輩。なにがあつたの?
いつもよつ一段と増して凛々しい雰囲気だけど」

「あれから考えたんだよ」

「考えたのはなにか知らないけど、どうせ十分ぐらいだろ?
そつならかなり短いThinking timeだね」

「なぜ浪都がこうなってしまったか、なぜ浪都是ここまで私たちを拒絶するのかを、考えたんだ」

先輩は僕の言葉を無視して続けた

せめてなにか反応ぐらい見せよ!ぜ?

僕が虚しくなるからわ

「別に僕は先輩のことなんか拒絶してないさ。
いや、なんとも思つちや居ない。好きでもないし、

嫌いでもない。死んでほしいとも思ったことはないし、

生きて欲しいとも思ったことはない

「ツ……！」

僕の発言に表情が歪んだ

自分の考えを正直に言ったのに、なんで
そんなリアクションをとるのかな？

「……本当にそう思つてるのか？」

「はい？」

「本当に、私になにも感じないのか？」

「全然」

「ふざけるなー！」

琴吹先輩の表情は怒り、いや、激怒に染まった
表情で僕に怒鳴つてくる

気に障ることでも言ったか？

「おいおい、僕に怒るのはお門違いだぜ？ だって、これは先輩が望んだことだろ？」

「望んでなんかいない！ 浪都は勘違いをしてないか？」

「勘違いはそっちだろ？ 君達はもしかして本当に僕がなんとも思っていないうことを信じられないのか？」

「それを勘違いだと言つてるんだよ！ 私も、彩音も、誰も浪都がこうなることを望んでなんかいない！」

おいおい、僕を一人にした張本人がなにぬかしてんだよ？

君は忘れてるだろ？けど、僕は覚えてるぜ？

琴吹先輩が僕に向かつて、”消えろ”って言つたのを

「望んでないなら、あんな言葉は出ないはずだけど？ そもそも僕に消えろって言つたのは君達だぜ？ 僕はそのお望み通り先輩たちに着いては行かなかつたんだ。もし本当に先輩は僕と一緒に居たかったのなら、それは消えろって言った先輩の所為だ。つまり…」

『僕は悪くない』

無言になつてしまふ先輩

“どうやら思ひ出したようだね

あの日、先輩が僕に言つたこと

”消えろ”

あはは、今思えば、笑えてくるな

あの日からだつけ？ 僕にとつては、
最初で最後の”悲しい”つていう感情は

「浪都…」

唚然とした先輩を他所に、僕は解説の人たちに向き合ひ

「空氣を読んで待つてくれたのはありがたいけど、
いい加減初めてくれないかな？ もう飽きてきたし」

『す、すみません。では科目を決定します』

さつきまで唚然として会話を止めなかつた解説席がようやく
巨大スクリーンのルーレットを回し始めた

観客の人もそろそろ待ちくたびれたと思うじ、
野次が飛ばされる前に始めないとね

僕は慣れてるけど、先輩は慣れてないから

色々と面倒だし

先輩は耐えられるかな？

僕が十年間も味わってきた苦しみを

『科目は現代社会です！ それでは試験戦争、開始してくださいー。』
よつやく僕の得意科目が出てきたか

基本、僕は科目が得意か、不得意なんだ

”よくも無く、悪くも無い”なんて科目は無い

A l l o r n o t h i n g

翻訳すると”全て”か”なにも”だ

まさに僕の学力を表したことわざだ

「サモン」

「…サモン」

先輩のやる気のない声で、僕たちの勝負が
幕を開けた

『三年Aクラス琴吹雪音 現代社会401点』

Aクラスなだけあって、点数はそこそこ高い

装備は、体が軽そうな簡単な武士の鎧に弓矢だ。これは先輩の男勝りな性格の所為かな？

『一ノ年Fクラス仲野富浪都 現代社会6888』

今回は勉強した甲斐があつて点数はいつもより少し高い。思ったより上がらなかつたけど

やつぱりずっと勉強してなかつたブランクは厳しかつたかな？

「ツ…！ どれだけ変わつてもその出鱈目で理不尽な脳は変わらないんだな…」

「理不尽なんて失礼な、僕が偶々よく出来たんだから」「

「偶々、ねえ。偶々そんな点数が取れるなんて浪都ぐらいだぞ？」

褒め言葉として受け取つておこつか

「でも、その方が私もやる氣が出るし、ねツ！」

僕の返答も待たず、琴吹先輩は「」を放つてきた

「おいおい、戦闘狂つて本当に居たのかよ？」

まったく…そういうのは週間少年ジャンプのバトル漫画だけにして欲しいなあ

「バトル・ジャンキーって実際に居ると引くね。気持ちわりい」

軽いノリを持ったまま僕はその『矢を避けた

まだ本気ではないね、簡単にかわせるスピードだった

「お互いが遠距離系って、こいつうところだけは何気に似てるんだね。

僕の方がまだ断然に近代的だけど」

お互いが長距離戦型だから派手さには欠ける

元々観客の人たちは少年漫画のような

正々堂々の殴り合いっぽい感じの戦いを期待してるだろ？

「それもそうだな。でも、浪都が銃を持つてるからって『矢が負けるとは限らないぜ？』

すると、物凄いスピードで矢を弓に引っ掛け、さつきとは比べ物にならないぐらいの速度で『矢を放ってきた。やつと本気ってわけか？

はあ、僕としてはそのまま本気じゃないまま戦いたかったなあ

だって、相手が本気になると勝つのが難しいじゃないか

バトル漫画とかでは手加減して戦われると

屈辱的だ、って言つけど、手加減されてる方が

勝ち易くないか？ 勝ちは勝ちなんだから、そんな綺麗言より勝利を喜ぼうぜ？

「避けなければ、受けねばいい」

流石にあの速度はかわせないから、盾の後ろに素早く潜り込んでその一撃を防いだ

無理にかわす必要もないし、どちらかと言つと防ぐ方が安全だ

木で出来た矢が防弾の盾を貫くはずがないし、動作的にも素早いから確実にダメージを防げる

「矢を刺さつたまま放置してもいいのか？」

微笑みながら琴吹先輩は言つてきた

どういう意味で…

「炸裂！」

先輩がそう言い放つ

すると、さつきまで盾に刺さつた矢が突然爆発した

その衝撃で吹き飛ばされ、盾も壊される

『Fクラス仲野富浪都 現代社会614点』

「驚いたか？」
ちツ、腕輪の能力か

「色んな意味で驚いたよ。まさか先輩の腕輪の能力が僕と同じなんて」

まさか、発動キーこそ違うけど、腕輪の能力自体は僕とほぼ同じだ。爆破させる物質が違うだけだ

いや、どちらかと言うと先輩の腕輪の能力の方が戦闘に向いていそうだ

弓矢だから速度は僕の小型爆弾よりあるし、なにより狙いを定められることはかなり大きい

正確に爆破させたい箇所を選べるから、僕の超小型爆弾より性質が悪い

でも、僕の超小型爆弾は奇襲こそ最大の武器なんだ

奇襲や奇策で相手の同様を誘つて隙を作り、そこを攻めるなんとも嫌味な戦法だ

僕と先輩じゃ戦闘スタイル自体が違うみたいだ

「やつてくれたね。でも、先輩だつて油断できないぜ？ 爆破」

「……」

すると、今度は先輩の方が爆破した

これで先輩の腕輪の能力は封じた

「何時の間に……」

何時の間にって、さつきだよ

何度も言つけど僕の爆弾はただの爆弾じゃない。
目に見えない超小型爆弾だ

なら、気付かれず仕掛けることなんて造作でもないよ

「これで先輩は腕輪の能力は使えない。戦力半減だぜ?」

大きな武器を削つたのに先輩はまだ涼しい顔をしている

「そりでもないだよなあ～これが

僕の発言を無視し、先輩は弓矢を放ってきた

でも、なにかがおかしい

彼らなんでも弓の向かってくるスピードが遅すぎる

まるで子供が投げるバスケットボールみたいだ

それぐらいの超低速

「なにを考えてるんだ?」

「いじつことだよ。炸裂！」

すると、封じたはずの腕輪の能力が再び発動した

予想外のことにつぶつと焦った僕はモロに攻撃を喰らってしまった

『Fクラス仲野富浪都 現代社会439点』

ちッ、大ダメージか

「おいおい、400点切つても腕輪の能力が使えるって
どういう意味だよ？ まさか反則？」

「私がそんなことするわけないだろ。ま、これは
腕輪の能力の特徴の一つみたいなものだ。私はこの自分
みたいなタイプの腕輪の能力を”永続腕輪能力”と呼んでいる」

永続腕輪能力？

「なんだそれ？ 僕はそんなの聞いたこともないけど」

「私が勝手に命名したんだから当たり前だろ。こういう
タイプの能力は、一度でもいいから点数を支払えば、その
戦闘中は400点を切つても腕輪の能力が使用できるんだ」

『Aクラス琴吹雪音 現代社会250点』

おいおい、なんだよそのチート？

明らかに僕より使い勝手が良いじゃないか

まあ、そんな都合の良いだけの能力なんて存在しない

その証拠に使用するためには一気に百点も使用しなくちゃいけない

「本当に知らないのか？ 確か浪都の前回の
対戦相手もそうだったと思つけど…」

前回の対戦相手？

…ああ！あの物理得意のCクラスくんか！

名前は覚えてないけどね

彼も何気に入りタイプの能力だったんだね

「余計な情報は消去するようにしてるので。
君達の記憶とかをね」

「ツ…！まだそんなことを言つのか…！」

人間の人権の中には”発言の自由”といつものがあるんだよ

僕がなにを言おうが勝手なことだろ？

「それよりわざと試合を続けようぜ？こんな馬鹿馬鹿しい
試召”戦争”は出来るだけ早く終わらせたいんだ

「…相変わらず、お前は戦争が嫌いなんだな」

憎たらしげ田で僕を睨んでくる先輩

おいおい、なんで僕が睨まれなくちゃいけないんだよ？

争いごとが嫌いなのは素晴らしいことってこの前読んでた少年漫画に書いてあつたけど

「悪いか？」

「いや、ただ、滑稽だと思つてね

滑稽？

「どうこいつ意味だい？」

「浪都はいい加減私にお前を元に戻すのを諦めろって、過去を何時までも引き摺るのは見つとも無いつて言つただろ？」

「言つたけど、それが？」

「やうこいつ浪都こそ、過去を悔やんでるじゃないか

僕が…過去を悔やむ？

「私は知ってるぜ？ 浪都がこんな狂つてるのも、戦争が嫌いなのも、父さんと母さんの所為だって」

……

「あの二人が死んだ所為で、浪都はこんなにもぶつ壊れたんだろう？」

……

「でも、それは過去を引き摺ると同じじゃないのか？」

……

「なのに、私には過去を引き摺るなど言つてゐるナゾ、
言つてゐることとお前がやつてゐることは矛盾してゐるゼ。」

……

「いつまで黙つてゐるつもりだよ？ 悪いが、今回は
黙つても逃がさないぜ？ 私はもう決意したんだよ。
この試合に勝つてお前の目を覚ませるって」

……

「だから、その考えをまずは直せよ？ 世界は浪都が
思つてゐるほど醜くもないし、人間つていづのは美しい生き物だ」

視点一 無

琴吹雪音の発言は、仲野富浪都は一言も返さない

地面に俯いたまま表情も見せず、

吐息すらしているのかが疑問なほど身動き一つとらない

石の「」とく硬直した浪都に、雪音は意味が分からず不安が感じ、表情が少し強張っている

あくまで雪音は浪都を昔の浪都に戻すのが目的であり、この数多くの発言は自身の間違いを認識せらるためであつた

仲野宮浪都の一番大きな問題

それは”罪悪感の無さ”だった

自分は悪いとは思わず、罪悪感が一切ない

故に『僕は悪くない』といつ台詞が出てくる

そんな浪都に少しでも罪悪感を浮かばせようと、雪音は努力していた

「浪都がやつてていることは全然論理的ではないし、正しいわけでもない。屁理屈を並べてるだけなんだよ。

正直、自分でも満足してるのか？ 今の浪都の立場を。

皆からは恐れられ、嫌われ、憎まれる。そんな自分の状況と立場に、お前は本当ににも感じないのか？

それだけじゃない。流歌ちゃんとも喧嘩してるんだろ？
流歌ちゃんはお前にとつては唯一の親友なのに、なんで酷い

何をするんだよ？

いい加減もつ過去は引き摺るなよ。

「父さんも母さんも海都兄ちゃんも

גַּתְּנָהָרִים...

次々と語の雪音に、よつやく浪都が口を開く

「 そうやつて事実を否定するなよ。大丈夫だつて。
私も彩音も、流歌ちゃんだつて許してくれるから
」

「... も... れ」

なにかを呟いた

そして、ようやく浪都はその俯いた姿勢を正し、顔を雪音に向けた

さきほどまで状況が分からず騒いでいた観客の全員を
一瞬にして静寂にさせるほどの雄叫び

その瞳には憎しみと憎悪の塊が宿っていた

一一一問 肩と血壁と異変（後書き）

いかがでしたか？

今日は何度も別の日に書いたので、作風が所々違うかもしれません

そして、最後は主人公の激怒

中途半端な終わり方です…

（睡眠）

一一一|問 間と寺と壁と壁田を（牆壁や）

本当に遅くなつてすみません

文章では分からぬでしようが、自分は今土下座してます

ですが、やつと二十一問です

遅くなつたのに今回は短めです

本当にすみませんでした

では、二十一話です

バカテスト

『武将、織田信長が明智光秀により暗殺された場所はどこでしよう
?』

姫路瑞希の答え

『本能寺』

教師の「メント

『正解です』

吉井明久の答え

『寺』

教師の「メント

『君にしては頑張ったでしょう』

仲野富浪都の答え

『地球』

教師の「メント

『その答えは卑怯です』

一一一問 肩と姉と嘘吐き

この会場を振るわせるほどの咆哮

怒り、憎しみ、悲しみ、苦しみ、
あらゆる負の感情を掌握した表情

仲野宮浪都は、今までの醜態からは
考えられないほどの人格へとなつていた

冷徹な肩の面影はなくなつていた

「てめエ、さつきから言わせてみりや 全部僕がわりイとか
言つてるけどなア！ そんな僕をこんな風にしたのは何処のどいつ
だア？」

「何もかも人の所為にするな！ 自分の非も」

言い返す雪音を、浪都は遮りながら
言葉を続けた

「僕が言いてエのはそんなことじゃねエんだ！ てめエは
正論を言つてる気で居るかもしねエだろうが、僕から言わせて
みりア 僕を全否定してなにもかも自分が正しイツツてる風に聞え
るなア！」

子供のような、挑発するような口調はガラの荒い、
まるで殺人鬼のような口調へと変わっていた

そこまで変わり果てた浪都を見て、雪音はただ唖然とするだけだった

「そもそもなア！ 自分から消えろつつつてんのに
またまた自分から戻つてこいつつウのは都合が良過ぎるん
じゃねエのか、あア？ 僕にとつてアレがどんだけ深く
突き刺さったのかためエには分かるのか、えエ？」

「ツ…！」

言葉の連打に雪音は苦い表情を見せる

「だがまア、それでも僕にだつて非つつウのはある
とは自覚してんだけよオ。まあ、今は堪忍してやらア」

そいつ言ひつと、浪都は自分の顔を手で覆つた
しづらしくすると、その手を止める

そこの残つたのは、いつも通りの
幼い子供のような表情に戻つた浪都だった

笑顔で雪音を見つめながら立つていた

「琴吹先輩のあの言葉は僕に深く突き刺さつたんだぜ?
自分が最も信頼して、尊敬して、大好きだった姉に
言われたあの言葉はね。

知つてる？ 言葉つてね

刃物より

拳銃より

爆弾より

炎より

地震より

自然災害より

人を簡単に殺すことが出来るんだぜ？」

元の口調に戻つた浪都は、雪音に向かつてそう言つ

言葉の意味の強さ、怖さ、危険さを言い放つ

啞然とし、座り込んでしまう雪音にさうに置み掛ける

「琴吹先輩と彩が叔父さんと一緒に行っちゃつた
後、僕は一人で考えたんだ。

皆居なくなつた。大好きだつた家族がたつたの
一ヶ月で全員居なくなつた。

それは僕の所為なのか？ 僕が悪いのか？

そしてたどり着いた結論は、”全てが悪い”
つてことだよ」

「全てが……悪い？」

浪都の導き出した答えを聞き、雪音は疑問符だった

殆ど思考が停止してしまい、思考すらままならない雪音だが

「やう。漫画によく出でてくるような台詞だけビ、事陳。

父ちゃんを殺したのは、爆弾を仕掛けた
テロリスト、つまり戦争だ。

母さんを殺したのは、罵声を浴びさせた世間だ。

雪姉さんを僕と離れ離れにしたのは、
勝手に死んでいった母さんだ。

彩を僕と離れ離れにしたのは、彩を
連れて行つた雪姉さんだ。

全部皆が悪いんだ。

だから

『僕は悪くない』

止めと言わんばかり笑顔で言い放つ浪都

必死で言いかけた言葉がなんの意味も為さなかつた
事実に、雪音はただただ呆然としていた

地に座り込んでしまい、虚無の表情で浪都を見つめている

「どうしたの雪姉さん？ 僕の顔になにか付いているかい？」

そう問い合わせるが答えは帰つてこない

「あはは、こりゃ駄目だ。すみませーん！ 琴吹雪音さんは
もつ棄権だそりでーす！」

浪都は解説席そう告げた

試合などもう続けられる状況じゃないと浪都は判断し、棄権させた

そんな状態の雪音を見せた、浪都の最後の優しさだった

『え？ あ、はい！ Aクラス琴吹雪音棄権！ ょつて勝者は
Fクラスの仲野宮浪都です！』

「へーーー、じゃあ、行こうか雪姉さん」

浪都は雪音の座り込んでいる反対側の箇所まで
行くと、肩を貸しながら雪音を立たせる

そのまま会場を出て行つた

『おーおー、ふざけるなよー』

『試合はどうしたんだよ、つまんねェな！』

『棄権するんなら最初っから来るんじゃねェよ！』

そんな一人に、観客席に居た観客が嵐のよつな
クレームを浴びさせる

二人の姉弟に容赦なく放たれる罵声

そんな様子に、浪都はただただ笑顔で居るだけだった

視点一 仲野宮浪都

「…浪都は大丈夫なのか…あんなことずっとと言われて…？」

会場から出た僕に雪姉さんは弱々しく問いかける

でも、その声に生氣は無い

元々容姿は結構良くて、かなりモテてた
雪姉さんには似合わないような声に、僕は
少しキヨトンとしてしまった

あの力強い口調からは想像も出来ないね

まあ、心を叩き折ったのは僕なんだけど

「愚問だぜ雪姉さん

思い通りにならなくとも

負けても

勝てなくとも

馬鹿でも

踏まれても蹴られても

悲しくても苦しくても貧しくても

痛くても辛くても弱くても

正しくなくとも卑しくても

それでもへラへラ笑つてゐるが『僕』だ

「…そつか…」

僕の答えに一言頷いてから無言に戻る雪姉さん

それから一言も喋りひないまま歩く

「あ、長瀬！ 珍しく会いたかったよ」

自分の試合を待っていたのか会場に向かって歩いている長瀬を見かけた

僕の発言に少し顔を赤くしながらも、
「紛らわしいことを言うな！」って怒られた

あはは、なにを勘違いしてるんだろう？

「ちょっとこの人頼めるかな？」

「この人？ つて雪音さん！？」

肩に寄りかかるように歩いている雪姉さんを見て、
長瀬は驚きの声を上げた

「うん。少し体調を崩しちゃつてね。保健室にまで届けてくれない
かな？」

「良じけど……なんでアンタがしなこのよ?」

「僕はこれから少し用事があるんだ」

長瀬に雪姉さんを預けると、僕はとある待ち合わせ場所へと向かった

「あはは、『メンね恭一くん。遅くなつて』

僕は校舎の近くで待ち合わせしていた恭一くんにそう言った

まあ友達だし、伝えたいことはあったからね

「おいおい、ある意味凄い展開だったな。お前、
実はあんな性格なのかよ?」

「ああ、アレね。

あれはただの仮面を

「は?」

僕の言葉の意味が分からないのか、恭一くんは
疑問符にキョトンとした

「あんなのただの仮面被りや。僕があんな荒い口調なはずがないだろ?」

「つまり、やつさのは全て嘘だと?」

「うーん…微妙かな?あのリアクションは完全にオーバーだし、あんな口調なんてどんでもない。でも、雪姫さんの心を叩き折るにはあれが一番効果的だと思つんだ」

「お前…ホント最低だな」

「あはは、承知してるぞ。そもそも人類最低の僕たちはあんなことをしても無くすことなんてなにも無いんだよ。失うものがなにも無いんだから」

僕は悪くないしね

「ねえ恭一くん、チーム戦はどうなってる?」

「吉井と坂本が順調に勝つてるぞ。アイツ等は何気に強敵だしな」

直に戦つた恭一くんだからこそ分かるんだね

坂本くんの作戦と頭脳、そして吉井くんの機動力

この一人が揃えば恐らくは敵無しだ

だから僕は彼等と戦いたくないんだ

今回は勝たないと拙いしね

「やつぱりね、あの一人は所謂”主人公”みたいな人たちだから、勿論強者だ。でもだからって、正々堂々戦わなくてもいいんだぜ?」

あの一人を倒す策ぐらいい持つてる

それこそ、最も最低で屑で善悪だ

「正々堂々?」

「実は僕、ここに教頭に色々と依頼されてるの。それをこなせば報酬はそれなりに貰える。無論することはかなり危険で犯罪染みていくけどね」

「おいおい、そんなことやって大丈夫なのかよ? 縛らお前でも…」

恭一くんは僕を心配したような目で見てくれる

「だいじょーぶ。僕を甘く見ないでくれよ?

それに、たとえ捕まつても僕は失うものなんてなにも無いしね」

もう既に、僕の人生で大事なものはなにもかも無くなっているしね

「お前…改めて言うが最低な奴だな」

「最低で底辺で屑だ。でも、

それでも僕は悪くない。

悪いのは世界であつて、僕じゃない

理不尽で、不条理で、不公平で、同じく最低なこの世界

腐った世の中のなにもかも受け入れ、
認めるのが僕たちだぜ？」

戦争で溢れ、犯罪に囲まれ、偽悪に
埋もれ、不平等に生きていく

それがこの世界さ

努力すればなんでもできる、これは綺麗言だ

努力なんて才能ある連中の言い訳に過ぎない

才能があるから努力して結果が出せる

才能があるから物事を成し遂げることが出来る

才能があるから成功することが出来る

それを自覚していない人間ほど性質たちの悪いものは無い

そんな不公平な世界を、僕は別に
恨んじやしないさ

僕を見てるとちう思つだらうけど、事実僕は

世界を憎いことなんて思つたことは無い

たとえ不平等だろうが、不条理だろうが、
荒唐無稽だろうが、支離滅裂だろうが、自分勝手だろうが、
僕はそれでもそんな世界は嫌いじゃない

負の側面全てを受け入れ、愛し、悲しむ

それこそ、僕たちであつて、『僕』でもある

狂つてゐるって言つてみなよ

なら返してこいつひつてあげるよ

こんな腐った世界で幸せそうに生きてる君たちの方こそ狂つてゐる

I-11-1問 屋と誘拐と決勝戦（前書き）

時間軸があまり分からなかつたので、Iの
小説では作者の都合で進めさせてもらいました（泣
ですので今話から誘拐事件が発生します

とは言つても主人公は楽観者になると思ひますが…

では、二十三話です

バカテスト

『Iの文章の日本語訳を書きなさい

Today is my father's birthday

姫路瑞希の答え

『今日は父の誕生日です』

教師のコメント

『正解です。簡単すぎましたね』

土屋康太の答え

『母』

教師のコメント

『Birth dayも訳せなかつた貴方の常識に

先生は驚きです。それと母ではなく父です』

仲野富浪都の答え

『この文章の日本語訳』

教師のコメント

『後で職員室に来るよ』

I-II-III問 間と誘拐と決勝戦

「 やつこじょうと…」

暗い部屋の中でそんな独り言を呟く

手には一冊のノートパソコン

僕はそれを無造作に開け、既にそこには
保存しておいたデータを開く

そして、ポケットから一本のディスクを取り出すと、
パソコンの中に入れ、一つの内容がスクリーンに飛び出す

```
『WARNING! THIS DISK CONTAINS A
HARDWARE THAT MAY
DAMAGE THE RECEIVER DO YOU STILL
WANT TO SEND THE MESSAGE?』
```

YESとNOと二つ選択肢が出てくる

僕は迷うことなくYESを選ぶ

すると、やじドヤリ警告する文字が、

今度は赤い字で、やうこは大きく掲示される

『THIS MESSAGE IS CONTAMINATED
WITH A COMPUTER VIRUS,
DO YOU STILL WISH TO CONTINUE?』

JJも同じく迷い無しにYESと答える

『MESSAGE SENT』

JJの一つの言葉を見ると、僕はホッと
溜め息を吐いた

でも、ジッとしてられない

僕はすぐさまフォルダに入り、さっきのメッセージに
関するデータを全て完全に消去した

通常、たとえデータを削除してもまだその切れ端などは
パソコンに残っているんだ

だから、削除したデータをもう一度消去しないといけない

パソコンを調べられたら一発でバレてしまう

もしバレたら僕は終わりだ

最後まで完全に消去したのを見届け、
すぐさまその場所を出る

暗い部屋の出口である扉を開け、明るい
表の世界へと足を踏み入れる

太陽の光がさつままで暗い部屋の中に居た
僕の目を眩しく照りす

被つていた帽子と黒のパークーを脱ぎ、汗を拭く
なぜこんな怪しいことをしてるとこつと

教頭の仕事さ

今までずっと忘れていた所為で教頭に怒られて、
今日中に始めるとい殺すぞ的なこと言われちゃった

…悪ふざけしたことを探るよ

でも、そんな感じに怒られたから僕はやつと行動を起こした
なにをしたかは…まだ秘密だぜ？

まあ、せつきの警告の連打で丸分かりだと思つけど

「…仲野富？ こんな所でなにしてるんだよ？」

突然声を掛けられ、思わず少し驚く

後ろを振り向くと、何故か汗がダラダラと流れてい
焦りの表情を浮かべている代表が立っていた

「誰かと思えば代表じゃないか。まったく、脅かさないでよね」

「黙つて俺の質問に答えろー。」

何故かツンツンしている

なにか気に食わない」とでもあったのかな?

まあ、僕の知ったことぢやないけど

「散歩や」

「ひっ、見るからに座じいがてめえのことだ。
白状しちゃうこねえな」

疑うのも無理は無い

僕は手に真っ黒のパーカーに帽子、そして
怪しげなノートパソコンを持ってくる

明らかに不信人物だけど、代表は諦めたような声を漏らす

「どうしたんだいそんなんに流れて?」

「誘拐だ! てめえは知らねえと思うが、同じ
クラスの姫路、島田、そしてあの島田妹が誘拐されてんだ!」

誘拐?

…やばい、心当たりがある

てこうか、僕が引き起こしたことじやないか

まあ、そんなことを代表に言つまど僕は馬鹿じやないけど

「へえ、それは大変だね」

「そんな軽いことじやねえんだよ！ ムツツリーーーに
携帯電話のGPSを探知させようとしても電波が妨害されるつて
言つてるしよオ！ 僕には何がなんだか…」

電波が妨害されてる…か

大成功

「まあ、頑張つて。僕もなにか見たら君に報告するからさ」

「てめえも手伝えクソが！」

「物事の頼み方を学ぼうぜ？ 僕はこれから
個人戦の決勝戦があるんだ、だからそんな時間は無い」

「試合どころじやねえんだぞ！ 誘拐だぞ、犯罪だぞ！
てめえは犯罪が嫌いじやねえのかよ！」

「でも、僕は善良な一般市民だぜ？ 僕になにをしろつて
いうんだよ？ じつことは警察に任せて、一般人は引き下がつ
てないと」

「警察に連絡できねえんだよ！ もししたらあの三人の安否が…」

まさに泥沼状態だね

彼の話によると現在は吉田くん、土屋くん、そして代表の三人で全力で探しているらしいんだ

ま、僕は手伝わないけどね

仲間を売るような行為を、僕がするわけないだろ？

「それならもうお手上げだね。最低限の覚悟はもつた方が良い」

「ちッ、てめえは相変わらず役立たずの塵だな！」

代表は舌打ちをし、走り去っていく

あの一人の試合はまだまだ始まらないらしく、
時間に余裕がある

でも、僕ら個人戦メンバーは最初の方に試合が始まる

だから僕には時間が無いんだよ

まあ、あの犯罪者どもの居場所を教えるなんて三秒も掛からないん
だけどね

でも、代表達には協力しない

僕は僕のやり方での連中を肅清する…

『召喚大会個人戦もいよいよ大詰めの時です！ 数多くの白熱した試合がありましたが、それも今日で終わりです！

召喚大会個人戦、決勝戦を開催します！』

歓声が一気に上がる

会場には今までとは比べ物にならないほどの人數が座っていて、それに比例しボリュームも大音量に

青空には色々と花火的なものが打ち上げられていて、まるでお祭りだ

それほどこの召喚大会が重要なんだね

『ちなみにもう一度言いますが、優勝者にはこの特別の腕輪を差し上げます！』

解説が掲げたのは召喚獣の付ける腕輪では無く、学生が付ける腕輪

元々は学園長の試験用の新型装置

僕の教頭に与えられた使命は、これを取つて彼に渡すことだ

なんでもこの腕輪には欠点がある

その欠点を告発することで、まだ出来上がっていないような技術を提供する学園とレッテルを貼り、学園を滅茶苦茶にしようつてわけだ

教頭も中々悪いことをする

ま、僕は報酬さえもらえればいいんだけど

『ではまず赤コーナー！　圧倒的な実力で今までの大戦相手に勝利してきた！

二年Aクラス、長瀬流歌！』

階段を駆け上がり、フィールドに現れたのはいつもより凛々しい表情の長瀬

様子はいつもと違うようだけど、なにがあつたのかな？

『対するは青コーナー！　奇想天外な策略と点数で今まで我々の仰天する試合を見せてきました！

二年Fクラス、仲野宮浪都！』

名前を呼ばれ、僕は階段を上り、フィールドへと姿を現す

長瀬は僕に気付き、じつちを向く

いつもだとここで憎たらしい目で睨んでくるはずだ

なのに、今日は違った

なんというか、優しい表情と云つか、とにかく複雑そうな表情だ
まるで、何かに哀れんでいるかのように

「長瀬！ 一田ぶつ～！」

笑顔で手を振るが、無言を返される

ちえ、せめて反応ぐらい見せてくれてもいいのに…

『ではこれより試験召喚戦争を始めたいと思います！
まずは対戦科目から！ 今回の科目はルーレットでは無く、
我々に決定させもらいます！ 決勝戦ということもあります
から、総合点数で勝負してもらいます！』

総合点数、ねえ

純粹な点数なら、まだ分からぬ

長瀬が本気でテストを受ければ軽く3000点以上は取れる

今回も僕との対戦もあって、多分かなり
本気で受けたと思う

なら点数は高い3000点か、低い4000点…

それに対して、僕はそれほど真面目に受けていない

勉強にやしたけどそれほど本気では無かつたたし、一部の科目に至つてはテストすら受けていない

テストすら受けていない科目は三つぐらいだから…
多分低い400点が限界かな？

得意不得意も考慮し、不得意の場合を300～400点前後で得意を700～800点前後だとすると…それぐらいかな？

『では、開始してくださいー!』

「「サモンーー!」」

長瀬が僕に一言も話すことなく、勝負が始まつた

『Aクラス長瀬流歌 総合点数4029点』

へえ、彼女にしては上出来だね

あの次席の久保田くん(?)を超えてるじゃないか

あれ、少し余計な字があるような…

まあいいか

彼とは殆ど会わないし

『Fクラス仲野富浪都 総合点数4170点』

ううう、低すぎるだろ…

4000点台か…恥だぜ

『な、なんとこいとでしょ、点数がほぼ互角ですー。』

「うわいなあ解析の人…

僕は今とてもショックを受けているんだから

しかし、一部の科目でテストを受けないのは拙かつたかな？

でも、流石に僕も総合科目じゃなくて総合点数が
出でくるとは思わなかつたんだよ

なんでこいつ時に限つて総合科目にしないんだよ…

今回はそれなりに出来たつていうのに…（総合科目5305点）

「随分調子が良かつたみたいじやないか。うん、
かつては勉強を教えた有人としては鼻が高いよ！」

思いつきり嫌味を込めながら笑顔でそう告げる

でも、長瀬は無言のままなんの反応も見せない

一体どうしたんだろ？

僕が言えた台詞じゃないけど、今日の

長瀬は少し気持ち悪いよ…

「…隨分と”かつては”の部分を強調するのね」

やつと長瀬は口を開いた

「事実を口にしてなにかいけないの?」

「いや、浪都は隨分と執念深いのね、って思つただけよ」

「はい?」

彼女の言葉に僕は首を傾げる

「ほひ、なにボケッとしてるのよ?」

「うわつとー」

彼女は僕が疑問符を浮かべてる隙に切りかかってきていた

いぐりなんでも卑怯じやないの?

僕だつて人のことは言えないと

「不意打ちつていうのは当てないと意味が無いんだぜ?」

「分かつてゐるわよ、そんなこと。別に攻撃が当てたかったわけじゃないし」

”フン”と鼻で笑い、首を逸らす長瀬

負け惜しみはダサいぜ？

「「」ちからも行かせてもらひつねー！」

僕の召喚獣が銃を構え、長瀬の召喚獣に発砲する
だが長瀬は命中率が悪い僕の銃撃を難無く避けると、再び接近して
きた

それを許さんとばかりに腕で払おうとするが、一瞬で逃げられる

『一年Aクラス長瀬流歌 総合点数3529点』

あれ、点数が減ってる？

僕の攻撃は当たってないのに…

なにもしていないのに点数が減っているひとつはまさか…！

慌てて僕は辺りを捜索するが、別段変わった様子は無かつた

僕の思い違い…か？

「なにキヨロキヨロ周りを見るのよ？」

それを見た長瀬がそう言つ

「大方私が腕輪の能力を使つたとでも

思つてるんでしょう？でも、それは残念だったわね

もう既に手遅れよ

「ツ…！」

緊張が走る

僕は彼女の腕輪の能力を知らない

前回戦つた時でも彼女は腕輪の能力を使用しなかつた

つまり、なんの検討も付かないんだよ

「足元を見てみたら？」

言われるがままに、召喚獣に足元を覗かせる

すると、僕は戦慄した

僕の召喚獣の周りには無数の黒い影が広がっていた

どれも金属で出来ているのか、怪しく輝いている

「それはなにか知ってる？」

急に長瀬の召喚獣が僕の召喚獣の目の前に来る

この状況の唖然としていた僕はまったく反応できない

吸い込まれるように長瀬の召喚獣は僕の
召喚獣に蹴りを放つ

幸い防弾チョッキの所為でダメージは無かつたけど、
バランスを崩した僕の召喚獣は無造作に倒れる

そして、地面に着いた瞬間…

『Fクラス仲野富浪都 総合点数3681点』

僕の召喚獣が大ダメージを受ける

まきびし
「撒菱」

まきびし？

まきびしつて、あの忍者がよく使う道具の…

「その物体一つ一つが刺さると大ダメージを与える
撒菱で、一個につき十点を使用しないといけない。でも
高額な分、効果は魅力的よ」

ちりッ、まんまと罠に嵌つたってわけね

この僕が本当に長瀬に翻弄されるなんてね

それに、今日の長瀬は様子が違う

なんなんだろう、もし僕をこんな状況に追い詰められたなら、
いつもなら優越感に浸りながら僕を見下し笑ってるはずなんだけど

今回は違う

彼女はまつたく笑つていな

すく悲しそうで、辛そ

「ちッ、面倒な腕輪だね」

「アンタに言われたくはないわよ。その腕輪の能力、
相当応用が広いんだし」

「一応はね」

「使いなさいよ？」

「はい？」

一瞬彼女の問いの意味が分からなかつた

「だから、その腕輪を使つて言つてんのよ」

彼女が自ら僕の腕輪の能力を使つて、なにを企んでいるんだ？

「嫌だね。絶対にか企んでるでしょ？」

「なにも企んでないわよ。私はただ、もうアンタには
負けないことを見せ付けたいだけよ」

自信気にそう言つ

へえ…

「そこまでお望みなら、こによー 使ってやるよー。」

「ひなつたら自棄さー。」

『Fクラス仲野寅浪都 総合点数2681点』

今回は特大の50個も使用した

もひ自分でも自棄なのは直覚してゐ

でも、今回はなんか調子悪いんだよね

「なッ！？」

今まさに投げつけようとした時、予想外の自体が起つた

さつきまで数メートル離れていた彼女の召喚獣は、
なんと僕の直ぐ目の前まで迫つていて

爆弾は確かに設置した

でも、突然の出来事の所為で半分ぐらいがこちりこも…！

「やつてくれたじゃないか…！」

「こうなればお互い大きく点数を削られることになる。
残存点数の少ないアンタにとつては悪いんじゃないの？」

アンタの能力は封じた！」

しかも、彼女の召喚獣が僕にしがみついていて離れない

恐らく今爆弾を起爆させれば僕の被害だけでなく

彼女の被害まで僕に降りかかる

それはあちらも同じだけど、この場合点数が少ないのは僕即死レベルでは無いにしろ、点数はかなり持つて行かれるのは明白
だった

つまり、彼女は僕の腕輪の能力を封じたつもりなんだらう

でも…

「そこが甘いんだよ二下ー！」

僕は臆すことなくスイッチを押した

そしてその瞬間、辺りは大きな爆発音と煙に包まれた

I-III回 屑と誘拐と決勝戦（後書き）

いかがでしたか？

誘拐事件の時間軸が分からないので、決勝戦前といつ形にしました

ちなみに更新速度は少しずつ取り戻していくつもりします

（睡眠）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1986v/>

肩と天才と戦争嫌い

2011年11月27日19時52分発行